



BEA WebLogic Server™

WebLogic JMS プログラマーズ ガイド

BEA WebLogic Server バージョン 6.1
マニュアルの日付：2002 年 6 月 24 日

著作権

Copyright © 2002 BEA Systems, Inc. All Rights Reserved.

限定的権利条項

本ソフトウェアおよびマニュアルは、BEA Systems, Inc. 又は日本ビー・イー・エー・システムズ株式会社（以下、「BEA」といいます）の使用許諾契約に基づいて提供され、その内容に同意する場合にのみ使用することができ、同契約の条項通りにのみ使用またはコピーすることができます。同契約で明示的に許可されている以外の方法で同ソフトウェアをコピーすることは法律に違反します。このマニュアルの一部または全部を、BEA からの書面による事前の同意なしに、複写、複製、翻訳、あるいはいかなる電子媒体または機械可読形式への変換も行うことはできません。

米国政府による使用、複製もしくは開示は、BEA の使用許諾契約、および FAR 52.227-19 の「Commercial Computer Software-Restricted Rights」条項のサブパラグラフ (c)(1)、DFARS 252.227-7013 の「Rights in Technical Data and Computer Software」条項のサブパラグラフ (c)(1)(ii)、NASA FAR 補遺 16-52.227-86 の「Commercial Computer Software--Licensing」条項のサブパラグラフ (d)、もしくはそれらと同等の条項で定める制限の対象となります。

このマニュアルに記載されている内容は予告なく変更されることがあり、また BEA による責務を意味するものではありません。本ソフトウェアおよびマニュアルは「現状のまま」提供され、商品性や特定用途への適合性を始めとする（ただし、これらには限定されない）いかなる種類の保証も与えません。さらに、BEA は、正当性、正確さ、信頼性などについて、本ソフトウェアまたはマニュアルの使用もしくは使用結果に関していかなる確約、保証、あるいは表明も行いません。

商標または登録商標

BEA、Jolt、Tuxedo、および WebLogic は BEA Systems, Inc. の登録商標です。BEA Builder、BEA Campaign Manager for WebLogic、BEA eLink、BEA Manager、BEA WebLogic Collaborate、BEA WebLogic Commerce Server、BEA WebLogic E-Business Platform、BEA WebLogic Enterprise、BEA WebLogic Integration、BEA WebLogic Personalization Server、BEA WebLogic Process Integrator、BEA WebLogic Server、E-Business Control Center、How Business Becomes E-Business、Liquid Data、Operating System for the Internet、および Portal FrameWork は、BEA Systems, Inc. の商標です。

その他の商標はすべて、関係各社がその権利を有します。

WebLogic JMS プログラマーズ ガイド

パート番号	マニュアルの日付	ソフトウェアのバージョン
なし	2002 年 6 月 24 日	BEA WebLogic Server バージョン 6.1

目次

このマニュアルの内容

対象読者.....	x
e-docs Web サイト.....	x
このマニュアルの印刷方法.....	x
関連情報.....	xi
サポート情報.....	xi
表記規則.....	xii

1. WebLogic JMS の概要

JMS とは.....	1-1
WebLogic JMS の機能.....	1-2
WebLogic JMS のアーキテクチャ.....	1-4
主要な構成要素.....	1-5
クラスタ化機能.....	1-5
WebLogic JMS の拡張機能.....	1-7

2. WebLogic JMS の基礎

メッセージング モデル.....	2-2
ポイント ツー ポイント メッセージング.....	2-2
パブリッシュ / サブスクライブ メッセージング.....	2-3
メッセージの永続性.....	2-4
WebLogic JMS のクラス.....	2-5
ConnectionFactory.....	2-6
Connection.....	2-8
Session.....	2-9
非トランザクション セッション.....	2-10
トランザクション セッション.....	2-12
Destination.....	2-12
MessageProducer と MessageConsumer.....	2-14
Message.....	2-15
メッセージ ヘッダ フィールド.....	2-15

メッセージ プロパティ フィールド	2-20
メッセージ本文	2-21
ServerSessionPoolFactory	2-22
ServerSessionPool	2-22
ServerSession	2-23
ConnectionConsumer	2-23
3. WebLogic JMS の管理	
WebLogic JMS のコンフィグレーション	3-2
WebLogic JMS のクラスタ化のコンフィグレーション	3-3
JMS クラスタ化の動作原理	3-3
WebLogic JMS のモニタ	3-5
WebLogic Server の障害からの回復	3-5
4. WebLogic JMS アプリケーションの開発	
アプリケーション開発フロー	4-2
必要なパッケージのインポート	4-3
JMS アプリケーションの設定	4-4
手順 1: JNDI で接続ファクトリをルックアップする	4-6
手順 2: 接続ファクトリを使用して接続を作成する	4-7
手順 3: 接続を使用してセッションを作成する	4-8
手順 4: 送り先 (キューまたはトピック) をルックアップする	4-10
手順 5: セッションと送り先を使用してメッセージ プロデューサとメッ セージ コンシューマを作成する	4-12
手順 6a: メッセージ オブジェクト (メッセージ プロデューサ) を作成 する	4-15
手順 6b: 非同期メッセージ リスナ (メッセージ コンシューマ) を登録 する (オプション)	4-16
手順 7: 接続を開始する	4-17
例: PTP アプリケーションの設定	4-18
例: Pub/Sub アプリケーションの設定	4-21
メッセージの送信	4-24
手順 1: メッセージ オブジェクトを作成する	4-24
手順 2: メッセージを定義する	4-24
手順 3: メッセージを送り先に送信する	4-25
メッセージ プロデューサ コンフィグレーション属性の動的コンフィグ	

レーション	4-29
例 : PTP アプリケーション内でのメッセージの送信	4-30
例 : Pub/sub アプリケーション内でのメッセージの送信	4-30
メッセージの受信	4-31
メッセージの非同期受信	4-32
メッセージの同期受信	4-32
受信メッセージの回復	4-33
受信メッセージの確認応答	4-34
オブジェクト リソースの解放	4-35
ロールバックまたは回復したメッセージの管理	4-36
メッセージの再配信遅延の設定	4-36
メッセージの再配信制限の設定	4-38
メッセージ配信時間の設定	4-39
プロデューサに対する配信時間の設定	4-39
メッセージに対する配信時間の設定	4-40
配信時間のオーバーライド	4-40
存続時間の値との関係	4-44
接続の管理	4-44
接続例外リスナの定義	4-44
接続メタデータへのアクセス	4-45
接続の開始、停止、クローズ	4-46
セッションの管理	4-48
セッション例外リスナの定義	4-48
セッションのクローズ	4-49
送り先の動的作成	4-50
JMSHelper クラス メソッドの使い方	4-50
一時的な送り先の使い方	4-52
恒久サブスクリプションの設定	4-54
クライアント ID の定義	4-54
恒久サブスクリプション用のサブスクライバの作成	4-56
恒久サブスクリプションの削除	4-57
恒久サブスクリプションの変更	4-57
メッセージ ヘッダ フィールドおよびメッセージ プロパティ フィールドの設 定と参照	4-58
メッセージ ヘッダ フィールドの設定	4-59

メッセージ プロパティ フィールドの設定	4-61
メッセージ ヘッダ フィールドおよびメッセージ プロパティ フィールド の参照	4-65
メッセージのフィルタ処理	4-66
SQL 文を使用したメッセージ セレクタの定義	4-67
XML セレクタ メソッドを使用した XML メッセージ セレクタの定義 . 4-68	
メッセージ セレクタの表示	4-69
トピック サブスクライバメッセージ セレクタのインデックス付けによ るパフォーマンスの最適化	4-70
サーバ セッション プールの定義	4-71
手順 1 : JNDI でサーバ セッション プール ファクトリをルックアップす る	4-74
手順 2 : サーバセッション プールファクトリを使用してサーバセッシ ョン プールを作成する	4-75
手順 3 : 接続コンシューマを作成する	4-76
例 : PTP クライアントのサーバセッション プールの設定	4-78
例 : Pub/Sub クライアントのサーバセッション プールの設定	4-80
マルチキャストの使い方	4-82
手順 1 : JMS アプリケーションを設定し、マルチキャスト セッションと トピック サブスクライバを作成する	4-84
手順 2 : メッセージ リスナを設定する	4-85
マルチキャストのコンフィグレーション属性の動的コンフィグレーシ ョン	4-86
例 : マルチキャスト TTL (存続時間)	4-87

5. WebLogic JMS によるトランザクションの使い方

トランザクションの概要	5-2
JMS トランザクション セッションの使い方	5-3
手順 1 : JMS アプリケーションを設定し、トランザクション セッシ ョンを作成する	5-4
手順 2 : 必要な処理を実行する	5-5
手順 3 : JMS トランザクション セッションをコミットまたはロールバ ックする	5-5
JTA ユーザ トランザクションの使い方	5-6
手順 1 : JMS アプリケーションを設定し、非トランザクション セッシ ョンを作成する	5-7

手順 2 : JNDI でユーザ トランザクションをルックアップする	5-8
手順 3 : JTA ユーザ トランザクションを開始する	5-8
手順 4 : 必要な処理を実行する	5-8
手順 5 : JTA ユーザ トランザクションをコミットまたはロールバックする	5-9
メッセージ駆動型 Bean を使用した JTA ユーザ トランザクション内の非同期メッセージング	5-9
例 : JTA ユーザ トランザクションにおける JMS と EJB	5-10

6. WebLogic JMS アプリケーションの移行

既存の機能の変更点	6-1
既存のアプリケーションの移行	6-10
始める前に	6-10
4.5 および 5.1 アプリケーションのバージョン 6.x への移行手順	6-11
6.0 アプリケーションの 6.1 への移行手順	6-12
JDBC データベース ストアの削除	6-14

A. コンフィグレーション チェックリスト

サーバ クラスタ	A-2
JTA ユーザ トランザクション	A-2
JMS トランザクション	A-2
メッセージの配信	A-3
非同期メッセージの配信	A-3
永続的メッセージ	A-3
メッセージの並行処理	A-4
マルチキャスト	A-5
恒久サブスクリプション	A-6
送り先のソート順	A-6
一時的な送り先	A-6
しきい値と割り当て	A-7

B. JDBC データベース ユーティリティ

概要	B-1
JMS ストアについて	B-2
JDBC ストアの再生成	B-2

索引

このマニュアルの内容

このマニュアルでは、BEA WebLogic Server™ プラットフォームで Java™ Messaging Service (JMS) を実装してエンタープライズ メッセージング システムにアクセスする方法について説明します。

このマニュアルの構成は次のとおりです。

- 第 1 章「WebLogic JMS の概要」では、WebLogic Java Message Service (JMS) について概説します。
- 第 2 章「WebLogic JMS の基礎」では、WebLogic JMS のコンポーネントおよび機能について説明します。
- 第 3 章「WebLogic JMS の管理」では、WebLogic JMS のコンフィグレーションおよびモニタについて概説します。
- 第 4 章「WebLogic JMS アプリケーションの開発」では、WebLogic JMS アプリケーションを開発する方法について説明します。
- 第 5 章「WebLogic JMS によるトランザクションの使い方」では、WebLogic JMS でトランザクションを使用する方法について説明します。
- 第 6 章「WebLogic JMS アプリケーションの移行」では、WebLogic JMS アプリケーションを移行する方法について説明します。
- 付録 A「コンフィグレーション チェックリスト」では、各種 JMS 機能のモニタ チェックリストを提供します。
- 付録 B「JDBC データベース ユーティリティ」では、JDBC データベース ユーティリティを使用して、新しい JDBC ストアを生成したり、また削除したりする方法を説明します。

対象読者

このマニュアルは、Sun Microsystems の Java 2 Platform, Enterprise Edition (J2EE) を使用して JMS アプリケーションを設計、開発、コンフィグレーション、および管理するアプリケーション開発者を対象としています。JMS、JNDI (Java Naming and Directory Interface)、Java プログラミング言語、エンタープライズ JavaBeans™ (EJB™)、および J2EE 仕様の Java Transaction API (JTA) に読者が精通していることを前提として書かれています。

e-docs Web サイト

BEA 製品のドキュメントは、BEA の Web サイトで入手できます。BEA のホームページで [製品のドキュメント] をクリックします。または、WebLogic Server 製品ドキュメント ページ (<http://edocs.beasys.co.jp/e-docs/>) を直接表示してください。

このマニュアルの印刷方法

Web ブラウザの [ファイル | 印刷] オプションを使用すると、Web ブラウザからこのマニュアルのメイン トピックを一度に 1 つずつ印刷できます。

このマニュアルの PDF 版は、Web サイトで入手できます。PDF を Adobe Acrobat Reader で開くと、マニュアルの全体 (または一部分) を書籍の形式で印刷できます。PDF を表示するには、WebLogic Server ドキュメントのホームページを開き、[ドキュメントのダウンロード] をクリックして、印刷するマニュアルを選択します。

Adobe Acrobat Reader は、Adobe の Web サイト (<http://www.adobe.co.jp>) から無料で入手できます。

関連情報

BEA の Web サイトでは、WebLogic Server の全マニュアルを提供しています。JMS の詳細については、Sun Microsystems Javasoftware Web サイトの以下の場所にある、JMS Javadoc および JMS API – Errata にアクセスしてください。

<http://www.java.sun.com/products/jms/javadoc-102a/index.html>

http://www.java.sun.com/products/jms/errata_051801.html

サポート情報

BEA のドキュメントに関するユーザからのフィードバックは弊社にとって非常に重要です。質問や意見などがあれば、電子メールで docsupport-jp@bea.com までお送りください。寄せられた意見については、ドキュメントを作成および改訂する BEA の専門の担当者が直に目を通します。

電子メールのメッセージには、ご使用のソフトウェア名とバージョン名、およびマニュアルのタイトルと作成日付をお書き添えください。本バージョンの BEA WebLogic Server について不明な点がある場合、または BEA WebLogic Server のインストールおよび動作に問題がある場合は、BEA WebSUPPORT (www.bea.com) を通じて BEA カスタマ サポートまでお問い合わせください。カスタマ サポートへの連絡方法については、製品パッケージに同梱されているカスタマ サポート カードにも記載されています。

カスタマ サポートでは以下の情報をお尋ねしますので、お問い合わせの際はあらかじめご用意ください。

- お名前、電子メール アドレス、電話番号、ファクス番号
- 会社の名前と住所
- お使いの機種とコード番号
- 製品の名前とバージョン
- 問題の状況と表示されるエラー メッセージの内容

表記規則

このマニュアルでは、全体を通して以下の表記規則が使用されています。

表記法	適用
{ Ctrl } + { Tab }	同時に押すキーを示す。
斜体	強調または本のタイトルを示す。
等幅テキスト	コード サンプル、コマンドとそのオプション、Java クラス、データ型、ディレクトリ、およびファイル名とその拡張子を示す。等幅テキストはキーボードから入力するテキストも示す。 例： <pre>import java.util.Enumeration; chmod u+w * config/examples/applications .java config.xml float</pre>
斜体の等幅テキスト	コード内の変数を示す。 例： <pre>String CustomerName;</pre>
すべて大文字のテキスト	デバイス名、環境変数、および論理演算子を示す。 例： <pre>LPT1 BEA_HOME OR</pre>
{ }	構文内の複数の選択肢を示す。
[]	構文内の任意指定の項目を示す。例： <pre>java utils.MulticastTest -n name -a address [-p portnumber] [-t timeout] [-s send]</pre>

表記法	適用
	構文の中で相互に排他的な選択肢を区切る。例： <pre>java weblogic.deploy [list deploy undeploy update] password {application} {source}</pre>
...	コマンドラインで以下のいずれかを示す。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 引数を複数回繰り返すことができる。 ■ 任意指定の引数が省略されている。 ■ パラメータや値などの情報を追加入力できる。
.	コード サンプルまたは構文で項目が省略されていることを示す。 . . .



1 WebLogic JMS の概要

以下の節では、WebLogic Server の Java Messaging Service (JMS) について概説します。

- JMS とは
- WebLogic JMS の機能
- WebLogic JMS のアーキテクチャ
- WebLogic JMS の拡張機能

JMS とは

メッセージ指向ミドルウェア (Message-Oriented Middleware : MOM) とも呼ばれるエンタープライズ メッセージング システムを使用すると、複数のアプリケーションがメッセージの交換を通じて通信できます。メッセージとは、異なるアプリケーション間の通信を調整するために必要な情報が含まれている要求、レポート、またはイベントのことです。メッセージで提供される抽象化の階層により、送り先システムについての詳細情報をアプリケーション コードから切り離すことができます。

Java Message Service (JMS) は、エンタープライズ メッセージング システムにアクセスするための標準の API です。具体的な JMS の特長は以下のとおりです。

- メッセージング システムを共有する Java アプリケーション同士でメッセージを交換できます。
- メッセージを作成、送信、および受信するための標準インタフェースによりアプリケーションの開発が容易になります。

次の図は、WebLogic JMS によるメッセージングの仕組みを示しています。

図 1-1 WebLogic JMS のメッセージング



図で示されているように、WebLogic JMS はプロデューサ アプリケーションからメッセージを受信し、受け取ったメッセージをコンシューマ アプリケーションに配信します。

WebLogic JMS の機能

WebLogic JMS では、JMS API の完全な実装が提供されます。具体的な WebLogic JMS の機能は以下のとおりです。

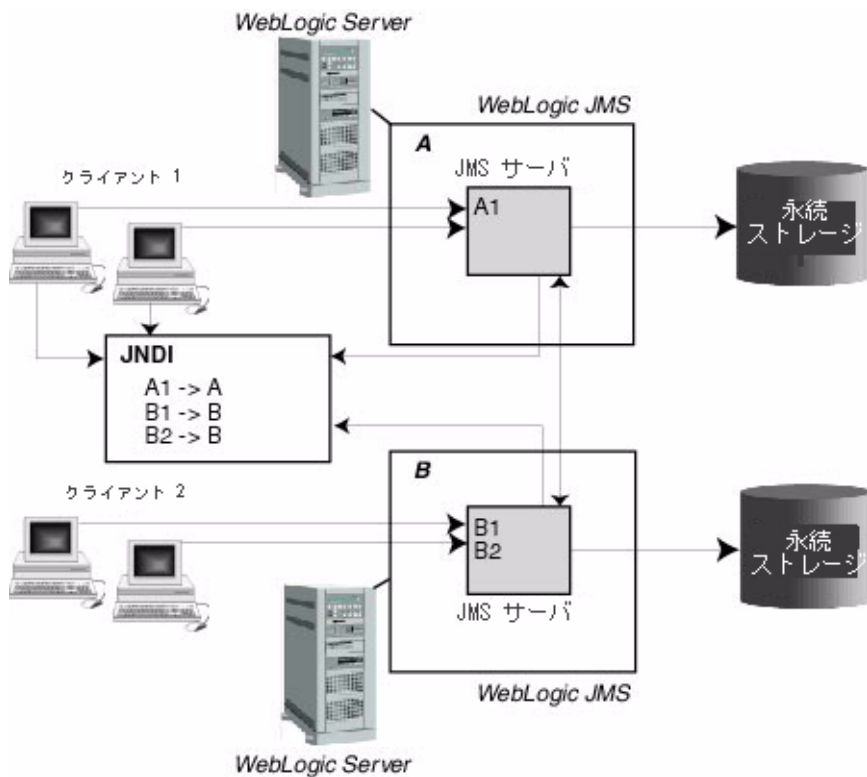
- 1 つの統一的なメッセージング API を提供します。
- [JavaSoft JMS 仕様バージョン 1.0.2](#) を実装します。
- クラスタ化をサポートします。
- さまざまなオペレーティング システムおよびマシン アーキテクチャにまたがるアプリケーションのメッセージングをサポートします。
- WebLogic Administration Console で属性を設定したり、JMS API を使用して値をオーバーライドしたりすることでコンフィグレーションできます。
- Java Transaction API (JTA) トランザクションを使用することで、JMS アプリケーションと他のリソース マネージャ (おもにデータベース) の相互運用を実現します。JMS アプリケーションは、JTA を使用する他の Java API とのトランザクションに参加できます。
- XML (Extensible Markup Language) を含むメッセージをサポートします。
- マルチキャストをサポートします。IP マルチキャスト アドレスを使用して、選択したホストのグループにメッセージを配信できます。

- メッセージの永続ストレージとしてデータベースまたはファイルを使用できません。
- エンタープライズ JavaBean (EJB)、JDBC 接続プール、サーブレット、RMI など、他の BEA WebLogic Server™ API や機能と共に使用できます。

WebLogic JMS のアーキテクチャ

次の図は、WebLogic JMS のアーキテクチャを示しています。

図 1-2 WebLogic JMS のアーキテクチャ



主要な構成要素

1-4 ページの「WebLogic JMS のアーキテクチャ」の図で示されているように、WebLogic JMS Server のアーキテクチャはおもに以下の要素で構成されています。

- メッセージング機能を実装する WebLogic JMS サーバ
- クライアント アプリケーション
- サーバルックアップ機能を提供する JNDI (Java Naming and Directory Interface)
- 永続的なデータを格納するための永続ストレージ (ファイルまたはデータベース)

クラスタ化機能

WebLogic JMS のアーキテクチャでは、クラスタ内のあらゆるサーバから送り先へのクラスタワイドで透過的なアクセスをサポートすることで、複数の JMS サーバのクラスタ化が実装されます。WebLogic Server は、クラスタ全体への JMS の送り先と接続ファクトリの配布をサポートするようになりました。ただし、JMS トピックおよびキューが、クラスタ内の個々の WebLogic Server インスタンスによって管理される点は変わりません。

WebLogic JMS でのクラスタ化のコンフィグレーションについて、詳しくは 3-3 ページの「WebLogic JMS のクラスタ化のコンフィグレーション」を参照してください。WebLogic クラスタ化の詳細については、『[WebLogic Server クラスタ ユーザーズ ガイド](#)』を参照してください。

クラスタ化のメリットは以下のとおりです。

- クラスタ内の複数のサーバにわたる送り先のロード バランシング
システム管理者は、複数の JMS サーバをコンフィグレーションし、対象を使用してそれらを定義済みの WebLogic Server に割り当てることで、クラスタ内の複数のサーバにわたる送り先のロード バランシングを確立できます。各 JMS サーバは、厳密に 1 つの WebLogic サーバにデプロイされ、複数の送り先に対する要求を処理します。

注意: ロード バランシングは動的ではありません。コンフィグレーションの段階で、システム管理者が JMS サーバの対象を指定してロード バランシングを定義します。

- クラスタ内のあらゆるサーバからの、送り先へのクラスタ全体的かつ透過的なアクセス

システム管理者は、複数の接続ファクトリをコンフィグレーションし、対象を使用してそれらを WebLogic サーバに割り当てることで、クラスタ内のあらゆるサーバから送り先へのクラスタワイドで透過的なアクセスを確立できます。各接続ファクトリは、複数の WebLogic サーバにデプロイできます。

アプリケーションでは、Java Naming and Directory Interface (JNDI) を使用して接続ファクトリをルックアップし、JMS サーバとの通信を確立するための接続を作成します。各 JMS サーバでは、複数の送り先に対する要求が処理されます。JMS サーバで処理されない送り先への要求は、適切なサーバに転送されます。

接続ファクトリの詳細については、2-1 ページの「WebLogic JMS の基礎」を参照してください。

- スケーラビリティ

スケーラビリティは以下の機能によって実現します。

- 前述した、クラスタ内の複数のサーバにわたる送り先のロード バランシング。
- 接続ファクトリを通じた、複数の JMS サーバでのアプリケーション負荷の分散。その結果として、個々の JMS サーバでの負荷が削減され、かつ接続先を特定のサーバに決めることでセッションの集中が可能となります。
- マルチキャストのサポート (オプション)。JMS サーバで配信しなければならないメッセージの数が削減されます。JMS サーバでは、サブスクライブしているアプリケーションの数に関係なく、マルチキャスト IP アドレスと関連付けられている各ホスト グループに対してメッセージが 1 コピーだけ転送されます。

注意: 自動フェイルオーバーは、このリリースの WebLogic JMS ではサポートされていません。手動フェイルオーバーの実行の詳細については、3-5 ページの「WebLogic Server の障害からの回復」を参照してください。

WebLogic JMS の拡張機能

JavaSoft JMS 仕様バージョン 1.0.2 で指定されている API に加えて、WebLogic JMS では次の表の拡張機能を実現するクラスとメソッドを定義したパブリック API `weblogic.jms.extensions` も用意されています。

表 1-1 WebLogic JMS の拡張機能

拡張機能	詳細情報の参照先
XML メッセージを作成する	4-15 ページの「手順 6a: メッセージ オブジェクト (メッセージ プロデューサ) を作成する」を参照
セッション例外リスナを定義する	4-48 ページの「セッション例外リスナの定義」を参照
事前に取得する非同期メッセージの、セッションで許可される最大数を設定または表示する	4-86 ページの「マルチキャストのコンフィグレーション属性の動的コンフィグレーション」を参照
メッセージが最大数に達したときに適用するマルチキャストセッションの超過時のポリシーを設定または表示する	4-86 ページの「マルチキャストのコンフィグレーション属性の動的コンフィグレーション」を参照
永続的なキューまたはトピックを動的に作成する	4-50 ページの「JMSHelper クラス メソッドの使い方」を参照
WebLogic JMS 6.0 と 6.0 以前の <code>JMSMessageID</code> の形式をお互いの形式に変換する	4-59 ページの「メッセージ ヘッダ フィールドの設定」を参照
メッセージの再配信遅延の設定	4-36 ページの「メッセージの再配信遅延の設定」を参照
プロデューサのメッセージ配信時間の設定	4-39 ページの「プロデューサに対する配信時間の設定」を参照
メッセージの配信時間の設定	4-39 ページの「プロデューサに対する配信時間の設定」を参照
メッセージのスケジュール配信時間の設定	4-41 ページの「スケジューリング済み配信時間のオーバーライドの設定」を参照

この API では、`NO_ACKNOWLEDGE` と `MULTICAST_NO_ACKNOWLEDGE` の確認応答モード、および以下のような例外の送を含む拡張例外もサポートされています。

- サーバエラーまたは管理上の介入によってコンシューマの1つがサーバによって閉じられたときにセッション例外リスナ（設定されている場合）に例外を送出します。
- セッションで受信されたが、まだメッセージリスナに配信されていないメッセージの数がそのセッションの最大メッセージ許容数を越えたときにマルチキャストセッションから例外を送出します。
- データストリームでシーケンスの欠陥（シーケンスの異なる受信メッセージ）が検出されたときにマルチキャストコンシューマから例外を送出します。

2 WebLogic JMS の基礎

以下の節では、WebLogic JMS コンポーネントと機能について説明します。

- メッセージング モデル
- WebLogic JMS のクラス
- ConnectionFactory
- Connection
- Session
- Destination
- MessageProducer と MessageConsumer
- ServerSessionPoolFactory
- ServerSessionPool
- ServerSession
- ConnectionConsumer

この章で説明する JMS クラスの詳細については、Sun Microsystems の Java Web サイトにある最新の JMS Javadoc (最新の JMS API Errata を含む) を参照してください。

<http://www.javasoft.com/products/jms/Javadoc-102a/index.html>

および

http://www.javasoft.com/products/jms/errata_051801.html

メッセージング モデル

JMS では、ポイント ツー ポイント (PTP) およびパブリッシュ / サブスクライブ (Pub/sub) という 2 つのメッセージング モデルがサポートされています。それらのメッセージング モデルは非常に似ていますが、以下の点で異なります。

- PTP メッセージング モデルでは、1 つの宛先に対してメッセージが配信されます。
- Pub/sub メッセージング モデルでは、複数の宛先に対してメッセージが配信されます。

各モデルは、共通の基本クラスを拡張したクラスで実装されます。たとえば、PTP クラスの `javax.jms.Queue` と Pub/sub クラスの `javax.jms.Topic` は両方とも `javax.jms.Destination` を拡張したクラスです。

各メッセージング モデルについては、以降の節で詳しく説明します。

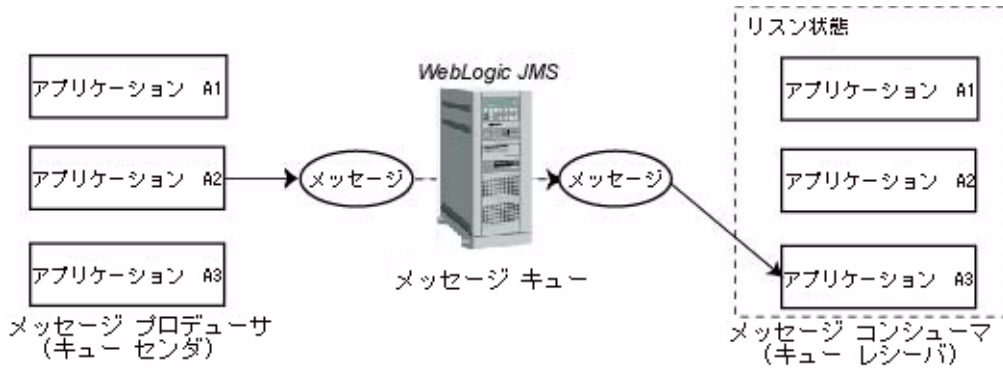
注意： プロデューサおよびコンシューマという用語は、メッセージング モデルに関係なく、それぞれメッセージを送信および受信するアプリケーションを表すために汎用的に使用します。ただし、各メッセージング モデルでは、それぞれに固有のユニークな用語でプロデューサとコンシューマを表します。

ポイント ツー ポイント メッセージング

ポイント ツー ポイント (PTP) メッセージング モデルでは、アプリケーションが別の 1 つのアプリケーションにメッセージを送信できます。PTP メッセージング アプリケーションでは、名前付きのキューを使用してメッセージが送信および受信されます。キュー センダ (プロデューサ) では、特定のキューに対してメッセージが送信されます。キュー レシーバ (コンシューマ) では、特定のキューからメッセージが受信されます。

次の図は、PTP メッセージングの仕組みを示しています。

図 2-1 ポイント ツー ポイント (PTP) メッセージング



複数のキュー センダおよびキュー レシーバを1つのキューに関連付けることができますが、個々のメッセージは1つのキュー レシーバにしか配信できません。

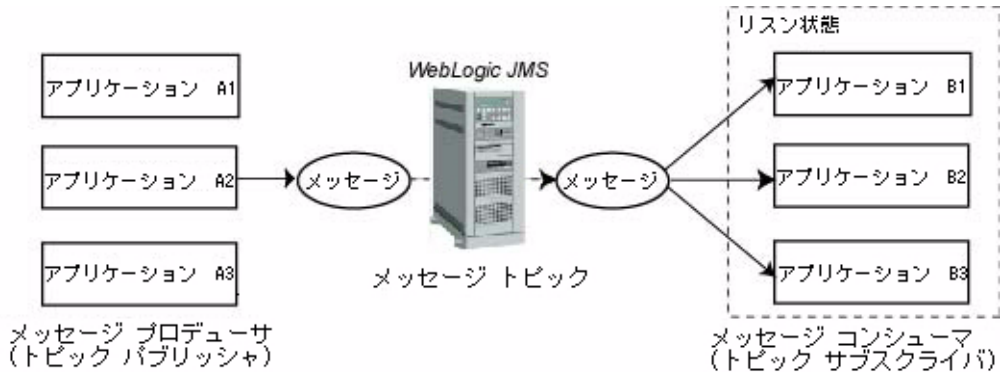
複数のキュー レシーバがキューのメッセージをリスンしている場合、次のメッセージを受信するキュー レシーバは先着順で決定されます。リスンしているキュー レシーバがない場合は、キュー レシーバがキューにアタッチされるまでメッセージはキューにとどまります。

パブリッシュ / サブスクライブ メッセージング

パブリッシュ / サブスクライブ (Pub/sub) メッセージング モデルでは、アプリケーションが複数のアプリケーションにメッセージを送信できます。Pub/sub メッセージング アプリケーションでは、トピックをサブスクライブすることでメッセージが送信および受信されます。トピック パブリッシャ (プロデューサ) では、特定のトピックに対してメッセージが送信されます。トピック サブスクライバ (コンシューマ) では、特定のトピックからメッセージが受信されます。

次の図は、Pub/sub メッセージングの仕組みを示しています。

図 2-2 パブリッシュ/サブスクライブ (Pub/sub) メッセージング



PTP メッセージング モデルの場合と違って、Pub/sub メッセージング モデルでは複数のトピック サブスクライバが同じメッセージを受信できます。メッセージは、すべてのトピック サブスクライバが受信するまで維持されます。

Pub/sub メッセージング モデルでは恒久サブスクライバがサポートされるので、トピック サブスクライバに名前を割り当て、ユーザまたはアプリケーションと関連付けることができます。恒久サブスクライバの詳細については、4-54 ページの「恒久サブスクリプションの設定」を参照してください。

メッセージの永続性

JMS 仕様の「Message Delivery Mode」の節で規定されているように、メッセージは永続的または非永続的として指定できます。

- 永続メッセージは、ただ1回だけ配信されることが保証されています。つまり、メッセージが失われることはなく、またメッセージが2回以上配信されることもありません。永続メッセージは、ファイルまたはデータベースに正常に書き込まれるまで送信されたとは判断されません。永続メッセージは、コンフィグレーション時に各 JMS サーバに割り当てられた永続的なバックアップストア (ディスクベースのファイルまたは JDBC がアクセス可能なデータベース) に書き込まれます。
- 非永続メッセージは格納されません。メッセージは多くて1回は配信されることが保証されますが、システム障害が発生すると失われる場合があります。

す。接続を閉じるか回復すると、確認応答されていないすべての非永続メッセージが再配信されます。非永続メッセージは確認応答されると再配信されません

WebLogic JMS のクラス

JMS アプリケーションを作成するには、`javax.jms` API を使用します。この API では、JMS への接続やメッセージの送受信に必要なクラス オブジェクトを作成できます。JMS クラス インタフェースは、共通の親クラスのキュー バージョンとトピック バージョンを提供するサブクラスとして作成されます。

次の表は、以降の節で詳しく説明する JMS クラスを示しています。すべての JMS クラスの詳細については、[javax.jms](#)、[weblogic.jms.ServerSessionPoolFactory](#)、または [weblogic.jms.extensions](#) Javadoc を参照してください。

表 2-1 JMS クラス

JMS クラス	説明
<code>ConnectionFactory</code>	接続のコンフィグレーション情報をカプセル化する。接続ファクトリは接続を作成するために使用する。接続ファクトリは JNDI を使用してルックアップする。
<code>Connection</code>	メッセージング システムへの開いている通信チャンネルを表す。接続はセッションを作成するために使用する。
<code>Session</code>	生成および消費されるメッセージの順序を定義する。
<code>Destination</code>	特定のプロバイダのアドレスをカプセル化して、キューまたはトピックを識別する。キューとトピックでは、それぞれ PTP メッセージング モデルおよび Pub/sub メッセージング モデルから配信されるメッセージが管理される。

表 2-1 JMS クラス (続き)

JMS クラス	説明
MessageProducer と MessageConsumer	メッセージを送信および受信するためのインタフェースを提供する。メッセージ プロデューサではキューまたはトピックにメッセージが送信される。メッセージ コンシューマではキューまたはトピックからメッセージが受信される。
Message	送信または受信される情報をカプセル化する。
ServerSessionPoolFactory ¹	メッセージ コンシューマのサーバ管理のプールに関するコンフィグレーション情報をカプセル化する。サーバセッション プールファクトリはサーバセッション プールを作成するために使用する。
ServerSessionPool ¹	メッセージを平行処理するために使用できるサーバセッションのプールを接続コンシューマに提供する。
ServerSession ¹	スレッドと JMS セッションを関連付ける。
ConnectionConsumer ¹	メッセージを平行処理するためにサーバセッションを取り出すコンシューマを指定する。

¹ 複数のメッセージを平行して処理するためのオプションの JMS インタフェースがサポートされます。

JMS オブジェクトのコンフィグレーションについては、第 3 章「WebLogic JMS の管理」を参照してください。JMS アプリケーションを設定する手順については、4-4 ページの「JMS アプリケーションの設定」を参照してください。

ConnectionFactory

ConnectionFactory オブジェクトは、接続のコンフィグレーション情報をカプセル化し、JMS アプリケーションが Connection を作成できるようにします。接続ファクトリをコンフィグレーションすると、あらかじめ定義された属性で接続が作成されます。

システム管理者が1つまたは複数の接続ファクトリを定義し、コンフィグレーションすると、WebLogic Server では起動時にそれらの接続ファクトリが JNDI スペースに追加されます。アプリケーションでは、WebLogic JNDI を使用して接続ファクトリを取り出します。

またシステム管理者は、複数の接続ファクトリをコンフィグレーションし、対象を使用してそれらを WebLogic サーバに割り当てることで、クラスタ内のあらゆるサーバから送り先へのクラスタワイドで透過的なアクセスを確立できます。各接続ファクトリは、複数の WebLogic サーバにデプロイできます。JMS クラスタ化の詳細については、3-3 ページの「WebLogic JMS のクラスタ化のコンフィグレーション」を参照してください。

WebLogic JMS では、1つのデフォルト接続ファクトリが定義されています。このファクトリは JNDI 名「`weblogic.jms.ConnectionFactory`」を使用してルックアップできます。接続ファクトリは、WebLogic JMS で用意されるデフォルトファクトリがアプリケーションに適さない場合にのみ定義する必要があります。接続ファクトリのコンフィグレーションについては、『[管理者ガイド](#)』の「[JMS の管理](#)」を参照してください。

注意： 下位互換性のために、WebLogic JMS では非推奨の2つのデフォルト接続ファクトリが引き続きサポートされます。これらのファクトリの JNDI 名は、`javax.jms.QueueConnectionFactory` と `javax.jms.TopicConnectionFactory` です。

非推奨の接続ファクトリから新しいデフォルトまたはユーザ定義の接続ファクトリへの移行については、第6章「WebLogic JMS アプリケーションの移行」を参照してください。

`ConnectionFactory` クラスではメソッドは定義されませんが、そのサブクラスでは各メッセージングモデルのメソッドが定義されます。接続ファクトリでは同時使用がサポートされており、複数のスレッドがオブジェクトに同時にアクセスできます。

次の表は、`ConnectionFactory` のサブクラスを説明しています。

表 2-2 ConnectionFactory のサブクラス

サブクラス	メッセージングモデル	作成するもの
<code>QueueConnectionFactory</code>	PTP	JMS PTP プロバイダへの <code>QueueConnection</code>
<code>TopicConnectionFactory</code>	Pub/sub	JMS Pub/sub プロバイダへの <code>TopicConnection</code>

アプリケーションで `ConnectionFactory` クラスを使用する方法については、第4章「WebLogic JMS アプリケーションの開発」または [javax.jms.ConnectionFactory Javadoc](#) を参照してください。

Connection

`Connection` オブジェクトは、アプリケーションとメッセージング システムの間の開いている通信チャンネルを表し、メッセージを生成および消費するための `Session` を作成するために使用します。接続では、アプリケーションと JMS の間のメッセージングを管理するサーバサイドとクライアントサイドのオブジェクトが作成されます。接続では、ユーザの認証も提供されます。

`Connection` は、JNDI ルックアップを通じて取得する `ConnectionFactory` で作成します。

ユーザの認証や通信の設定に関わるリソースのオーバーヘッドがあるため、ほとんどのアプリケーションではすべてのメッセージングで1つの接続を確立します。WebLogic Server では、JMS トラフィックはサーバとのクライアント接続で他の WebLogic サービスと多重化されます。JMS のために、新たな TCP/IP 接続が作成されることはありません。サーブレットや他のサーバサイド オブジェクトもまた、JMS `Connection` を使用することがあります。

デフォルトでは、接続は停止モードで作成されます。停止状態の接続をいつどのように開始するのかについては、4-46 ページの「接続の開始、停止、クローズ」を参照してください。

接続では同時使用がサポートされており、複数のスレッドがオブジェクトに同時にアクセスできます。

次の表は、`Connection` のサブクラスを説明しています。

表 2-3 Connection のサブクラス

サブクラス	メッセージングモデル	作成するもの
<code>QueueConnection</code>	PTP	<code>QueueSession</code> 、 <code>QueueConnectionFactory</code> で作成された JMS PTP プロバイダへの接続で構成される。

表 2-3 Connection のサブクラス（続き）

サブクラス	メッセージングモデル	作成するもの
TopicConnection	Pub/sub	TopicSession。TopicConnectionFactory で作成された JMS Pub/sub プロバイダへの接続で構成される。

アプリケーションで Connection クラスを使用する方法については、第 4 章「WebLogic JMS アプリケーションの開発」または [javax.jms.Connection](#) Javadoc を参照してください。

Session

Session オブジェクトでは、生成および消費されるメッセージの順序を定義し、複数のメッセージ プロデューサとメッセージ コンシューマを作成できます。メッセージの生成と消費に同じスレッドを使用できます。アプリケーションでメッセージの生成と消費に別々のスレッドが必要な場合は、そのアプリケーションで機能ごとに個別のセッションを作成する必要があります。

Session は、[Connection](#) で作成されます。

注意： セッションおよびそのメッセージのプロデューサとコンシューマには、一度に 1 つのスレッドしかアクセスできません。それらに複数のスレッドが同時にアクセスした場合、それらの動作は定義されません。

次の表は、Session のサブクラスを説明しています。

表 2-4 Session のサブクラス

サブクラス	メッセージングモデル	提供するコンテキストの用途
QueueSession	PTP	JMS PTP プロバイダのメッセージを生成および消費する。QueueConnection で作成される。
TopicSession	Pub/sub	JMS Pub/sub プロバイダのメッセージを生成および消費する。TopicConnection で作成される。

アプリケーションで Session クラスを使用する方法については、第 4 章「WebLogic JMS アプリケーションの開発」、または `javax.jms.Session` javadoc および `weblogic.jms.extensions.WLSession` javadoc を参照してください。

非トランザクション セッション

非トランザクション セッションでは、セッションを作成するアプリケーションで、次の表で定義されている 5 つの確認応答モードのいずれかが選択されます。

表 2-5 非トランザクション セッションで使用する確認応答モード

確認応答モード	説明
AUTO_ACKNOWLEDGE	受信側アプリケーションのメソッドが処理を終えたときに、Session オブジェクトでメッセージ受信の確認応答が行われる。
CLIENT_ACKNOWLEDGE	Session オブジェクトの動作は、アプリケーションによる確認応答メソッドの呼び出しに依存する。メソッドが呼び出されると、セッションでは、前回の確認応答以降に受信されたすべてのメッセージに対して確認応答が行われる。 このモードを使用すると、アプリケーションでは 1 回の呼び出しで複数メッセージの受信、処理、および確認応答を行うことができる。 注意： Administration Console では、接続ファクトリの [確認応答ポリシー] 属性が <code>Previous</code> に設定されているのに対し、指定のセッションでのすべての受信メッセージを確認応答したい場合、最後のメッセージを使用して確認応答メソッドを呼び出します。[確認応答ポリシー] 属性の詳細については、Administration Console オンラインヘルプの「 JMS 接続ファクトリ 」を参照してください。

表 2-5 非トランザクションセッションで使用する確認応答モード（続き）

確認応答モード	説明
DUPS_OK_ACKNOWLEDGE	<p>受信側アプリケーションのメソッドが処理を終えたときに、<code>Session</code> オブジェクトでメッセージ受信の確認応答が行われる。確認応答の重複が許可される。</p> <p>このモードでは、最も効率的にリソースが利用される。</p> <p>注意： アプリケーションで重複メッセージを処理できない場合は、このモードは使用しない。重複メッセージは、メッセージを配信する最初の試行が失敗した場合に送信されます。</p>
NO_ACKNOWLEDGE	<p>確認応答を必要としない。<code>NO_ACKNOWLEDGE</code> セッションに送信されたメッセージは、サーバから即座に削除される。このモードで受信されたメッセージは回復されないため、メッセージを配信する最初の試行が失敗した場合はメッセージが失われたり、重複メッセージが配信されたりする。</p> <p>このモードは、セッションの確認応答で提供されるサービスの質を必要とせず、それに関連するオーバーヘッドを避ける必要があるアプリケーションで使用する。</p> <p>注意： アプリケーションで、失われたメッセージや重複メッセージを処理できない場合は、このモードは使用しないでください。重複メッセージは、メッセージを配信する最初の試行が失敗した場合に送信されます。</p>
MULTICAST_NO_ACKNOWLEDGE	<p>確認応答を必要としないマルチキャストモード。</p> <p><code>MULTICAST_NO_ACKNOWLEDGE</code> セッションに送信されたメッセージでは、前述の <code>NO_ACKNOWLEDGE</code> モードと同じ特性が共有される。</p> <p>このモードは、マルチキャストをサポートし、セッションの確認応答で提供されるサービスの質を必要としないアプリケーションで使用する。マルチキャストの詳細については、4-82 ページの「マルチキャストの使い方」を参照。</p> <p>注意： アプリケーションで、失われたメッセージや重複メッセージを処理できない場合は、このモードは使用しないでください。重複メッセージは、メッセージを配信する最初の試行が失敗した場合に送信されます。</p>

トランザクション セッション

トランザクション セッションでは、一度に 1 つのトランザクションしかアクティブになりません。トランザクション時に送信または受信されたメッセージは、最小の単位として処理されます。

トランザクション セッションを作成すると、確認応答モードは無視されます。アプリケーションでトランザクションがコミットされると、そのトランザクションの間にアプリケーションで受信されたすべてのメッセージがメッセージングシステムによって確認応答され、アプリケーションで送信されたメッセージは配信されるべく受け入れられます。アプリケーションでトランザクションがロールバックされると、そのトランザクションの間にアプリケーションで受信されたメッセージは確認応答されず、アプリケーションで送信されたメッセージは破棄されます。

JMS は、Java Transaction API (JTA) を使用する他の Java サービス (EJB など) との分散トランザクションに参加できます。トランザクションはそのトランザクションに関連付けられたメッセージへのアクセスが制限されているため、トランザクション セッションではこの機能をサポートしません。JTA の利用の詳細については、5-6 ページの「JTA ユーザ トランザクションの使い方」を参照してください。

Destination

`Destination` オブジェクトはキューまたはトピックになり、特定プロバイダのアドレス構文をカプセル化します。プロバイダによって構文はさまざまであるため、JMS 仕様では標準のアドレス構文は定義されていません。

接続ファクトリの場合と同じように、管理者が送り先を定義し、コンフィグレーションすると、WebLogic Server の起動時にそれが JNDI スペースに追加されます。また、アプリケーションでは、それが作成された JMS 接続の間だけ存在する一時的な送り先を作成することもできます。

クライアントサイドでは、Queue オブジェクトと Topic オブジェクトは、サーバ上のオブジェクトへのハンドルとして機能します。それらのメソッドでは、それらの名前が返されるだけです。メッセージングを目的としてアクセスするには、それらにアタッチするメッセージ プロデューサとメッセージ コンシューマを作成します。

送り先では同時使用がサポートされており、複数のスレッドがオブジェクトに同時にアクセスできます。

JMS の Queue と Topic は、`javax.jms.Destination` を拡張します。次の表は、Destination のサブクラスを説明しています。

表 2-6 Destination のサブクラス

サブクラス	メッセージングモデル	管理するメッセージ
Queue	PTP	JMS PTP プロバイダのメッセージ。
TemporaryQueue	PTP	JMS PTP プロバイダのメッセージ。メッセージが作成された JMS 接続の間だけ存在する。一時的なキューはそれを作成したキュー接続によってのみ消費される。
Topic	Pub/sub	JMS Pub/sub プロバイダのメッセージ。
TemporaryTopic	Pub/sub	JMS PTP プロバイダのメッセージ。メッセージが作成された JMS 接続の間だけ存在する。一時的なトピックはそれを作成したトピック接続によってのみ消費される。

注意： アプリケーションでは、キュー セッションで `QueueBrowser` オブジェクトを作成することによりキューを参照することができます。このオブジェクトでは、キュー ブラウザが作成された時点におけるキュー内のメッセージのスナップショットが生成されます。アプリケーションではキュー内のメッセージを表示できますが、メッセージは「読み込まれた」とは判断されず、したがってキューから削除されることはありません。キューの参照の詳細については、4-58 ページの「メッセージ ヘッダ フィールドおよびメッセージ プロパティ フィールドの設定と参照」を参照してください。

アプリケーションで `Destination` クラスを使用する方法については、第 4 章「WebLogic JMS アプリケーションの開発」または `javax.jms.Destination` Javadoc を参照してください。

MessageProducer と MessageConsumer

MessageProducer オブジェクトでは、メッセージがキューまたはトピックに送信されます。MessageConsumer オブジェクトでは、メッセージがキューまたはトピックから受信されます。メッセージ プロデューサとメッセージ コンシューマは、互いに独立して機能します。メッセージ コンシューマが作成されてメッセージを待っているかどうかに関係なく、メッセージ プロデューサではメッセージが生成および送信されます（この逆も同じ）。

Session では、キューおよびトピックにアタッチされる MessageProducer と MessageConsumer が作成されます。

メッセージ センダ オブジェクトとメッセージ レシーバ オブジェクトは、MessageProducer クラスおよび MessageConsumer クラスのサブクラスとして作成されます。次の表は、MessageProducer と MessageConsumer のサブクラスを説明しています。

表 2-7 MessageProducer と MessageConsumer のサブクラス

サブクラス	メッセージング モデル	機能
QueueSender	PTP	JMS PTP プロバイダのメッセージを送信する。
QueueReceiver	PTP	JMS PTP プロバイダのメッセージを受信し、メッセージの作成された JMS 接続が閉じるまで存続する。
TopicPublisher	Pub/sub	JMS Pub/sub プロバイダのメッセージを送信する。
TopicSubscriber	Pub/sub	JMS Pub/sub プロバイダのメッセージを受信し、メッセージの作成された JMS 接続が閉じるまで存続する。メッセージの送り先は、適切な JNDI インタフェースを使用して明示的にバインドしなければならない。

2-3 ページの「ポイント ツー ポイント (PTP) メッセージング」の図で示されているように、PTP モデルでは複数のセッションが同じキューからメッセージを受信できます。ただし、メッセージは、1 つのキュー レシーバにしか配信できません。複数のキュー レシーバがある場合、次にメッセージを受信するキュー レシーバは先着順で決まります。

2-4 ページの「パブリッシュ / サブスクライブ (Pub/sub) メッセージング」の図で示されているように、Pub/sub モデルではメッセージを複数のトピック サブスクライバに配信できます。トピック サブスクライバは、4-54 ページの「恒久サブスクリプションの設定」で説明されているように恒久にも非恒久にもなりません。

アプリケーションでは、1 つのトピックのパブリッシュとサブスクライブに同じ JMS 接続を使用できます。トピック メッセージはすべてのサブスクライバに配信されるので、アプリケーションは自身がパブリッシュしたメッセージを受信する可能性があります。メッセージがパブリッシュ元のクライアントで受信されるのを防ぐために、JMS アプリケーションではトピック サブスクライバに対して `noLocal` 属性を設定できます。詳細については、4-12 ページの「手順 5: セッションと送り先を使用してメッセージ プロデューサとメッセージ コンシューマを作成する」を参照してください。

アプリケーションで `MessageProducer` クラスと `MessageConsumer` クラスを使用する方法については、4-4 ページの「JMS アプリケーションの設定」、または [javax.jms.MessageProducer Javadoc](#) および [javax.jms.MessageConsumer Javadoc](#) を参照してください。

Message

`Message` オブジェクトでは、アプリケーション間で交換される情報がカプセル化されます。この情報は、標準ヘッダ フィールド、アプリケーション固有のプロパティ、およびメッセージ本文という 3 つの要素で構成されます。以降の節では、これらの構成要素について説明します。

メッセージ ヘッダ フィールド

すべての JMS メッセージには、デフォルトで挿入され、メッセージ コンシューマで利用できる標準のヘッダ フィールドがあります。一部のフィールドは、メッセージ プロデューサで設定できます。

メッセージヘッダフィールドの設定については、4-58 ページの「メッセージヘッダフィールドおよびメッセージプロパティフィールドの設定と参照」または [javax.jms.Message](#) Javadoc を参照してください。

次の表は、メッセージヘッダのフィールドを説明し、各フィールドで値がどのように定義されるのかを示しています。

表 2-8 メッセージヘッダフィールド

フィールド	説明	どこで定義されるか
JMSCorrelationID	<p>WebLogic JMSMessageID (この表内で後述) アプリケーション固有の文字列、または <code>byte[]</code> 配列のいずれかを指定する。JMSCorrelationID はメッセージを相互に関連させるために使用する。</p> <p>このフィールドには 2 つの一般的な用途がある。</p> <p>最初の用途は、次のような要求と応答の方式を設定してメッセージをリンクすること。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. メッセージを送信するときに、アプリケーションではそのメッセージに割り当てられた JMSMessageID 値を格納する。 2. そのメッセージを受信したアプリケーションでは、送信側アプリケーションに送り返す応答メッセージの JMSCorrelationID フィールドに JMSMessageID をコピーする。 <p>2 番目の用途は、選択した文字列を JMSCorrelationID フィールドに格納し、一連のメッセージをアプリケーション指定の値でリンクできるようにすること。</p> <p>すべての JMSMessageID は ID: というプレフィックスで始まる。他のアプリケーション固有の文字列で JMSCorrelationID を使用する場合は、文字列の先頭にプレフィクス ID: が付いてはならない。</p>	アプリケーション

表 2-8 メッセージヘッダフィールド (続き)

フィールド	説明	どこで定義されるか
JMSDeliveryMode	<p>PERSISTENT または NON_PERSISTENT を指定する。</p> <p>永続的なメッセージが送信された場合、そのメッセージは JMS ファイルまたは JDBC データベースに格納される。</p> <p>send() 処理は、メッセージの配信を保証できるまで成功とは判断されない。永続的なメッセージは少なくとも 1 回は確実に配信される。</p> <p>非永続メッセージは JMS データベースに格納されない。このモードでは、処理のオーバーヘッドが最小限に抑えられる。メッセージは最低 1 回は配信が保証されるが、システム障害が発生すると失われる場合がある。接続を閉じるか回復すると、確認応答されていないすべての非永続メッセージが再配信される。非永続メッセージは確認応答されると再配信されない。</p> <p>メッセージが送信されるときには、この値は無視される。メッセージが受信されるときには、送信側のメソッドで指定された配信モードが格納されている。</p>	send() メソッド
JMSDeliveryTime	<p>メッセージをコンシューマに配信できる最も早い絶対時間を定義する。このフィールドは、送り先でのメッセージのソート、またはメッセージの選択に使用できる。データ型変換の目的で、JMSDeliveryTime は長整数として保存される。</p>	send() メソッド
JMSDestination	<p>メッセージが配信される送り先 (キューまたはトピック) を指定する。このフィールドの値は、メッセージの送信時にアプリケーションのメッセージ プロデューサで設定される。</p> <p>メッセージが送信されるときには、この値は無視される。メッセージが受信されるとき、その送り先の値は送信時に割り当てられた値と同じでなければならない。</p>	send() メソッド

表 2-8 メッセージヘッダフィールド（続き）

フィールド	説明	どこで定義されるか
JMSExpiration	<p>メッセージの有効期限（存続時間値）を指定する。</p> <p>JMSExpiration の値は、アプリケーションの存続時間とその時点の GMT の合計として算出される。アプリケーションで存続時間が 0 として指定されると、JMSExpiration は 0 に設定され、メッセージは無期限になる。</p> <p>期限の切れたメッセージは、誤って配信されないようにシステムから削除される。</p>	send() メソッド
JMSMessageID	<p>JMS プロバイダによって送信される各メッセージをユニークに識別する文字列値を格納する。</p> <p>すべての JMSMessageID は ID: というプレフィックスで始まる。</p> <p>メッセージが送信されるときには、この値は無視される。メッセージが受信されるときには、プロバイダの割り当てた値が格納されている。</p>	send() メソッド
JMSPriority	<p>優先順位のレベルを指定する。このフィールドはメッセージが送信される前に設定される。</p> <p>JMS では、0 ~ 9 の 10 段階で優先順位が定義されている（0 が最低の優先順位）。レベル 0 ~ 4 は通常の範囲に属し、レベル 5 ~ 9 は至急の範囲に属する。</p> <p>メッセージが受信されるときには、メッセージを送信するメソッドで指定された値が格納されている。</p> <p>送り先キーをコンフィグレーションすれば、優先順位を基準に送り先をソートすることができる。詳細については、『管理者ガイド』の「JMS の管理」を参照。</p>	メッセージコンシューマ

表 2-8 メッセージヘッダフィールド（続き）

フィールド	説明	どこで定義されるか
JMSRedelivered	<p>確認応答がないためメッセージが再配信されるときに設定されるフラグを指定する。このフラグは受信側アプリケーションのみに関係がある。</p> <p>フラグが設定されている場合は、以下のいずれかの理由のために、同じメッセージが以前に配信されている可能性がある。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ アプリケーションでは既にメッセージが受信されているが、確認応答が行われていない。 ■ セッションの <code>recover()</code> メソッドが呼び出されて、最後に確認応答されたメッセージの後からセッションが開された。<code>recover()</code> メソッドの詳細については、4-33 ページの「受信メッセージの回復」を参照。 	WebLogic JMS
JMSReplyTo	<p>応答メッセージが送信されるキューまたはトピックを指定する。このフィールドはメッセージの送信前に送信側アプリケーションで設定される。</p> <p>この機能は <code>JMSCorrelationID</code> ヘッダフィールドと共に使用して要求と応答のメッセージを関係させることができる。</p> <p><code>JMSReplyTo</code> フィールドをただ設定するだけでは応答は保証されない。受信側アプリケーションに回答させるには、そのように選択する必要がある。</p> <p><code>JMSReplyTo</code> は <code>NULL</code> に設定することもできる。それは、受信側アプリケーションにとって通知イベントなどの意味を持つ場合がある。</p>	アプリケーション
JMSTimeStamp	<p>メッセージが送信されたときの時刻を格納する。タイムスタンプは、アプリケーションでメッセージが送信されたときではなく、WebLogic JMS で配信用にメッセージが受け付けられたときにメッセージに書き込まれる。</p> <p>メッセージが受信されるときには、タイムスタンプが格納されている。</p> <p>このフィールドには、Java のミリ時間の値が格納される。</p>	メッセージ コンシューマ

表 2-8 メッセージヘッダフィールド（続き）

フィールド	説明	どこで定義されるか
JMSType	<p>送信側アプリケーションで設定されたメッセージタイプ識別子 (String) を示す。</p> <p>JMS 仕様では、多様な JMS プロバイダに適応するため、このフィールドに若干の柔軟性を持たせている。一部のメッセージングシステムでは、アプリケーション固有のメッセージタイプを使用できる。そのようなシステムの場合、JMSType フィールドは、格納されている型定義にアクセスするためのメッセージタイプ ID を保持するために使用できる。</p> <p>WebLogic JMS では、このフィールドの使用に制限を設けていない。</p>	アプリケーション

メッセージプロパティフィールド

メッセージのプロパティフィールドには、送信側アプリケーションによって追加されたヘッダフィールドが格納されます。プロパティは、標準的な Java の名前と値の組み合わせです。プロパティ名は、`javax.jms.Message` Javadoc で定義されているメッセージセクタの構文仕様に準拠していなければなりません。有効な値は、boolean、byte、double、float、int、long、および String です。

メッセージプロパティフィールドは、アプリケーション固有の目的に使用できますが、それらは基本的にはメッセージセクタで使用するために用意されています。メッセージセクタの詳細については、4-66 ページの「メッセージのフィルタ処理」を参照してください。

メッセージプロパティフィールドの設定については、4-58 ページの「メッセージヘッダフィールドおよびメッセージプロパティフィールドの設定と参照」または `javax.jms.Message` Javadoc を参照してください。

メッセージ本文

メッセージ本文は、プロデューサからコンシューマに配信される内容です。

次の表は、JMS で定義されているメッセージ タイプを説明しています。すべてのメッセージ タイプは、メッセージ ヘッダとメッセージ プロパティ（メッセージ本文はなし）で構成される `javax.jms.Message` を拡張します。

表 2-9 JMS メッセージ タイプ

タイプ	説明
<code>javax.jms.BytesMessage</code>	未解釈バイトのストリーム。センドとレシーバによって理解されなければならない。このメッセージ タイプのアクセス メソッドは、 <code>java.io.DataInputStream</code> および <code>java.io.DataOutputStream</code> に基づくストリーム対応のリーダーとライター。
<code>javax.jms.MapMessage</code>	名前が文字列であり、値が Java プリミティブ型である、複数の名前と値の組み合わせ。名前と値の組み合わせは、名前を指定することによって順次的にもランダムにも読み込むことができる。
<code>javax.jms.ObjectMessage</code>	1 つのシリアライズ可能な Java オブジェクト。
<code>javax.jms.StreamMessage</code>	Java プリミティブ型だけがストリームで読み書きされること以外は、 <code>BytesMessage</code> と同じ。
<code>javax.jms.TextMessage</code>	1 つの String。 <code>TextMessage</code> では XML コンテンツも格納できる。
<code>weblogic.jms.extensions.XMLMessage</code>	XML コンテンツ。 <code>XMLMessage</code> タイプを使用すると、 <code>TextMessage</code> で送信される XML コンテンツでは処理しにくいメッセージのフィルタ処理を容易に行うことができる。

詳細については、`javax.jms.Message` Javadoc を参照してください。特定のメッセージ タイプのアクセス メソッドや変換表については、そのメッセージ タイプの Javadoc を参照してください。

ServerSessionPoolFactory

サーバセッション プールは、メッセージの並行処理を実現する WebLogic 固有の JMS 機能です。サーバセッション プールファクトリは、サーバサイドの `ServerSessionPool` を作成するために使用します。

WebLogic JMS では、デフォルトで次のような `ServerSessionPoolFactory` オブジェクトが定義されています。

`weblogic.jms.ServerSessionPoolFactory:<name>`。ここで `<name>` には、セッション プールの作成先になる JMS サーバの名前を指定します。WebLogic Server ではデフォルトのサーバセッション プールファクトリが起動時に JNDI スペースに追加され、アプリケーションでは WebLogic JNDI を使用してサーバセッション プールファクトリが取り出されます。

アプリケーションでサーバセッション プールファクトリを使用する方法については、4-71 ページの「サーバセッション プールの定義」または [weblogic.jms.ServerSessionPoolFactory Javadoc](#) を参照してください。

ServerSessionPool

`ServerSessionPool` アプリケーション サーバ オブジェクトでは、メッセージを並行処理するために接続コンシューマで取り出すことができるサーバセッションのプールが提供されます。

`ServerSessionPool` は、JNDI ルックアップで取得される [ServerSessionPoolFactory](#) オブジェクトによって作成されます。

アプリケーションでサーバセッション プールを使用する方法については、4-71 ページの「サーバセッション プールの定義」または [javax.jms.ServerSessionPool Javadoc](#) を参照してください。

ServerSession

`ServerSession` アプリケーション サーバ オブジェクトでは、メッセージを作成、送信、および受信するためのコンテキストが提供され、スレッドと JMS セッションを関連付けることができます。

`ServerSession` は、`ServerSessionPool` オブジェクトによって作成されます。

アプリケーションでサーバセッションを使用する方法については、4-71 ページの「サーバセッションプールの定義」または `javax.jms.ServerSession` Javadoc を参照してください。

ConnectionConsumer

`ConnectionConsumer` オブジェクトでは、サーバセッションを使用して受信メッセージを処理します。メッセージトラフィックが大きい場合は、スレッドコンテキストの切り替えを最小限に抑えるために、接続コンシューマでは複数のメッセージで各サーバセッションをロードすることができます。

`ConnectionConsumer` は、`Connection` オブジェクトによって作成されます。

アプリケーションで接続コンシューマを使用する方法については、4-71 ページの「サーバセッションプールの定義」または `javax.jms.ConnectionConsumer` Javadoc を参照してください。

注意： 接続コンシューマリスナは、サーバと同じ JVM で動作します。

3 WebLogic JMS の管理

Administration Console は、JMS を含む WebLogic Server の機能を有効化、コンフィグレーション、およびモニタするためのインタフェースを備えています。Administration Console を起動する手順については、『管理者ガイド』を参照してください。

以下の節では、WebLogic JMS のコンフィグレーションおよびモニタについて概説します。

- WebLogic JMS のコンフィグレーション
- WebLogic JMS のクラスタ化のコンフィグレーション
- WebLogic JMS のモニタ
- WebLogic Server の障害からの回復

WebLogic JMS のコンフィグレーション

Administration Console を使用して、以下のコンフィグレーション属性を定義します。

- JMS を有効にします。
- JMS サーバを作成します。
- JMS サーバの値、接続ファクトリ、送り先（キューとトピック）、送り先テンプレート、（送り先キーを使用した）送り先のソート順指定、永続ストレージ、セッション プール、および接続コンシューマを作成またはカスタマイズします。
- カスタム JMS アプリケーションを設定します。
- しきい値と割当を定義します。
- サーバのクラスタ化（次節参照）、並行メッセージ処理、永続的なメッセージングなど、必要な JMS 機能を有効にします。

WebLogic JMS では、一部のコンフィグレーション属性に対して、デフォルト値が用意されていますが、それ以外のすべての属性に対しては値を指定する必要があります。コンフィグレーション属性に対して無効な値を指定した場合や、デフォルト値が存在しない属性に対して値を指定しなかった場合は、再起動時に JMS が起動されません。製品には、JMS のサンプル コンフィグレーションが用意されています。

以前のリリースから移行する場合、コンフィグレーション情報は自動的に変換されます（6-10 ページの「既存のアプリケーションの移行」を参照）。

注意： 付録 A 「コンフィグレーション チェックリスト」にあるチェックリストでは、各種 JMS 機能をサポートするための必須属性やオプション属性を確認できます。

WebLogic JMS のクラスタ化のコンフィグレーション

WebLogic Server のクラスタはより強力で、より信頼性のあるアプリケーションプラットフォームを提供するためのサーバ群です。クラスタはそのクライアントにとって単一のサーバに見えますが、実際には、一体で機能するサーバ群です。クラスタは、単一のサーバを越える下記の 2 つの重要な機能を提供します。

- スケーラビリティ - サーバをクラスタに動的に追加して能力を増大させることができます。
- 高可用性 - 複数サーバの冗長性によってアプリケーションが障害から保護されます。

クラスタ化されたサービスは、クラスタ内の複数のサーバで利用できる API とインタフェースです。

WebLogic クラスタの使用を開始する方法およびクラスタの機能と利点の詳細については、『管理者ガイド』の「[WebLogic Server とクラスタのコンフィグレーション](#)」を参照してください。

JMS クラスタ化の動作原理

複数の接続ファクトリをコンフィグレーションし、「対象」を使用してそれらを各サーバインスタンスに割り当てることで、クラスタ内のあらゆるサーバから送り先へのクラスタワイドで透過的なアクセスを確立できます。ただし、複数のサーバへのデプロイを正常に行うには、各接続ファクトリに一意的な名前を付ける必要があります。管理者は、JMS サーバに一意的な名前を付けさえすれば、クラスタ内のさまざまなノード上の複数の JMS サーバをコンフィグレーションし、さまざまな JMS サーバに JMS 送り先を割り当てることができます。

アプリケーションは、Java Naming and Directory Interface (JNDI) を使用して、接続ファクトリを検索し、JMS サーバと通信するための接続を作成します。各 JMS サーバでは、複数の送り先に対する要求が処理されます。JMS サーバで処理されない送り先への要求は、適切な WebLogic Server に転送されます。

JMS クラスタ化の要件

以下のガイドラインは、WebLogic の単一ドメイン環境または複数ドメイン環境におけるクラスタ環境で動作するように、WebLogic JMS をコンフィグレーションするときに適用されます。

- JMS クライアントが接続するすべての WebLogic Server には、一意なサーバ名を設定しなければならない。
- サーバに割り当てるすべての JMS 接続ファクトリには、一意な名前を設定しなければならない。
- クラスタ内のノードに関連付けるすべての JMS サーバには、一意な名前を設定しなければならない。
- 永続的なメッセージングが必要な場合は、すべての JMS ストアに一意な名前を設定しなければならない。

コンフィグレーション手順

クラスタ環境で WebLogic JMS を使用するには、以下の作業が必要です。

1. 『WebLogic Server クラスタ ユーザーズ ガイド』の「[WebLogic Server とクラスタのコンフィグレーション](#)」で説明されているとおりに WebLogic クラスタを管理します。
2. Administration Console を使用して、JMS サーバと接続ファクトリの対象サーバを識別します。
 - JMS サーバの場合は、単一サーバの対象を識別できます。
 - 接続ファクトリの場合は、単一サーバの対象またはクラスタの対象を識別できます。これは、クラスタをサポートするための接続ファクトリに関連付けられている WebLogic Server インスタンスです。

これらのコンフィグレーション属性の詳細については、『[管理者ガイド](#)』の「[JMS サーバのコンフィグレーション](#)」または「[接続ファクトリのコンフィグレーション](#)」を参照してください。

注意： 同じ送り先を複数の JMS サーバにデプロイすることはできません。また、1 つの JMS サーバを複数の WebLogic Server にデプロイすることもできません。

注意: 自動フェイルオーバーは、このリリースの WebLogic JMS ではサポートされていません。手動フェイルオーバーの実行の詳細については、3-5 ページの「WebLogic Server の障害からの回復」を参照してください。

WebLogic JMS のモニタ

JMS サーバ、接続、セッション、送り先、恒久サブスクライバ、メッセージプロデューサ、メッセージコンシューマ、サーバセッションプールなどの JMS オブジェクトに関する統計が提供されます。Administration Console を使用して JMS 統計をモニタできます。

サーバの実行中は、JMS 統計は増え続けます。サーバを再起動するときのみ、統計をリセットできます。

WebLogic JMS のコンフィグレーションとモニタの詳細については、『管理者ガイド』の「[JMS の管理](#)」を参照してください。

WebLogic JMS をコンフィグレーションしたら、アプリケーションで JMS API を使用してメッセージの送受信ができるようになります。詳細については、第 4 章「WebLogic JMS アプリケーションの開発」を参照してください。

WebLogic Server の障害からの回復

WebLogic Server の障害からの回復手順、手動フェイルオーバーの実行手順、およびプログラミングの考慮事項については、『管理者ガイド』の「[JMS の管理](#)」を参照してください。

4 WebLogic JMS アプリケーションの開発

以降の節では、WebLogic Server JMS アプリケーションを開発する方法について説明します。

- アプリケーション開発フロー
- 必要なパッケージのインポート
- JMS アプリケーションの設定
- メッセージの送信
- メッセージの受信
- 受信メッセージの確認応答
- オブジェクト リソースの解放
- ロールバックまたは回復したメッセージの管理
- メッセージ配信時間の設定
- 接続の管理
- セッションの管理
- 一時的な送り先の使い方
- 恒久サブスクリプションの設定
- メッセージ ヘッダ フィールドおよびメッセージ プロパティ フィールドの設定と参照
- メッセージのフィルタ処理
- サーバ セッション プールの定義
- マルチキャストの使い方

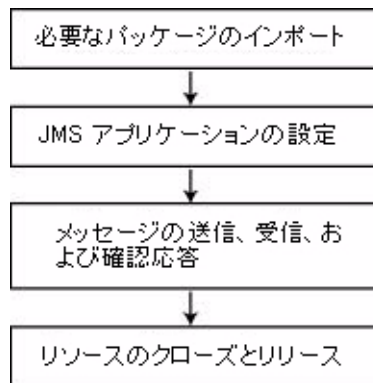
注意: この節で説明する JMS クラスの詳細については、Sun Microsystems の Java Web サイトにある以下の JMS Javadoc を参照してください。

<http://java.sun.com/products/jms/docs.html>

アプリケーション開発フロー

WebLogic JMS アプリケーションを開発するには、次の図に示す手順を行う必要があります。

図 4-1 WebLogic JMS アプリケーション開発フロー — 必要な手順



上の図に示したアプリケーション開発手順のほかにも、設計開発時に以下の手順を任意に行うことができます。

- 接続およびセッション処理の管理
- 送り先の動的作成
- 恒久サブスクリプションの作成
- メッセージ ヘッダおよびメッセージ プロパティ フィールドの設定と参照、メッセージのフィルタ処理、およびメッセージの並行処理によるメッセージ処理の管理
- マルチキャストの使用

- トランザクション内での JMS の使用 (5-1 ページの「WebLogic JMS によるトランザクションの使い方」を参照)

以降の節では、すべてのアプリケーション開発手順について説明します (最後の手順を除く)。

必要なパッケージのインポート

次の表に、WebLogic JMS アプリケーションで一般に使用されるパッケージを示します。

表 4-1 WebLogic JMS パッケージ

パッケージ	説明
<code>javax.jms</code>	JMS API。このパッケージは常に WebLogic JMS アプリケーションで使用される。
<code>java.util</code>	日付や時刻機能などのユーティリティ API。
<code>java.io</code>	システム入力および出力 API。
<code>javax.naming</code> <code>weblogic.jndi</code>	サーバおよび送り先ルックアップに必要な JNDI パッケージ。
<code>javax.transaction.UserTransaction</code>	JTA ユーザ トランザクション サポートに必要な JTA API。
<code>weblogic.jms.ServerSessionPoolFactory</code>	JMS 仕様で定義されているオプションのアプリケーション サーバ機能、サーバセッション プールを使用するための WebLogic JMS パブリック API。
<code>weblogic.jms.extensions</code>	追加のクラスとメソッドを提供する WebLogic 固有の JMS パブリック API (1-7 ページの「WebLogic JMS の拡張機能」を参照)。

プログラムの最初に、以下のパッケージ `import` 文を挿入します。

```
import javax.jms.*;
import java.util.*;
import java.io.*;
import javax.naming.*;
import javax.transaction.*;
```

サーバセッション プール アプリケーションを実装する場合は、次のクラスをインポートリストに追加します。

```
import weblogic.jms.ServerSessionPoolFactory;
```

上の表に示した WebLogic JMS 拡張クラスを使用する場合は、次の文もインポートリストに追加します。

```
import weblogic.jms.extensions.*;
```

JMS アプリケーションの設定

メッセージを送受信するには、あらかじめ JMS アプリケーションを設定しておく必要があります。次の図に、JMS アプリケーションの設定に必要な手順を示します。

図 4-2 JMS アプリケーションの設定



以下の節では、この設定手順について説明します。また、ポイント ツー ポイント (PTP) およびパブリッシュ / サブスクライブ (Pub/Sub) アプリケーションの詳しい例も示します。これらの例は、`samples\examples` ディレクトリに収められている WebLogic Server 付属の `examples.jms` パッケージから引用したものです。

設定手順に進む前に、WebLogic Server のコンフィグレーションを担当するシステム管理者が必要な JMS 機能 (接続ファクトリ、JMS サーバ、送り先など) をコンフィグレーションしたことを確認してください。詳細については、『管理者ガイド』の「[JMS の管理](#)」を参照してください。

これらの節で説明する JMS クラスおよびメソッドの詳細については、2-5 ページの「WebLogic JMS のクラス」か、または `javax.jms`、`weblogic.jms.ServerSessionPoolFactory`、`weblogic.jms.extensions` Javadoc を参照してください。

トランザクション アプリケーションと JTA ユーザ トランザクションの設定については、5-1 ページの「WebLogic JMS によるトランザクションの使い方」を参照してください。

手順 1 : JNDI で接続ファクトリをルックアップする

接続ファクトリをルックアップするには、あらかじめ接続ファクトリをコンフィグレーション情報の一部として定義しておく必要があります。WebLogic JMS には、コンフィグレーションの一部として組み込まれているデフォルト接続ファクトリが 1 つ用意されています。WebLogic JMS システム管理者は、コンフィグレーション時に接続ファクトリを追加または更新できます。接続ファクトリのコンフィグレーションと使用可能なデフォルトについては、『管理者ガイド』の「[JMS の管理](#)」を参照してください。

接続ファクトリを定義したら、その接続ファクトリをルックアップするために、まず `NamingManager.InitialContext()` メソッドを使用して JNDI コンテキスト (context) を定義します。サブレット アプリケーション以外のアプリケーションの場合は、初期コンテキストの作成に使用する環境を渡す必要があります。詳細については、`NamingManager.InitialContext()` Javadoc を参照してください。

コンテキストを定義したら、JNDI で接続ファクトリをルックアップするために、以下のコマンド (PTP または Pub/Sub メッセージング用) のいずれかを実行します。

```
QueueConnectionFactory queueConnectionFactory =  
    (QueueConnectionFactory) context.lookup(CF_name);
```

```
TopicConnectionFactory topicConnectionFactory =  
    (TopicConnectionFactory) context.lookup(CF_name);
```

CF_name 引数には、コンフィグレーション時に定義した接続ファクトリ名を指定します。

`ConnectionFactory` クラスの詳細については、2-6 ページの「`ConnectionFactory`」または [javax.jms.ConnectionFactory](#) Javadoc を参照してください。

手順 2 : 接続ファクトリを使用して接続を作成する

キューまたはトピックにアクセスするための接続を作成するには、次節で説明する `ConnectionFactory` メソッドを使用します。

`Connection` クラスの詳細については、2-8 ページの「`Connection`」または [javax.jms.Connection](#) Javadoc を参照してください。

キュー接続の作成

`QueueConnectionFactory` は、キュー接続を作成するための 2 つのメソッドを以下のとおり提供します。

```
public QueueConnection createQueueConnection(  
    ) throws JMSEException
```

```
public QueueConnection createQueueConnection(  
    String userName,  
    String password  
    ) throws JMSEException
```

最初のメソッドは `QueueConnection` を作成し、2 番目のメソッドは指定されたユーザ ID を使用して `QueueConnection` を作成します。どちらのケースでも、接続は停止モードで作成されます。メッセージを受け付けるには、4-17 ページの「手順 7: 接続を開始する」で説明するとおり接続を開始しなければなりません。

`QueueConnectionFactory` クラス メソッドの詳細については、[javax.jms.QueueConnectionFactory Javadoc](#) を参照してください。
`QueueConnection` クラスの詳細については、[javax.jms.QueueConnection Javadoc](#) を参照してください。

トピック接続の作成

`TopicConnectionFactory` は、トピック接続を作成するための 2 つのメソッドを以下のとおり提供します。

```
public TopicConnection createTopicConnection(
    ) throws JMSEException

public TopicConnection createTopicConnection(
    String userName,
    String password
    ) throws JMSEException
```

最初のメソッドは `TopicConnection` を作成し、2 番目のメソッドは指定されたユーザ ID を使用して `TopicConnection` を作成します。どちらのケースでも、接続は停止モードで作成されます。メッセージを受け付けるには、4-17 ページの「手順 7: 接続を開始する」で説明するとおり接続を開始しなければなりません。

`TopicConnectionFactory` クラス メソッドの詳細については、[javax.jms.TopicConnectionFactory Javadoc](#) を参照してください。
`TopicConnection` クラスの詳細については、[javax.jms.TopicConnection Javadoc](#) を参照してください。

手順 3 : 接続を使用してセッションを作成する

キューまたはトピックにアクセスするために 1 つまたは複数のセッションを作成するには、次節で説明する `Connection` メソッドを使用します。

注意: セッションおよびそのメッセージのプロデューサとコンシューマには、一度に 1 つのスレッドしかアクセスできません。それらに複数のスレッドが同時にアクセスした場合、それらの動作は定義されません。

Session クラスの詳細については、2-9 ページの「Session」または [javax.jms.Session](#) Javadoc を参照してください。

キュー セッションの作成

QueueConnection クラスは、キュー セッション作成用のメソッドを次のとおり定義します。

```
public QueueSession createQueueSession(  
    boolean transacted,  
    int acknowledgeMode  
) throws JMSException
```

このメソッドでは、セッションをトランザクション処理するか (`true`)、またはトランザクション処理しないか (`false`) を示す `boolean` 引数と、2-10 ページの「非トランザクション セッション」で説明した非トランザクション セッションの確認応答モードを示す整数値を指定する必要があります。トランザクション セッションの場合、`acknowledgeMode` 属性は無視されます。この場合、メッセージは `commit()` メソッドでトランザクションがコミットされたときに確認応答されます。

QueueConnection クラス メソッドの詳細については、[javax.jms.QueueConnection](#) Javadoc を参照してください。QueueSession クラスの詳細については、[javax.jms.QueueSession](#) Javadoc を参照してください。

トピック セッションの作成

TopicConnection クラスは、トピック セッション作成用のメソッドを次のとおり定義します。

```
public TopicSession createTopicSession(  
    boolean transacted,  
    int acknowledgeMode  
) throws JMSException
```

このメソッドでは、セッションをトランザクション処理するか (`true`)、またはトランザクション処理しないか (`false`) を示す `boolean` 引数と、2-10 ページの「非トランザクション セッション」で説明した非トランザクション セッションの確認応答モードを示す整数値を指定する必要があります。トランザクション

セッションの場合、`acknowledgeMode` 属性は無視されます。この場合、メッセージは `commit()` メソッドでトランザクションがコミットされたときに確認応答されます。

`TopicConnection` クラス メソッドの詳細については、[javax.jms.TopicConnection Javadoc](#) を参照してください。`TopicSession` クラスの詳細については、[javax.jms.TopicSession Javadoc](#) を参照してください。

手順 4 : 送り先 (キューまたはトピック) をルックアップする

送り先をルックアップするには、あらかじめ WebLogic JMS システム管理者によって送り先がコンフィグレーションされている必要があります。詳細については、『[管理者ガイド](#)』の「[JMS の管理](#)」を参照してください。

送り先のコンフィグレーションが済んでいれば、JNDI コンテキスト (`context`) を定義し (4-6 ページの「[手順 1 : JNDI で接続ファクトリをルックアップする](#)」で実行済み)、以下のコマンド (PTP または Pub/Sub メッセージング用) のいずれかを実行することによって、送り先をルックアップできます。

```
Queue queue = (Queue) context.lookup(Dest_name);
```

```
Topic topic = (Topic) context.lookup(Dest_name);
```

`Dest_name` 引数には、コンフィグレーション時に定義された送り先名を指定します。

JNDI ネームスペースを使用しない場合は、以下の `QueueSession` または `TopicSession` メソッドを使用してキューまたはトピックをそれぞれ参照できます。

```
public Queue createQueue(  
    String queueName  
) throws JMSException
```

```
public Topic createTopic(  
    String topicName  
) throws JMSException
```

queueName と topicName 文字列の構文は、JMS_Server_Name/Destination_Name (たとえば、myjmsserver/mydestination) です。この構文を使用するソースコードを参照するには、4-50 ページの「送り先の動的作成」の findqueue() 例を参照してください。

注意: createQueue() メソッドと createTopic() メソッドでは送り先が動的には作成されず、既に存在する送り先への参照が作成されるだけです。送り先の動的作成については、4-50 ページの「送り先の動的作成」を参照してください。

これらのメソッドの詳細については、それぞれ [javax.jms.QueueSession Javadoc](#) と [javax.jms.TopicSession Javadoc](#) を参照してください。

送り先を定義したら、以下の Queue メソッドまたは Topic メソッドを使用してキューまたはトピックにそれぞれアクセスできます。

```
public String getQueueName(  
    ) throws JMSException
```

```
public String getTopicName(  
    ) throws JMSException
```

キュー名とトピック名が印刷可能なフォーマットで返されるようにするには、toString() メソッドを使用します。

Destination クラスの詳細については、2-12 ページの「Destination」または [javax.jms.Destination Javadoc](#) を参照してください。

送り先ルックアップ時のサーバアフィニティ

createTopic() メソッドおよび createQueue() メソッドも、「JMS_Server_Name./Destination_Name」構文を使って、送り先のルックアップ時にサーバアフィニティを示すことができます。この方法は、送り先が同じ JVM 内で接続ファクトリとしてローカルにデプロイされている場合、その接続ファクトリは一致するローカルな送り先の名前だけを返します。その名前がローカルな JVM がない場合、たとえ、別の JVM に同じ名前でもデプロイされている場合でも、例外が送出されます。

アプリケーションは、この規則を利用して、`createTopic()` メソッドおよび `createQueue()` メソッドを使用時のサーバ名のハードコード化を避けることにより、何の変更も加える必要なく、別の JMS サーバ上でもそのコードを再利用することができます。

手順 5 : セッションと送り先を使用してメッセージプロデューサとメッセージ コンシューマを作成する

メッセージ プロデューサとメッセージ コンシューマを作成するには、次節で説明する `Session` メソッドに送り先の参照を渡します。

注意： 各コンシューマはメッセージの独自のローカル コピーを受信します。受信が済んだら、ヘッダ フィールド値を変更することはできますが、メッセージ プロパティとメッセージ本文は読み込み専用です。(この時点でメッセージ プロパティまたは本文を変更しようとする、`MessageNotWriteableException` が発生します)。メッセージ本文を変更するには、対応するメッセージ タイプの `clearbody()` メソッドを実行して、既存の内容を消去し、書き込みパーミッションを有効にします。

`MessageProducer` クラスと `MessageConsumer` クラスの詳細については、2-14 ページの「`MessageProducer` と `MessageConsumer`」か、または [javax.jms.MessageProducer Javadoc](#) と [javax.jms.MessageConsumer Javadoc](#) をそれぞれ参照してください

QueueSender と QueueReceiver の作成

`QueueSession` オブジェクトは、キュー センダとキュー レシーバを作成するためのメソッドを次のとおり定義します。

```
public QueueSender createSender(  
    Queue queue  
) throws JMSException  
  
public QueueReceiver createReceiver(  
    Queue queue
```



```
) throws JMSEException
```

```
public QueueReceiver createReceiver(  
    Queue queue,  
    String messageSelector  
) throws JMSEException
```

作成するキュー センダまたはキュー レシーバに関連付けるキュー オブジェクトを指定しなければなりません。また、メッセージをフィルタ処理するためのメッセージ セレクタを指定できます。メッセージ セレクタの詳細については、4-66 ページの「メッセージのフィルタ処理」を参照してください。

`createSender()` メソッドに NULL 値を渡すと、匿名プロデューサが作成されます。この場合、4-24 ページの「メッセージの送信」で説明するように、メッセージの送信時にキュー名を指定しなければなりません。

キュー センダまたはキュー レシーバの作成が済んだら、以下の `QueueSender` メソッドまたは `QueueReceiver` メソッドを使用して、そのキュー センダまたはレシーバに関連付けられているキュー名にアクセスできます。

```
public Queue getQueue(  
) throws JMSEException
```

`QueueSession` クラス メソッドの詳細については、[javax.jms.QueueSession Javadoc](#) を参照してください。`QueueSender` クラスと `QueueReceiver` クラスのメソッドの詳細については、[javax.jms.QueueSender Javadoc](#) および [javax.jms.QueueReceiver Javadoc](#) を参照してください。

TopicPublisher と TopicSubscriber の作成

`TopicSession` オブジェクトは、トピック パブリッシャーとトピック サブスクライバを作成するためのメソッドを次のとおり定義します。

```
public TopicPublisher createPublisher(  
    Topic topic  
) throws JMSEException
```

```
public TopicSubscriber createSubscriber(  
    Topic topic  
) throws JMSEException
```

```
public TopicSubscriber createSubscriber(  
    Topic topic,  
    String messageSelector,
```

```
boolean noLocal  
) throws JMSEException
```

注意： この節で説明するメソッドでは、非恒久サブスクライバが作成されます。非恒久トピック サブスクライバは、アクティブな間だけメッセージを受信します。恒久サブスクリプションを作成して、すべてのメッセージが恒久サブスクライバに届けられるまでメッセージを保持できるようにするためのメソッドについては、4-54 ページの「恒久サブスクリプションの設定」を参照してください。この場合、恒久サブスクライバはサブスクライバがサブスクライブした後にパブリッシュされたメッセージのみを受信します。

作成するパブリッシャまたはサブスクライバに関連付けるトピック オブジェクトを指定しなければなりません。また、メッセージをフィルタ処理するためのメッセージ セレクタと `noLocal` フラグ（この節で後述）を指定できます。メッセージ セレクタの詳細については、4-66 ページの「メッセージのフィルタ処理」を参照してください。

`createPublisher()` メソッドに `NULL` 値を渡すと、匿名プロデューサが作成されます。この場合、4-24 ページの「メッセージの送信」で説明するように、メッセージの送信時にトピック名を指定しなければなりません。

アプリケーションは、JMS 接続を使用して同じトピックに対してパブリッシュとサブスクライブの両方を行う場合があります。トピック メッセージはすべてのサブスクライバに届けられるので、アプリケーションは自身がパブリッシュしたことを示すメッセージを受信する可能性があります。この動作を防ぐために、JMS アプリケーションは `noLocal` フラグを `true` に設定できます。

トピック パブリッシャまたはトピック サブスクライバの作成が済んだら、以下の `TopicPublisher` メソッドまたは `TopicSubscribe` メソッドを使用して、そのトピック パブリッシャまたはサブスクライバに関連付けられているトピック名にアクセスできます。

```
Topic getTopic(  
) throws JMSEException
```

また、次の `TopicSubscriber` メソッドを使用すると、トピック サブスクライバに関連付けられる `noLocal` 変数の設定値にアクセスできます。

```
boolean getNoLocal(  
) throws JMSEException
```

TopicSession クラス メソッドの詳細については、[javax.jms.TopicSession Javadoc](#) を参照してください。TopicPublisher クラスと TopicSubscriber クラスの詳細については、[javax.jms.TopicPublisher Javadoc](#) および [javax.jms.TopicSubscriber Javadoc](#) を参照してください。

手順 6a : メッセージ オブジェクト (メッセージ プロデューサ) を作成する

注意: この手順は、メッセージ プロデューサだけに適用されます。

メッセージ オブジェクトを作成するには、以下の Session クラス メソッドまたは WLSession クラス メソッドのいずれかを使用します。

■ Session メソッド

注意: これらのメソッドは、QueueSession サブクラスと TopicSession サブクラスの両方によって継承されます。

```
public BytesMessage createBytesMessage(  
    ) throws JMSEException
```

```
public MapMessage createMapMessage(  
    ) throws JMSEException
```

```
public Message createMessage(  
    ) throws JMSEException
```

```
public ObjectMessage createObjectMessage(  
    ) throws JMSEException
```

```
public ObjectMessage createObjectMessage(  
    Serializable object  
    ) throws JMSEException
```

```
public StreamMessage createStreamMessage(  
    ) throws JMSEException
```

```
public TextMessage createTextMessage(  
    ) throws JMSEException
```

```
public TextMessage createTextMessage(  
    String text  
    ) throws JMSEException
```

■ WLSession メソッド

```
public XMLMessage createXMLMessage(  
    String text  
    ) throws JMSEException
```

Session クラスと WLSession クラスのメソッドの詳細については、[javax.jms.Session Javadoc](#) と [weblogic.jms.extensions.WLSession Javadoc](#) をそれぞれ参照してください。Message クラスとそのメソッドの詳細については、2-15 ページの「Message」か、または [javax.jms.Message Javadoc](#) を参照してください。

手順 6b : 非同期メッセージ リスナ (メッセージ コンシューマ) を登録する (オプション)

注意: この手順は、メッセージ コンシューマだけに適用されます。

メッセージを非同期的に受信するには、次の手順で非同期メッセージ リスナを登録する必要があります。

1. `onMessage()` メソッドが組み込まれた [javax.jms.MessageListener](#) インタフェースを実装します。

注意: `onMessage()` メソッドのインタフェースの例については、4-18 ページの「例: PTP アプリケーションの設定」を参照してください。

`onMessage()` メソッド呼び出し内で `close()` メソッドを発行する場合、システム管理者は接続ファクトリをコンフィグレーションするときに「メッセージの短縮を許可」チェックボックスを選択しなければなりません。JMS のコンフィグレーションの詳細については、『管理者ガイド』の「[JMS の管理](#)」を参照してください。

2. 次の `MessageConsumer` メソッドを使用してメッセージ リスナを設定し、リスナ情報を引数として渡します。

```
public void setMessageListener(  
    MessageListener listener  
    ) throws JMSEException
```

3. オプションで、4-48 ページの「セッション例外リスナの定義」で説明するように、例外を取得するためのセッションの例外リスナを実装します。

メッセージ リスナの設定を解除するには、NULL 値を指定して `MessageListener()` メソッドを呼び出します。

メッセージ リスナを定義したら、次の `MessageConsumer` メソッドを呼び出してそのリスナにアクセスできます。

```
public MessageListener getMessageListener(  
    ) throws JMSException
```

注意： WebLogic JMS は、同じセッションの複数の `onMessage()` 呼び出しが同時に実行されないことを保証します。

メッセージ コンシューマが管理者またはサーバのダウンによってクローズされた場合、`ConsumerClosedException` がセッション例外リスナに送信されます (定義されている場合)。このように、必要な場合は新しいメッセージ コンシューマを作成できます。セッション例外リスナの定義については、4-48 ページの「セッション例外リスナの定義」を参照してください。

`MessageConsumer` クラスのメソッドは、`QueueReceiver` および `TopicSubscriber` クラスによって継承されます。`MessageConsumer` クラスのメソッドの詳細については、2-14 ページの「`MessageProducer` と `MessageConsumer`」か、または [javax.jms.MessageConsumer](#) Javadoc を参照してください。

手順 7 : 接続を開始する

接続を開始するには、`Connection` クラスの `start()` メソッドを使用します。

接続の開始、停止、およびクローズの詳細については、4-46 ページの「接続の開始、停止、クローズ」または [javax.jms.Connection](#) Javadoc を参照してください。

例 : PTP アプリケーションの設定

次の例は、`samples\examples\jms\queue` ディレクトリに収められている WebLogic Server 付属の `examples.jms.queue.QueueSend` サンプルからの引用です。`init()` メソッドは、JMS アプリケーションの `QueueSession` をどのように設定して開始するかを示すものです。次に、その `init()` メソッドを示し、合わせて各設定手順も述べます。

必要な変数 (JNDI コンテキストなど)、JMS 接続ファクトリ、およびキュー静的変数を定義します。

```
public final static String JNDI_FACTORY=
    "weblogic.jndi.WLInitialContextFactory";
public final static String JMS_FACTORY=
    "weblogic.examples.jms.QueueConnectionFactory";
public final static String
    QUEUE="weblogic.examples.jms.exampleQueue";

private QueueConnectionFactory qconFactory;
private QueueConnection qcon;
private QueueSession qsession;
private QueueSender qsender;
private Queue queue;
private TextMessage msg;
```

JNDI 初期コンテキストを次のとおり設定します。

```
InitialContext ic = getInitialContext(args[0]);
    :
    :
private static InitialContext getInitialContext(
    String url
) throws NamingException
{
    Hashtable env = new Hashtable();
    env.put(Context.INITIAL_CONTEXT_FACTORY, JNDI_FACTORY);
    env.put(Context.PROVIDER_URL, url);
    return new InitialContext(env);
}
```

注意： サブプレットの JNDI 初期コンテキストを設定する場合は、以下のメソッドを使用します。

```
Context ctx = new InitialContext();
```

JMS キューにメッセージを送信するのに必要なすべてのオブジェクトを作成します。`ctx` オブジェクトは、`main()` メソッドによって渡された JNDI 初期コンテキストです。

```
public void init(  
    Context ctx,  
    String queueName  
) throws NamingException, JMSException  
{
```

手順 1 JNDI で接続ファクトリをルックアップします。

```
qconFactory = (QueueConnectionFactory) ctx.lookup(JMS_FACTORY);
```

手順 2 接続ファクトリを使用して接続を作成します。

```
qcon = qconFactory.createQueueConnection();
```

手順 3 接続を使用してセッションを作成します。次のコードでは、セッションが非トランザクションとして定義され、メッセージに対する確認応答が自動的に行われるものと指定されます。トランザクション セッションと確認応答モードの詳細については、2-9 ページの「Session」を参照してください。

```
qsession = qcon.createQueueSession(false,  
    Session.AUTO_ACKNOWLEDGE);
```

手順 4 JNDI で送り先 (キュー) をルックアップします。

```
queue = (Queue) ctx.lookup(queueName);
```

手順 5 セッションと送り先 (キュー) を使用してメッセージ プロデューサ (キュー センダ) への参照を作成します。

```
qsender = qsession.createSender(queue);
```

手順 6 メッセージ オブジェクトを作成します。

```
msg = qsession.createTextMessage();
```

手順 7 接続を開始します。

```
qcon.start();  
}
```

examples.jms.queue.QueueReceive サンプルの `init()` メソッドは、前記の `QueueSend` `init()` メソッドとほぼ同じですが、例外が 1 つあります。手順 5 と手順 6 は、それぞれ以下のコードに置き換えられます。

```
qreceiver = qsession.createReceiver(queue);  
qreceiver.setMessageListener(this);
```

最初の行では、`createSender()` メソッドを呼び出してキュー センダへの参照を作成する代わりに、アプリケーションは `createReceiver()` メソッドを呼び出してキュー レシーバを作成します。

2 番目の行では、メッセージ コンシューマは非同期メッセージ リスナを登録します。

メッセージがキュー セッションに届くと、そのメッセージは `examples.jms.QueueReceive.onMessage()` メソッドに渡されます。次の `QueueReceive` サンプルからの引用コードは、`onMessage()` インタフェースを示したものです。

```
public void onMessage(Message msg)
{
    try {
        String msgText;
        if (msg instanceof TextMessage) {
            msgText = ((TextMessage)msg).getText();
        } else { // TextMessage ではない場合 ...
            msgText = msg.toString();
        }

        System.out.println("Message Received:" + msgText );

        if (msgText.equalsIgnoreCase("quit")) {
            synchronized(this) {
                quit = true;
                this.notifyAll(); // メイン スレッドに終了するよう通知する
            }
        }
    } catch (JMSEException jmse) {
        jmse.printStackTrace();
    }
}
```

`onMessage()` メソッドは、キュー レシーバを通して受信したメッセージを処理します。このメソッドは、メッセージが `TextMessage` であるかどうかを検証し、そうである場合は、そのメッセージのテキストを印刷します。`onMessage()` が別のタイプのメッセージを受信した場合、そのメッセージの `toString()` メソッドを使用してメッセージの内容を表示します。

注意: 受信したメッセージのタイプが、メッセージ ハンドラ メソッドが予期したタイプであるかどうかを検証するようにしてください。

この例で使用した JMS クラスの詳細については、2-5 ページの「WebLogic JMS のクラス」または [javax.jms](#) Javadoc を参照してください。

例 : Pub/Sub アプリケーションの設定

次の例は、`samples\examples\jms\topic` ディレクトリに収められている WebLogic Server 付属の `examples.jms.topic.TopicSend` サンプルからの引用です。 `init()` メソッドは、JMS アプリケーションのトピック セッションをどのように設定して開始するかを示すものです。次に、その `init()` メソッドを示し、合わせて各設定手順も述べます。

必要な変数 (JNDI コンテキストなど) JMS 接続ファクトリ、およびトピック 静的変数を定義します。

```
public final static String JNDI_FACTORY=
    "weblogic.jndi.WLInitialContextFactory";
public final static String JMS_FACTORY=
    "weblogic.examples.jms.TopicConnectionFactory";
public final static String
    TOPIC="weblogic.examples.jms.exampleTopic";

protected TopicConnectionFactory tconFactory;
protected TopicConnection tcon;
protected TopicSession tsession;
protected TopicPublisher tpublisher;
protected Topic topic;
protected TextMessage msg;
```

JNDI 初期コンテキストを次のとおり設定します。

```
InitialContext ic = getInitialContext(args[0]);
    .
    .
private static InitialContext getInitialContext(
    String url
) throws NamingException
{
    Hashtable env = new Hashtable();
    env.put(Context.INITIAL_CONTEXT_FACTORY, JNDI_FACTORY);
    env.put(Context.PROVIDER_URL, url);
    return new InitialContext(env);
}
```

注意： サブプレットの JNDI 初期コンテキストを設定する場合は、以下のメソッドを使用します。

```
Context ctx = new InitialContext();
```

JMS キューにメッセージを送信するのに必要なすべてのオブジェクトを作成します。ctx オブジェクトは、main() メソッドによって渡された JNDI 初期コンテキストです。

```
public void init(
    Context ctx,
    String topicName
) throws NamingException, JMSEException
{
```

手順 1 JNDI を使用して接続ファクトリをルックアップします。

```
tconFactory =
    (TopicConnectionFactory) ctx.lookup(JMS_FACTORY);
```

手順 2 接続ファクトリを使用して接続を作成します。

```
tcon = tconFactory.createTopicConnection();
```

手順 3 接続を使用してセッションを作成します。次のコードでは、セッションが非トランザクションとして定義され、メッセージに対する確認応答が自動的に行われるものと指定されます。セッション トランザクションと確認応答モードの設定については、2-9 ページの「Session」を参照してください。

```
tsession = tcon.createTopicSession(false,
    Session.AUTO_ACKNOWLEDGE);
```

手順 4 JNDI を使用して送り先 (トピック) をルックアップします。

```
topic = (Topic) ctx.lookup(topicName);
```

手順 5 セッションと送り先 (トピック) を使用してメッセージ プロデューサ (トピック パブリッシャ) への参照を作成します。

```
tpublisher = tsession.createPublisher(topic);
```

手順 6 メッセージ オブジェクトを作成します。

```
msg = tsession.createTextMessage();
```

手順 7 接続を開始します。

```
tcon.start();  
}
```

examples.jms.topic.TopicReceive サンプルの `init()` メソッドは、前記の `TopicSend` `init()` メソッドとほぼ同じですが、例外が 1 つあります。手順 5 と手順 6 は、それぞれ以下のコードに置き換えられます。

```
tsubscriber = tsession.createSubscriber(topic);  
tsubscriber.setMessageListener(this);
```

最初の行では、`createPublisher()` メソッドを呼び出してトピック パブリッシャへの参照を作成する代わりに、アプリケーションは `createSubscriber()` メソッドを呼び出してトピック サブスクライバを作成します。

2 番目の行では、メッセージ コンシューマは非同期メッセージ リスナを登録します。

メッセージがトピック セッションに届くと、そのメッセージは

examples.jms.TopicSubscribe.onMessage() メソッドに渡されます。
`TopicReceive` の `onMessage()` インタフェースは、`QueueReceive` `onMessage()` インタフェース (4-18 ページの「例: PTP アプリケーションの設定」を参照) とほぼ同じです。

この例で使用した JMS クラスの詳細については、2-5 ページの「WebLogic JMS のクラス」または [javax.jms](#) Javadoc を参照してください。

メッセージの送信

4-4 ページの「JMS アプリケーションの設定」で説明したとおり JMS アプリケーションを設定したら、メッセージを送信することができます。メッセージを送信するには、次の手順を実行する必要があります。

1. メッセージ オブジェクトを作成する
2. メッセージを定義する
3. メッセージを送り先に送信する

メッセージを送信するための JMS クラスとメッセージ タイプの詳細については、[javax.jms.Message](#) Javadoc を参照してください。メッセージの受信については、4-31 ページの「メッセージの受信」を参照してください。

手順 1 : メッセージ オブジェクトを作成する

この手順は、4-15 ページの「手順 6a : メッセージ オブジェクト (メッセージ プロデューサ) を作成する」で説明したように、クライアント設定手順の一部として既に実行されています。

手順 2 : メッセージを定義する

この手順は、4-15 ページの「手順 6a : メッセージ オブジェクト (メッセージ プロデューサ) を作成する」で説明したように、アプリケーションの設定時に実行されている場合もあります。この手順が実行済みであるかどうかは、メッセージ オブジェクトを作成するために呼び出されたメソッドによって決まります。たとえば、`TextMessage` タイプと `ObjectMessage` タイプの場合は、メッセージ オブジェクトを作成するときにオプションでメッセージを定義することができます。

既に値が指定されており、それを変更したくない場合は、そのまま手順 3 に進みます。

値が指定されていないか、または既存の値を変更する場合は、適切な `set` メソッドを使用して値を定義できます。たとえば、`TextMessage` のテキストを定義するメソッドは次のとおりです。

```
public void setText(  
    String string  
) throws JMSException
```

注意： メッセージは NULL として定義することができます。

それ以後は、次のメソッドを使用してメッセージを消去できます。

```
public void clearBody(  
) throws JMSException
```

メッセージを定義するためのメソッドの詳細については、[javax.jms.Session](#) Javadoc を参照してください。

手順 3 : メッセージを送り先に送信する

メッセージを送り先に送信するには、メッセージ プロデューサー — キュー センダ (PTP) またはトピック パブリッシャ (Pub/Sub) — と以下の節で説明するメソッドを使用します。Destination オブジェクトと MessageProducer オブジェクトは、4-4 ページの「JMS アプリケーションの設定」で説明したとおり、アプリケーションの設定時に作成されています。

注意： 同じトピックに対して複数のトピック サブスクライバが定義されている場合、各サブスクライバはメッセージの独自のローカル コピーを受信します。受信が済んだら、ヘッダ フィールド値を変更することはできますが、メッセージ プロパティとメッセージ本文は読み込み専用です。メッセージ本文を変更するには、対応するメッセージ タイプの `clearbody()` メソッドを実行して、既存の内容を消去し、書き込みパーミッションを有効にします。

MessageProducer クラスの詳細については、2-14 ページの「MessageProducer と MessageConsumer」または [javax.jms.MessageProducer](#) Javadoc を参照してください。

キュー センダを使用してメッセージを送信する

メッセージを送信するには、以下の `QueueSender` メソッドを使用します。

```
public void send(
    Message message
) throws JMSEException

public void send(
    Message message,
    int deliveryMode,
    int priority,
    long timeToLive
) throws JMSEException

public void send(
    Queue queue,
    Message message
) throws JMSEException

public void send(
    Queue queue,
    Message message,
    int deliveryMode,
    int priority,
    long timeToLive
) throws JMSEException
```

まず、メッセージを定義する必要があります。また、キュー名（匿名メッセージプロデューサ用）、配信モード（`DeliveryMode.PERSISTENT` または `DeliveryMode.NON_PERSISTENT`）、優先度（0-9）、および存続時間（ミリ秒単位）も指定する必要があります。指定しない場合、配信モード、優先度、および存続時間の各属性は以下のいずれかに設定されます。

- プロデューサに対して定義された接続ファクトリまたは送り先オーバーライド コンフィグレーション属性（『管理者ガイド』の「[JMS の管理](#)」を参照）
- メッセージ プロデューサの `set` メソッドによって指定された値（4-29 ページの「メッセージ プロデューサ コンフィグレーション属性の動的コンフィグレーション」を参照）

注意： WebLogic JMS も、独自の `TimeToDeliver` 属性（生成時間）を提供します（4-29 ページの「メッセージ プロデューサ コンフィグレーション属性の動的コンフィグレーション」を参照）。

配信モードを `PERSISTENT` として定義した場合、『管理者ガイド』の「[JMS の管理](#)」で説明してあるように、送り先のバッキング ストアをコンフィグレーションする必要があります。

注意: バッキングストアがコンフィグレーションされていない場合、配信モードは `NON_PERSISTENT` に変更され、メッセージは永続ストレージに書き込まれません。

キューセンダが匿名プロデューサである場合（つまり、キューが作成されたときにその名前が `NULL` に設定された場合）、キュー名を指定して（最後の2つのメソッドのいずれかを使用する）メッセージの配信先を指示する必要があります。匿名プロデューサの定義の詳細については、4-12 ページの「`QueueSender` と `QueueReceiver` の作成」を参照してください。

たとえば、次のコードは、永続メッセージを優先度 4、存続時間 1 時間で送信します。

```
QueueSender.send(message, DeliveryMode.PERSISTENT, 4, 3600000);
```

`QueueSender` クラスのメソッドの詳細については、[javax.jms.QueueSender](#) Javadoc を参照してください。

TopicPublisher を使用してメッセージを送信する

メッセージを送信するには、以下の `TopicPublisher` メソッドを使用します。

```
public void publish(
    Message message
) throws JMSEException

public void publish(
    Message message,
    int deliveryMode,
    int priority,
    long timeToLive
) throws JMSEException

public void publish(
    Topic topic,
    Message message
) throws JMSEException

public void publish(
    Topic topic,
    Message message,
    int deliveryMode,
    int priority,
    long timeToLive
) throws JMSEException
```

メッセージを指定する必要があります。また、トピック名、配信モード (`DeliveryMode.PERSISTENT` または `DeliveryMode.NON_PERSISTENT`)、優先度 (0-9) および存続時間 (ミリ秒単位) も指定する必要があります。指定しない場合、配信モード、優先度、および存続時間の各属性は以下のいずれかに設定されます。

- プロデューサに対して定義された接続ファクトリまたは送り先オーバーライド コンフィグレーション属性 (『管理者ガイド』の「[JMS の管理](#)」を参照)
- メッセージ プロデューサの `set` メソッドによって指定された値 (4-29 ページの「メッセージ プロデューサ コンフィグレーション属性の動的コンフィグレーション」を参照)

注意: WebLogic JMS も、独自の `TimeToDeliver` 属性 (生成時間) を提供します (4-29 ページの「メッセージ プロデューサ コンフィグレーション属性の動的コンフィグレーション」を参照)。

配信モードを `PERSISTENT` として定義した場合、『管理者ガイド』の「[JMS の管理](#)」で説明してあるようにバッキング ストアをコンフィグレーションする必要があります。

注意: バッキング ストアがコンフィグレーションされていない場合、配信モードは `NON_PERSISTENT` に変更され、メッセージは保存されません。

トピック パブリッシャが匿名プロデューサである場合 (つまり、トピックが作成されたときにその名前が `NULL` に設定された場合)、トピック名を指定して (最後の 2 つのメソッドのいずれかを使用する) メッセージの配信先を指示する必要があります。匿名プロデューサの定義の詳細については、4-13 ページの「`TopicPublisher` と `TopicSubscriber` の作成」を参照してください。

たとえば、次のコードは、永続メッセージを優先度 4、存続時間 1 時間で送信します。

```
TopicPublisher.publish(message, DeliveryMode.PERSISTENT,  
    4,3600000);
```

`TopicPublisher` クラスのメソッドの詳細については、[javax.jms.TopicPublisher](#) Javadoc を参照してください。

メッセージ プロデューサ コンフィグレーション属性の動的コンフィグレーション

前節で説明したように、メッセージを送信するときには、配信モード、優先度、存続時間、および配信時間をオプションで指定できます。指定しない場合、配信モード、優先度、存続時間、および配信時間の各属性は、『管理者ガイド』の「[JMS の管理](#)」で説明しているように、プロデューサに対して定義されている接続ファクトリまたは送り先オーバーライドのコンフィグレーション属性に設定されます。

代わりに、メッセージ プロデューサ `set` メソッドを使用して配信モード、優先度、および存続時間を動的に設定することによって、コンフィグレーション済みの属性値をオーバーライドすることもできます。

次の表に、メッセージ プロデューサの `set` メソッドと `get` メソッドを、動的コンフィグレーション可能な属性ごとに示します。

注意： 配信モード、優先度、存続時間、配信時間の各属性値は、[配信モードのオーバーライド]、[優先順位オーバーライド]、[生存時間オーバーライド]、および [送信時間オーバーライド] 送り先コンフィグレーション属性を使用して、送り先によってオーバーライドできます。詳細については、[Administration Console オンライン ヘルプ](#)を参照してください。

表 4-2 メッセージ プロデューサの `set` メソッドおよび `get` メソッド

属性	set メソッド	get メソッド
配信モード	<code>public void setDeliveryMode(int deliveryMode) throws JMSEException</code>	<code>public int getDeliveryMode() throws JMSEException</code>
優先度	<code>public void setPriority(int defaultPriority) throws JMSEException</code>	<code>public int getPriority() throws JMSEException</code>
存続時間	<code>public void setTimeToLive(long timeToLive) throws JMSEException</code>	<code>public long getTimeToLive() throws JMSEException</code>
配信時間	<code>public void setTimeToDeliver(long timeToDeliver) throws JMSEException</code>	<code>public long getTimeToDeliver() throws JMSEException</code>

注意: JMS では、メッセージ ID とタイムスタンプ情報を無効にするための `MessageProducer` メソッドを定義することもできます。ただし、これらのメソッドは WebLogic JMS では無視されます。

`MessageProducer` クラス メソッドの詳細については、[javax.jms.MessageProducer](#) Javadoc を参照してください。

例 : PTP アプリケーション内でのメッセージの送信

次の例は、`samples\examples\jms\queue` ディレクトリに収められている WebLogic Server 付属の `examples.jms.queue.QueueSend` サンプルからの引用です。この例では、`TextMessage` を作成し、メッセージのテキストを設定してキューに送信するために必要なコードを示してあります。

```
msg = qsession.createTextMessage();
    :
    :
public void send(
    String message
) throws JMSEException
{
    msg.setText(message);
    qsender.send(msg);
}
```

`QueueSender` クラスとメソッドの詳細については、[javax.jms.QueueSender](#) Javadoc を参照してください。

例 : Pub/sub アプリケーション内でのメッセージの送信

次の例は、`samples\examples\jms\topic` ディレクトリに収められている WebLogic Server 付属の `examples.jms.topic.TopicSend` サンプルからの引用です。この例では、`TextMessage` を作成し、メッセージのテキストを設定してトピックに送信するために必要なコードを示してあります。

```
msg = tsession.createTextMessage();
    :
    :
```

```
public void send(  
    String message  
) throws JMSException  
{  
    msg.setText(message);  
    tpublisher.publish(msg);  
}
```

TopicPublisher クラスとメソッドの詳細については、
[javax.jms.TopicPublisher](#) Javadoc を参照してください。

メッセージの受信

4-4 ページの「JMS アプリケーションの設定」で説明したとおり JMS アプリケーションを設定したら、メッセージを受信することができます。

メッセージを受信するには、以下の節で説明するとおりレシーバオブジェクトを作成し、メッセージを同期受信するか非同期受信するかを指定する必要があります。

メッセージを受信する順序は、以下の要素によって設定できます。

- コンフィグレーション時に定義されるメッセージ配信属性（配信モードとソート条件）（『管理者ガイド』の「[JMS の管理](#)」を参照）か、または `send()` メソッドの一部として（4-24 ページの「[メッセージの送信](#)」を参照）
- 送り先キーを使用して設定される送り先ソート順序（『管理者ガイド』の「[JMS の管理](#)」を参照）

受信が済んだら、ヘッダ フィールド値を変更することはできますが、メッセージプロパティとメッセージ本文は読み込み専用ですメッセージ本文を変更するには、対応するメッセージタイプの `clearbody()` メソッドを実行して、既存の内容を消去し、書き込みパーミッションを有効にします。

メッセージを受信するための JMS クラスとメッセージタイプの詳細については、[javax.jms.Message](#) Javadoc を参照してください。メッセージの送信については、4-24 ページの「[メッセージの送信](#)」を参照してください。

メッセージの非同期受信

この手順については、アプリケーションの設定手順の中で説明されています。詳細については、4-16 ページの「手順 6b: 非同期メッセージリスナ (メッセージコンシューマ) を登録する (オプション)」を参照してください。

注意: 接続ファクトリのコンフィグレーション時に [最大メッセージ] 属性を設定すると、非同期セッションの間に存在し、メッセージリスナにまだ渡されていないメッセージの最大数を指定できます。

メッセージの同期受信

メッセージを同期的に受信するには、以下の `MessageConsumer` メソッドを使用します。

```
public Message receive(  
    ) throws JMSEException  
  
public Message receive(  
    long timeout  
    ) throws JMSEException  
  
public Message receiveNoWait(  
    ) throws JMSEException
```

どのケースでも、アプリケーションは次に生成されるメッセージを受信します。`receive()` メソッドを引数なしで呼び出した場合、その呼び出しはメッセージが生成されるか、またはアプリケーションが閉じられるまで無期限にブロックされます。代わりに、タイムアウト値を渡してメッセージの待ち時間を指定することもできます。値 0 を指定して `receive()` メソッドを呼び出した場合、その呼び出しは無期限にブロックされます。`receiveNoWait()` メソッドは、次のメッセージが存在する場合はそれを受信し、それ以外の場合は `NULL` を返します。この場合、呼び出しはブロックされません。

`MessageConsumer` クラスのメソッドは、`QueueReceiver` および `TopicSubscriber` クラスによって継承されます。`MessageConsumer` クラスのメソッドの詳細については、[javax.jms.MessageConsumer](#) Javadoc を参照してください。

例：PTP アプリケーション内でのメッセージの同期受信

次の例は、`samples\examples\jms\queue` ディレクトリに収められている WebLogic Server 付属の `examples.jms.queue.QueueReceive` サンプルからの引用です。メッセージ リスナを設定するのではなく、各メッセージに対して `greceiver.receive()` を呼び出します。次に例を示します。

```
greceiver = qsession.createReceiver(queue);
greceiver.receive();
```

最初の行では、キューに対するキュー レシーバが作成されます。2 番目の行では、`receive()` メソッドが実行されます。`receive()` メソッドは、ブロックしてメッセージを待ちます。

例：Pub/sub アプリケーション内でのメッセージの同期受信

次の例は、`samples\examples\jms\topic` ディレクトリに収められている WebLogic Server 付属の `examples.jms.topic.TopicReceive` サンプルからの引用です。メッセージ リスナを設定するのではなく、各メッセージに対して `tsubscriber.receive()` を呼び出します。

次に例を示します。

```
tsubscriber = tsession.createSubscriber(topic);
Message msg = tsubscriber.receive();
msg.acknowledge();
```

最初の行では、トピックに対するトピック サブスクリバが作成されます。2 番目の行では、`receive()` メソッドが実行されます。`receive()` メソッドは、ブロックしてメッセージを待ちます。

受信メッセージの回復

注意： この節は、2-10 ページの「非トランザクション セッション」で説明したように、確認応答モードが `CLIENT_ACKNOWLEDGE` に設定されている非トランザクション セッションだけに適用されます。同期受信される `AUTO_ACKNOWLEDGE` メッセージは確認応答済みのため、受信されないことがあります。

アプリケーションは、次のメソッドを使用して、JMS にメッセージの再配信（未確認）を要求できます。

```
public void recover(  
    ) throws JMSEException
```

`recover()` メソッドは、次の手順を実行します。

- セッションのメッセージ配信を停止します。
- 確認応答されていない（ただし配信されている可能性のある）すべてのメッセージに再配信のタグを付けます。
- そのセッションの確認応答されていない最初のメッセージからメッセージの送信を再開します。

キュー内のメッセージは、必ずしも元の配信順序と同じ順序で、または同じキュー コンシューマに再配信されるとは限りません。

受信メッセージの確認応答

注意： この節は、2-10 ページの「非トランザクション セッション」で説明したように、確認応答モードが `CLIENT_ACKNOWLEDGE` に設定されている非トランザクション セッションだけに適用されます。

受信したメッセージの確認応答を行うには、次の `Message` メソッドを使用します。

```
public void acknowledge(  
    ) throws JMSEException
```

`acknowledge()` メソッドは、現在のメッセージと、クライアントの最後の確認応答時から受信した過去のすべてのメッセージの確認応答を行います。確認応答が行われないメッセージは、クライアントに再配信できます。

このメソッドは、確認応答モードが `CLIENT_ACKNOWLEDGE` に設定されている非トランザクション セッションに対してだけ有効です。それ以外の場合、このメソッドは無視されます。

オブジェクト リソースの解放

JMS アプリケーションに代わって作成した接続、セッション、メッセージ プロデューサ / コンシューマ、接続コンシューマ、またはキュー ブラウザを使い終えたら、それらを明示的にクローズしてリソースを解放する必要があります。

JMS オブジェクトをクローズするには、`close()` メソッドを次のとおり定義します。

```
public void close(  
    ) throws JMSException
```

オブジェクトをクローズするときには、以下の処理が行われます。

- メソッド呼び出しが完了して未処理の同期アプリケーションがキャンセルされるまで、その呼び出しがブロックされます。
- 関連付けられているすべてのサブオブジェクトもクローズされます。たとえば、セッションをクローズすると、関連付けられているすべてのメッセージ プロデューサおよびコンシューマもクローズされる。接続をクローズすると、関連付けられているすべてのセッションもクローズされる

各オブジェクトについての `close()` メソッドの影響については、適切な [javax.jms](#) Javadoc を参照してください。また、接続またはセッションの `close()` メソッドの詳細については、4-46 ページの「接続の開始、停止、クローズ」または 4-49 ページの「セッションのクローズ」をそれぞれ参照してください。

次の例は、`samples\examples\jms\queue` ディレクトリに収められている WebLogic Server 付属の `examples.jms.queue.QueueSend` サンプルからの引用です。この例を見れば、メッセージ コンシューマ、セッション、および接続オブジェクトをどのようにクローズするかが分かります。

```
public void close(  
    ) throws JMSException  
{  
    qreceiver.close();  
    qsession.close();  
    qcon.close();  
}
```

この `QueueSend` の例では、`main()` の最後に `close()` メソッドが呼び出され、オブジェクトのクローズとリソースの解放が行われます。

ロールバックまたは回復したメッセージの管理

以下の節では、ロールバックまたは回復したメッセージを管理する以下の方法について説明します。

- メッセージの再配信遅延の設定
- メッセージの再配信制限の設定

メッセージの再配信遅延の設定

一時的または外部的な要因でアプリケーションがメッセージを正しく処理できない場合に、メッセージの再配信を遅延させることができます。これによって、アプリケーションは、現時点では処理できない「有害な」メッセージを一時的に受信できないようにすることができます。メッセージがロールバックまたは回復される場合、再配信遅延は、メッセージが止められてから再配信が試行されるまでの間隔です。

JMS でメッセージをすぐに再配信すると、エラーの原因が解決されず、アプリケーションはメッセージを処理できないままの場合があります。ただし、アプリケーションが再配信遅延用にコンフィグレーションされている場合、メッセージがロールバックまたは回復されると、メッセージは再配信の遅延が過ぎるまで止められます。遅延の期間を過ぎた時点でエラーが解決されていれば、メッセージを再配信できるようになります。

セッションによって消費された結果、ロールバックまたは回復したすべてのメッセージは、ロールバックまたは回復時にそのセッションの再配信遅延を受信します。単一のユーザトランザクションの一部として複数のセッションで消費されたメッセージは、個々のメッセージを消費したセッションの機能として異なる再配信遅延を受信します。意識的か、または失敗の結果、クライアントによる確認応答またはコミットされていないメッセージには、再配信遅延が割り当てられません。

再配信遅延の設定

セッションは、作成時に接続ファクトリから再配信遅延を継承します。接続ファクトリの `RedeliveryDelay` 属性は、Administration Console でコンフィグレーションします。詳細については、Administration Console オンライン ヘルプの「[JMS 接続ファクトリ](#)」を参照。

セッションを作成するアプリケーションは、`javax.jms.Session` インタフェースに対する WebLogic 固有の拡張を使用して接続ファクトリ設定をオーバーライドできます。セッション属性は動的なので、いつでも変更できます。セッションの再配信遅延を変更すると、変更後にそのセッションで消費およびロールバック（または回復）されるすべてのメッセージに影響します。

セッションに対して再配信遅延を設定するメソッドは、`javax.jms.Session` インタフェースの拡張である `weblogic.jms.extensions.WLSession` インタフェースを介して提供されます。セッションの再配信遅延を定義するには、以下のメソッドを使用します。

```
public void setRedeliveryDelay(  
    long redeliveryDelay  
) throws JMSEException;  
  
public long getRedeliveryDelay(  
) throws JMSEException;
```

`WLSession` クラスの詳細については、[weblogic.jms.extensions.WLSession](#) Javadoc を参照してください。

送り先での再配信遅延のオーバーライド

再配信遅延がセッションで設定されているかどうかに関係なく、メッセージがロールバックまたは回復される送り先で再配信遅延の設定をオーバーライドできます。メッセージの再配信に割り当てられた再配信遅延のオーバーライドは、メッセージがロールバックまたは回復されるときに有効になります。

送り先の `RedeliveryDelayOverride` 属性は、Administration Console でコンフィグレーションします。詳細については、Administration Console オンラインヘルプの「[JMS の送り先](#)」を参照してください。

メッセージの再配信制限の設定

WebLogic JMS によるアプリケーションへのメッセージ再配信の試行回数に対して制限を設けることができます。WebLogic JMS が送り先へのメッセージ再配信を指定した回数だけ試みて失敗すると、メッセージの送り先に関連付けられたエラー送り先にメッセージをリダイレクトできます。エラー送り先がコンフィグレーションされていない場合、メッセージは自動的に削除されます。

メッセージの再配信制限のコンフィグレーション

送り先によるコンシューマへのメッセージ再配信の試行が指定した再配信制限に達すると、送り先はメッセージを配信不能にします。RedeliveryLimit 属性は、送り先で設定され、Administration Console でコンフィグレーションできます。詳細については、Administration Console オンライン ヘルプの「[JMS の送り先](#)」を参照してください。

配信されなかったメッセージに対するエラー送り先のコンフィグレーション

配信されなかったメッセージのエラー送り先をコンフィグレーションすると、メッセージが配信不能になったときに、指定したエラー送り先にリダイレクトされます。エラー送り先は、キューでもトピックでもかまいませんが、定義した送り先と同じ JMS サーバでコンフィグレーションする必要があります。エラー送り先がコンフィグレーションされていない場合、配信されなかったメッセージは自動的に削除されます。

送り先の `ErrorDestination` 属性は、Administration Console でコンフィグレーションします。詳細については、Administration Console オンライン ヘルプの「[JMS の送り先](#)」を参照してください。

メッセージの再配信試行が既に指定した制限に達しているものの、エラー送り先も最大割り当てに達している場合、メッセージは配信不能になり、削除されます。永続メッセージは格納され、サーバを再起動すると元の送り先（エラー送り先ではない）に再表示される一方で、非永続メッセージは削除されます。いずれの場合も、ログメッセージが生成されます。ログファイルへの書き込みが滞るのを防ぐために、エラーが解決されるまで、ログメッセージは、エラー送り先ごとに 5 分おきに 1 回だけ生成されます。

メッセージ配信時間の設定

アプリケーションへのメッセージ配信を、将来の指定した時間にスケジューリングできます。メッセージ配信は、短期間（秒や分など）でも長期間（数時間単位でバッチ処理する場合など）でもかまいません。また、相対配信時間（ミリ秒単位）で指定することもできます。この時間は、後でメッセージの絶対配信時間に計算されます。その配信時間になって配信されるまでメッセージは表示されないため、将来の特定の時間に作業をスケジューリングできます。

メッセージが送信されるのは1回だけで、繰り返し送信されることはありません。メッセージが繰り返し送信されるようにするには、受信したスケジューリング済みのメッセージを元の送信先に戻す必要があります。1度のみというセマンティクスを保証するため、受信、送信、およびこれらに関連する作業は同じトランザクションのもとで行われます。

プロデューサに対する配信時間の設定

個々のプロデューサに対する配信時間の設定および取得のサポートは、`javax.jms.MessageProducer` インタフェースの拡張である `weblogic.jms.extensions.WLMessageProducer` インタフェースを介して提供されます。個々のプロデューサに対して配信時間を定義するには、以下のメソッドを使用します。

```
public void setTimeToDeliver(  
    long timeToDeliver  
    ) throws JMSEException;  
  
public long getTimeToDeliver(  
    ) throws JMSEException;
```

`WLMessageProducer` クラスの詳細については、[weblogic.jms.extensions.WLMessageProducer](#) Javadoc を参照してください。

メッセージに対する配信時間の設定

注意: ここで説明するメッセージメソッドは、プロデューサを介して設定する他の JMS メッセージメソッドと似ています。特に、配信時間の設定は JMS プロバイダ用に予約されます。アプリケーションはメッセージの値を設定できますが、プロデューサは、メッセージが送信またはパブリッシュされたときにその値をオーバーライドします。

`DeliveryTime` は、メッセージを配信できる最も早い絶対時間を定義する JMS メッセージヘッダです。つまり、メッセージはメッセージングシステムによって保持され、その時間になるまでどのコンシューマにも配信されません。

`DeliveryTime` は、JMS ヘッダフィールドとして送り先でのメッセージのソート、またはメッセージの選択に使用できます。データ型変換の目的で、配信時間は長整数として保存されます。

個々のメッセージに対する配信時間の設定および取得のサポートは、`javax.jms.Message` インタフェースの拡張である

`weblogic.jms.extensions.WLMessage` インタフェースを介して提供されます。メッセージの配信時間を定義するには、以下のメソッドを使用します。

```
public void setJMSDeliveryTime(  
    long deliveryTime  
) throws JMSEException;  
  
public long getJMSDeliveryTime(  
) throws JMSEException;
```

`WLMessage` クラスの詳細については、[weblogic.jms.extensions.WLMessage](#) Javadoc を参照してください。

配信時間のオーバーライド

作成されたプロデューサは、接続の作成に使用する接続ファクトリ（プロデューサもそこに含まれます）から `TimeToDeliver` 属性（ミリ秒）を継承します。配信時間がプロデューサで設定されているかどうかに関係なく、メッセージが送信またはパブリッシュされる送り先で配信時間の設定をオーバーライドできます。管理者は、相対形式またはスケジューリング済み文字列形式のいずれかで送り先に対する `TimeToDeliverOverride` 属性を設定できます。

相対配信時間のオーバーライドの設定

相対 `TimeToDeliverOverride` は、整数で指定した文字列で、Administration Console でコンフィグレーション可能です。詳細については、Administration Console オンライン ヘルプの「[JMS の送り先](#)」を参照してください。

スケジューリング済み配信時間のオーバーライドの設定

スケジューリング済み `TimeToDeliverOverride` は `weblogic.jms.extensions.schedule` クラスを使用して指定できます。このクラスは、スケジュールを取得し、指定されたメッセージ配信時間を返すメソッドを提供します。cron に似た文字列がスケジュールの定義に使用されます。書式は、次の BNF 構文で定義されます。

```
schedule := millisecond second minute hour dayOfMonth month
          dayOfWeek
```

`second` フィールドを指定するための BNF 構文は次のとおりです。

```
second      := * | secondList
secondList  := secondItem [, secondList]
secondItem  := secondValue | secondRange
SecondRange := secondValue - secondValue
```

ミリ秒、分、時、日、月、曜日に対する同様の BNF 文を 2 番目の構文から取得できます。各フィールドの値は、以下の範囲の正の整数で指定します。

```
milliSecondValue := 0-999
secondValue       := 0-59
minuteValue       := 0-59
hourValue         := 0-23
dayOfMonthValue   := 1-31
monthValue        := 1-12
dayOfWeekValue    := 1-7
```

注意： これらの値は、`monthValue` を除いて、`java.util.Calendar` クラスで使用するのと同じ範囲です。`monthValue` の `java.util.Calendar` の範囲は、1-12 ではなく 0-11 です。

この構文を使用すると、2 つの時間の間のすべての時間を示す値の範囲で各フィールドを表すことができます。たとえば、`dayOfWeek` フィールドの 2-6 は、月曜から金曜まで（双方の曜日を含む）を示します。また、カンマ区切りのリストで各フィールドを指定することもできます。たとえば、分フィールドの

0,15,30,45 は、1 時間内の 15 分おきの値を示します。さらに、個々の値と値の範囲の組み合わせで各フィールドを定義することもできます。たとえば、時フィールドの 9-17,0 は、午前 9 時と午後 5 時の間と深夜 12 時を示します。

補足のセマンティクスは以下のとおりです。

- セミコロン (;) で区切って複数のスケジュールが指定されている場合、次のスケジュール時間は、最も早い値を返すスケジュールを基に決定されます。この使い方としては、曜日を基に変更されるスケジュールを指定する場合があります (下記の最後の例を参照してください)。
- dayOfWeek の値 1 は日曜日です。
- 値 * は、そのフィールドのあらゆる時間を示します。たとえば、月フィールドの * は、毎月という意味です。時フィールドの * は、毎時という意味です。
- 値 1、つまり last (大文字と小文字の区別はありません) は、そのフィールドで使用できる値で最も大きな値を示します。
- 日に対して月の最大値を超える値を指定すると、その月の最大値が指定されます。たとえば、うるう年の 2 月に対して 31 を指定した場合、スケジュールは、29 と見なしてスケジュールリングします。これは、月フィールドを 31 に設定すると、その月の最後の日になるということです。
- ミリ秒が指定される場合、1 秒内で最も近い 50 番目の値に丸められます。値は、0、19、39、59...979...999 です。したがって、0-40 は 0-39 に、50-999 は 39-999 に丸められます。

注意： このクラスの静的メソッドのいずれか 1 つに対するメソッドパラメータとして Calendar が指定されない場合、使用されるカレンダーは、デフォルトの java.util.TimeZone およびデフォルトの java.util.Locale がある java.util.GregorianCalendar です。

表 4-3 配信時間のスケジュールの例

例	説明
0 0 0,30 * * * *	次の最も近い 30 分
* * 0,30 4-5 * * *	午前 4 時から午前 5 時までの 30 分の任意の最初の分
* * * 9-16 * * *	午前 9 時と午後 5 時の間 (9:00.00 A.M. ~ 4:59.59 P.M.)

表 4-3 配信時間のスケジュールの例（続き）

例	説明
* * * * 8-14 * 2	その月の第 2 火曜日
* * * 13-16 * * 0	日曜日の午後 1 時と午後 5 時の間
* * * * * 31 *	その月の最後の日
* * * * 15 4 1	次に日曜日になる 4 月 15 日
0 0 0 1 * * 2-6;0 0 0 2 * * 1,7	平日の午前 1 時および週末の午前 2 時

JMS スケジュール インタフェース

`weblogic.jms.extensions.schedule` クラスには、反復時間式に一致する次のスケジュール時間を返すメソッドがあります。この式は、`TimeToDeliverOverride` と同じ構文を使用します。ミリ秒で返される時間は、相対でも絶対でもかまいません。

`WLSession` クラスの詳細については、[weblogic.jms.extensions.Schedule Javadoc](#) を参照してください。

次のメソッドを使用すると、指定した時間の後の次のスケジュール時間を定義できます。

```
public static Calendar nextScheduledTime(
    String schedule,
    Calendar calendar
) throws ParseException {
```

次のメソッドを使用すると、現在の時間の後の次のスケジュール時間を定義できます。

```
public static Calendar nextScheduledTime(
    String schedule,
) throws ParseException {
```

次のメソッドを使用すると、指定した時間の後の次のスケジュール時間を絶対ミリ秒で定義できます。

```
public static long nextScheduledTimeInMillis(
    String schedule,
    long timeInMillis
) throws ParseException
```

次のメソッドを使用すると、指定した時間の後の次のスケジュール時間を相対ミリ秒で定義できます。

```
public static long nextScheduledTimeInMillisRelative(  
    String schedule,  
    long timeInMillis  
    ) throws ParseException {
```

次のメソッドを使用すると、現在の時間の後の次のスケジュール時間を相対ミリ秒で定義できます。

```
public static long nextScheduledTimeInMillisRelative(  
    String schedule  
    ) throws ParseException {
```

存続時間の値との関係

指定した存続時間の値 (`JMSExpiration`) が指定した配信時間と同じかそれより少ない場合、メッセージの配信は成功します。ただし、メッセージは通知されずに期限切れになります。

接続の管理

以下の節では、接続を管理する方法について説明します。

- 接続例外リスナの定義
- 接続メタデータへのアクセス
- 接続の開始、停止、クローズ

接続例外リスナの定義

例外リスナは、接続に問題が発生するとアプリケーションに非同期的に通知します。このメカニズムは、通知されない限り接続がメッセージの消費を待ち続ける場合に役立ちます。

注意： 例外リスナの目的は、接続によって送出されたすべての例外をモニタすることではなく、本来なら配信されない例外を配信することです。

接続に対する例外リスナを定義するには、次の Connection メソッドを使用します。

```
public void setExceptionListener(  
    ExceptionListener listener  
) throws JMSException
```

接続に対する ExceptionListener オブジェクトを指定しなければなりません。

JMS プロバイダは、接続の問題を発見すると、次の ExceptionListener メソッドを使用して例外リスナ（定義されている場合）に通知します。

```
public void onException(  
    JMSException exception  
)
```

JMS プロバイダは、このメソッドを呼び出すときに、問題を説明する例外を指定します。

接続に対する例外リスナにアクセスするには、次の Connection メソッドを使用します。

```
public ExceptionListener getExceptionListener(  
) throws JMSException
```

接続メタデータへのアクセス

特定の接続に関連付けられているメタデータにアクセスするには、次の Connection メソッドを使用します。

```
public ConnectionMetaData getMetaData(  
) throws JMSException
```

このメソッドは、JMS メタデータへのアクセスに使用する ConnectionMetaData オブジェクトを返します。次の表に、JMS メタデータのタイプと、それらにアクセスするために使用できる get メソッドを示します。

表 4-4 接続メタデータ get メソッド

JMS メタデータ	get メソッド
バージョン	<pre>public String getJMSVersion() throws JMSException</pre>
メジャーバージョン	<pre>public int getJMSMajorVersion() throws JMSException</pre>

表 4-4 接続メタデータ get メソッド (続き)

JMS メタデータ	get メソッド
マイナーバージョン	<code>public int getJMSMinorVersion() throws JMSEException</code>
プロバイダ名	<code>public String getJMSProviderName() throws JMSEException</code>
プロバイダバージョン	<code>public String getProviderVersion() throws JMSEException</code>
プロバイダメジャーバージョン	<code>public int getProviderMajorVersion() throws JMSEException</code>
プロバイダマイナーバージョン	<code>public int getProviderMinorVersion() throws JMSEException</code>
JMSX プロパティ名	<code>public Enumeration getJMSXPropertyNames() throws JMSEException</code>

ConnectionMetaData クラスの詳細については、
[javax.jms.ConnectionMetaData](#) Javadoc を参照してください。

接続の開始、停止、クローズ

メッセージの流れを制御するために、以下の `start()` メソッドと `stop()` メソッドをそれぞれ使用して、接続を一時的に開始および停止できます。

`start()` メソッドと `stop()` メソッドの詳細は以下のとおりです。

```
public void start(
) throws JMSEException

public void stop(
) throws JMSEException
```

新しく作成された接続は停止しています - 接続が開始するまで、メッセージは受信されません。一般に、他の JMS オブジェクトは、4-4 ページの「JMS アプリケーションの設定」で説明するとおり、接続が開始する前からメッセージを処理するよう設定されます。メッセージは、停止している接続上に作成することはできますが、停止している接続に届けることはできません。

接続が開始されていれば、`stop()` メソッドを使用して接続を停止できます。このメソッドは、次の手順を実行します。

- すべてのメッセージの配信を中断します。接続が再開されるか、そのメッセージに関連付けられている存続時間に達するまで、メッセージの受信を待っているアプリケーションは何も返しません。
- 現在メッセージを処理しているすべてのメッセージ リスナが完了するまで待機します。

一般に、JMS プロバイダは接続を作成するときに大量のリソースを割り当てます。接続が使用されなくなったら、その接続をクローズしてリソースを解放する必要があります。接続をクローズするには、次のメソッドを使用します。

```
public void close(  
    ) throws JMSEException
```

このメソッドは、次の手順を実行して系統的にシャットダウンを行います。

- 保留中のすべてのメッセージの受信を終了させます。アプリケーションは、クローズ時にメッセージを受信できない場合はメッセージまたは NULL を返す場合があります。
- 現在メッセージを処理しているすべてのメッセージ リスナが完了するまで待機します。
- 処理中のトランザクションを、そのトランザクション セッション上でロールバックします（こうしたトランザクションが外部 JTA ユーザ トランザクションの一部である場合を除きます）。JTA ユーザ トランザクションの詳細については、5-6 ページの「JTA ユーザ トランザクションの使い方」を参照してください。
- クライアントが確認応答を行うセッションの確認応答は強制しません。確認応答を強制しないことにより、キューおよび信頼性の高い処理が要求される恒久サブスクリプション用のメッセージが失われなくなります。

接続をクローズすると、関連付けられているすべてのオブジェクトがクローズされます。受信メッセージの `acknowledge()` メソッドを除いて、接続で作成または受信されたメッセージ オブジェクトは引き続き使用できます。閉じた接続をクローズしても影響はありません。

注意： クローズされた接続のセッションから受信したメッセージを確認応答しようとする、`IllegalStateException` が送出されます。

セッションの管理

以下の節では、セッションを管理する方法について説明します。

- セッション例外リスナの定義
- セッションのクローズ

セッション例外リスナの定義

例外リスナは、セッションに問題が発生すると、クライアントに非同期的に通知します。これは、通知されない限りセッションがメッセージの消費を待ち続ける場合に役立ちます。

注意： 例外リスナの目的は、セッションによって送出されたすべての例外をモニタすることではなく、本来なら通知されない例外を通知することです。

セッションに対する例外リスナを定義するには、次の `WLSession` メソッドを使用します。

```
public void setExceptionListener(  
    ExceptionListener listener  
) throws JMSEException
```

セッションに対する `ExceptionListener` オブジェクトを指定しなければなりません。

JMS プロバイダは、セッションの問題を発見すると、次の `ExceptionListener` メソッドを使用して例外リスナ（定義されている場合）に通知します。

```
public void onException(  
    JMSEException exception  
)
```

JMS プロバイダは、このメソッドを呼び出すときに、問題を説明する例外を指定します。

セッションに対する例外リスナにアクセスするには、次の `WLSession` メソッドを使用します。

```
public ExceptionListener getExceptionListener(  
) throws JMSEException
```

注意: 1つのセッションに対して1つのスレッドしか存在しないので、例外リスナとメッセージリスナ（非同期メッセージ配信用に使用される）を同時に実行することはできません。そのため、問題が発生したときにメッセージリスナが実行されている場合、そのメッセージリスナが実行を完了するまで例外リスナはブロックされます。メッセージリスナの詳細については、4-32ページの「メッセージの非同期受信」を参照してください。

セッションのクローズ

接続と同じように、JMS プロバイダはセッションを作成するときに大量のリソースを割り当てます。セッションが使用されなくなったら、そのセッションをクローズしてリソースを解放することをお勧めします。セッションをクローズするには、次の `Session` メソッドを使用します。

```
public void close(  
    ) throws JMSException
```

注意: `close()` メソッドは、セッションスレッドとは別個のスレッドから呼び出すことができる唯一の `Session` メソッドです。

このメソッドは、次の手順を実行して系統的にシャットダウンを行います。

- 保留中のすべてのメッセージの受信を終了させます。アプリケーションは、クローズ時にメッセージを受信できない場合はメッセージまたは `NULL` を返す場合があります。
- 現在メッセージを処理しているすべてのメッセージリスナが完了するまで待機します。
- 処理中のトランザクションをロールバックします（こうしたトランザクションが外部 JTA ユーザトランザクションの一部である場合を除きます）。JTA ユーザトランザクションの詳細については、5-6ページの「JTA ユーザトランザクションの使い方」を参照してください。
- クライアントが確認応答を行うセッションの確認応答は強制しません。これにより、キューおよび信頼性の高い処理が要求される恒久サブスクリプション用のメッセージが失われなくなります。

セッションをクローズすると、関連付けられているすべてのプロデューサとコンシューマもクローズされます。

注意: `onMessage()` メソッド呼び出し内で `close()` メソッドを発行する場合、システム管理者は接続ファクトリをコンフィグレーションするときに [メッセージの短縮を許可] チェック ボックスを選択しなければなりません。詳細については、Administration Console オンライン ヘルプの「[JMS 接続ファクトリ](#)」を参照してください。

送り先の動的作成

以下のいずれかを使用して、送り先を動的に作成できます。

- `weblogic.jms.extensions.JMSHelper` クラス メソッド
- 一時的な送り先

送り先の動的作成に関する手順については、以降の節で説明します。

JMSHelper クラス メソッドの使い方

以下の各 `JMSHelper` メソッドを使用してキューまたはトピックを作成する非同期リクエストを動的に送信できます。

```
static public void createPermanentQueueAsync(  
    Context ctx,  
    String jmsServerName,  
    String queueName,  
    String jndiName  
) throws JMSException
```

```
static public void createPermanentTopicAsync(  
    Context ctx,  
    String jmsServerName,  
    String topicName,  
    String jndiName  
) throws JMSException
```

JNDI 初期コンテキスト、送り先に関連付けられる JMS サーバの名前、送り先 (キューまたはトピック) の名前、および JNDI ネームスペース内で送り先をロックアップする場合に使用する名前を指定する必要があります。

各メソッドによって、以下のものが更新されます。

- 動的に作成された送り先を含む、指定されたドメインに関連付けられている
 コンフィグレーション ファイル
- 送り先を公開する JNDI ネームスペース

注意： いずれのメソッド呼び出しも、例外を送出せずに失敗する場合があります。また、例外が送出手続きでも、それが必ずしもメソッド呼び出しの失敗を示しているとは限りません。

JMS サーバでの送り先の作成と JNDI ネームスペースへの情報の伝播には、時間がかかる場合があります。複数のサーバを使用している環境では、伝播の遅延が増大します。JNDI ルックアップを実行するよりも、`createQueue()` メソッドまたは `createTopic()` メソッドを使用して、それぞれキューまたはトピックの存在をテストすることをお勧めします。この方法によって、伝播固有の遅延を、ある程度回避できます。

たとえば、次に示す `findQueue()` メソッドは、動的に作成されたキューにアクセスしようとしませんが、アクセスに失敗すると再試行まで、指定された間隔スリープします。無限ループを回避するために、再試行の最大回数が設定されています。

```
private static Queue findQueue (
    QueueSession queueSession,
    String jmsServerName,
    String queueName,
    int retryCount,
    long retryInterval
) throws JMSEException
{
    String wlsQueueName = jmsServerName + "/" + queueName;
    String command = "QueueSession.createQueue(" +
        wlsQueueName + ")";
    long startTimeMillis = System.currentTimeMillis();
    for (int i=retryCount; i>=0; i--) {
        try {
            System.out.println("Trying " + command);
            Queue queue = queueSession.createQueue(wlsQueueName);
            System.out.println(command + "succeeded after " +
                (retryCount - i + 1) + " tries in " +
                (System.currentTimeMillis() - startTimeMillis) +
                " millis.");
            return queue;
        } catch (JMSEException je) {
            if (retryCount == 0) throw je;
        }
        try {
            System.out.println(command + "> failed, pausing " +
                retryInterval + " millis.");
        }
    }
}
```

```

        Thread.sleep(retryInterval);
    } catch (InterruptedException ignore) {}
    }
    throw new JMSEException("out of retries");
}

```

この場合、JMSHelper クラス メソッドの後に `findQueue()` メソッドを呼び出すことで、動的に作成されたキューを使用可能になりしだい、取り出すことができます。次に例を示します。

```

JMSHelper.createPermanentQueueAsync(ctx, domain, jmsServerName,
    queueName, jndiName);
Queue queue = findQueue(qsess, jmsServerName, queueName,
    retry_count, retry_interval);

```

JMSHelper クラスの詳細については、[weblogic.jms.extensions.JMSHelper](#) Javadoc を参照してください。

一時的な送り先の使い方

一時的な送り先を使用することで、サーバ定義の送り先のコンフィグレーションと作成に伴うシステム管理のオーバーヘッドを発生させずに、必要に応じてアプリケーションで送り先を作成できます。

WebLogic JMS サーバでは、`JMSReplyTo` ヘッダ フィールドを使用して、アプリケーションに回答を返すことができます。アプリケーションでは、オプションとして、メッセージの `JMSReplyTo` ヘッダ フィールドをその一時的な送り先に設定することで、使用している一時的な送り先を別のアプリケーションに対して公開できます。

一時的な送り先は、4-53 ページの「一時的な送り先の削除」にある説明のとおり `delete()` メソッドを使用して削除されない限り、現在の接続が継続している間だけ存在します。

サーバが再起動されると、メッセージは使用できなくなるので、すべての `PERSISTENT` メッセージは自動的に `NON_PERSISTENT` メッセージになります。そのため、一時的な送り先は、再起動によるデータの消失が許されないビジネスロジックには適していません。

注意： 一時的な送り先（キューまたはトピック）を作成する前に、Administration Console を使用して、一時的な送り先を使用する JMS サーバをコンフィグレーションする必要があります。そのためには、JMS サーバの `Temporary Template` 属性を使用して、同じドメイン内でコン

フィグレーションされる JMS テンプレートを選択します。JMS サーバの
コンフィグレーションについては、Administration Console オンラインヘルプの「[JMS サーバ](#)」を参照してください。

以降の節では、一時的なキュー（PTP）または一時的なトピック（Pub/Sub）の作成方法について説明します。

一時的なキューの作成

次の `QueueSession` メソッドを使用して、一時的なキューを作成できます。

```
public TemporaryQueue createTemporaryQueue(  
    ) throws JMSEException
```

たとえば、現在の接続が継続している間だけ存在する `TemporaryQueue` への参照を作成するには、次のメソッド呼び出しを使用します。

```
QueueSender = Session.createTemporaryQueue();
```

一時的なトピックの作成

次の `TopicSession` メソッドを使用して、一時的なトピックを作成できます。

```
public TemporaryTopic createTemporaryTopic(  
    ) throws JMSEException
```

たとえば、現在の接続が継続している間だけ存在する一時的なトピックへの参照を作成するには、次のメソッド呼び出しを使用します。

```
TopicPublisher = Session.createTemporaryTopic();
```

一時的な送り先の削除

一時的な送り先の使用が終了したら、次の `TemporaryQueue` メソッドまたは `TemporaryTopic` メソッドを使用して送り先を削除し、関連リソースを解放できます。

```
public void delete(  
    ) throws JMSEException
```

恒久サブスクリプションの設定

WebLogic JMS では、恒久サブスクリプションおよび非恒久サブスクリプションがサポートされています。

恒久サブスクリプションの場合、WebLogic JMS では、メッセージはサブスクライバに配信されるか、または期限切れになるまでファイルまたはデータベースに格納されます。この場合、メッセージの配信時にサブスクライバがアクティブな状態でなくてもかまいません。サブスクライバを表す Java オブジェクトが存在していれば、サブスクライバはアクティブであるとみなされます。恒久サブスクリプションは、Pub/Sub メッセージングのみでサポートされています。

非恒久サブスクリプションの場合、WebLogic JMS では、メッセージはアクティブセッションを持つアプリケーションにのみ配信されます。アプリケーションがリスンしていない間にトピックへ送信されたメッセージは、二度とそのアプリケーションに配信されません。つまり、非恒久サブスクリプションは、そのサブスクライバ オブジェクトが存在している間だけ存続します。デフォルトでは、サブスクライバは非恒久です。

以降の節で説明する内容は、次のとおりです。

- [クライアント ID の定義](#)
- [恒久サブスクリプション用のサブスクライバの作成](#)
- [恒久サブスクリプションの削除](#)
- [恒久サブスクリプションの変更](#)

クライアント ID の定義

恒久サブスクリプションをサポートするには、接続に対してクライアント ID を定義する必要があります。

注意： JMS クライアント ID は、WebLogic セキュリティ レベルムでのユーザ認証で使用される WebLogic Server ユーザ名とは必ずしも一致しません。JMS アプリケーションに適合していれば、JMS クライアント ID を WebLogic Server ユーザ名に設定することは当然可能です。

クライアント ID は、以下の 2 つの方法で設定できます。

- JMS 仕様に従った望ましい方法は、クライアント ID を使用する接続ファクトリをコンフィグレーションすることです。WebLogic JMS では、この方法は各クライアント ID のコンフィグレーション時に別々の接続ファクトリの定義を追加することになります。アプリケーションでは、JNDI でそれ自身のトピック接続ファクトリがルックアップされ、それを使用して自身のクライアント ID を含む接続が作成されます。クライアント ID を使用する接続ファクトリのコンフィグレーションの詳細については、Administration Console オンラインヘルプの「[JMS 接続ファクトリ](#)」を参照してください。
- また、接続を作成してから、アプリケーションで次の Connection メソッドを呼び出して、接続にクライアント ID を設定する方法もあります。

```
public void setClientID(  
    String clientID  
) throws JMSEException
```

ユニークなクライアント ID を指定する必要があります。この代替方法を使用する場合は、デフォルトの接続ファクトリを使用すると（アプリケーションに適合している場合）、コンフィグレーション情報を変更する必要がありません。ただし、恒久サブスクリプションに対応しているアプリケーションの場合は、トピック接続を作成したらすぐに `setClientID()` を呼び出すようにする必要があります。デフォルトの接続ファクトリについては、『[管理者ガイド](#)』の「[JMS の管理](#)」を参照してください。

クライアント ID が接続に対して既に定義されている場合は、`IllegalStateException` が送出されます。指定したクライアント ID が別の接続に対して既に定義されている場合は、`InvalidClientIDException` が送出されます。

注意： `setClientID()` メソッドを使用してクライアント ID を指定する場合には、重複したクライアント ID が例外の送出なしに指定されてしまう危険性があります。たとえば、2 つの異なる接続に対して、同じ値を持つクライアント ID が同時に設定されると、競合状態のまま、同じ値が両方の接続に割り当てられる場合があります。このような重複の危険性を回避するには、コンフィグレーション時にクライアント ID を指定します。

クライアント ID を表示し、クライアント ID が既に定義されているかどうかをテストするには、次の Connection メソッドを使用します。

```
public String getClientID(  
) throws JMSEException
```

注意: 恒久サブスクリプションのサポートは、Pub/Sub メッセージング モデル固有の機能なので、クライアント ID はトピック接続でしか使用できません。キュー接続にもクライアント ID がありますが、JMS では使用されません。

恒久サブスクリプションは、一時的なトピックに対しては作成しないでください。一時的なトピックは、現在の接続が継続している間だけ存在するように設計されているからです。

恒久サブスクリプション用のサブスクライバの作成

以下の `TopicSession` メソッドを使用して、恒久サブスクリプション用のサブスクライバを作成できます。

```
public TopicSubscriber createDurableSubscriber(  
    Topic topic,  
    String name  
) throws JMSException  
  
public TopicSubscriber createDurableSubscriber(  
    Topic topic,  
    String name,  
    String messageSelector,  
    boolean noLocal  
) throws JMSException
```

サブスクライバを作成するトピックの名前と恒久サブスクリプションの名前を指定する必要があります。また、メッセージをフィルタ処理するためのメッセージセレクトア、および `noLocal` フラグ（この節で後述）を指定することもできます。メッセージセレクトアの詳細については、4-66 ページの「メッセージのフィルタ処理」を参照してください。messageSelector を指定しない場合、デフォルトではすべてのメッセージが検索されます。

アプリケーションでは、JMS 接続を使用して同じトピックに対してパブリッシュとサブスクライブの両方を行うことができます。トピックメッセージはすべてのサブスクライバに配信されるので、アプリケーションは自身がパブリッシュしたメッセージを受信する可能性があります。これを防ぐために、JMS アプリケーションは `noLocal` フラグを `true` に設定できます。`noLocal` 値は、デフォルトでは `false` になっています。

恒久サブスクリプション名は、クライアント ID ごとにユニークである必要があります。接続に対するクライアント ID の定義については、4-54 ページの「クライアント ID の定義」を参照してください。

特定の恒久サブスクリプション用のサブスクライバをいつでも定義できるのは、1つのセッションだけです。複数のサブスクライバが恒久サブスクリプションにアクセスできますが、同時にはアクセスできません。恒久サブスクリプションはファイルまたはデータベースに格納されます。

恒久サブスクリプションの削除

恒久サブスクリプションを削除するには、次の `TopicSession` メソッドを使用します。

```
public void unsubscribe(  
    String name  
) throws JMSException
```

削除する恒久サブスクリプションの名前を指定する必要があります。

以下の条件のいずれかに当てはまる場合は、恒久サブスクリプションを削除できません。

- `TopicSubscriber` がセッションでまだアクティブな場合
- 恒久サブスクリプションで受信したメッセージがトランザクションの一部であるか、またはセッションでまだ確認応答されていない場合

注意： WebLogic Server バージョン 6.1 以降の場合は、恒久サブスクリプションの管理用に実行時 MBean が追加されています。この機能を使用すると、Administration Console で恒久サブスクリプションをモニタおよび削除できます。Administration Console による恒久サブスクリプション管理の詳細については、『管理者ガイド』の「[JMS の管理](#)」を参照してください。

恒久サブスクリプションの変更

恒久サブスクリプションを変更するには、以下の手順を実行します。

1. 4-57 ページの「恒久サブスクリプションの削除」にある説明に従って、恒久サブスクリプションを削除します。

この手順は省略可能です。この手順が明示的に実行されない場合は、次の手順で恒久サブスクリプションが再作成されるときに暗黙的に削除が行われません。

2. 4-56 ページの「恒久サブスクリプション用のサブスクリバの作成」で説明されているメソッドを使用して、同じ名前の恒久サブスクリプションを再作成します。ただし、トピック名、メッセージ セレクタ、noLocal のいずれかには異なる値を指定します。

新しい値に基づいて、恒久サブスクリプションが再作成されます。

注意： 恒久サブスクリプションを再作成する場合には、重複した名前を持つ恒久サブスクリプションを作成しないよう注意してください。たとえば、使用できない JMS サーバから恒久サブスクリプションを削除しようとすると、削除は失敗します。続いて、別の JMS サーバで同じ名前の恒久サブスクリプションを作成すると、最初の JMS サーバが使用可能になったときに予期しない結果が生じることがあります。元の恒久サブスクリプションが削除されていないため、最初の JMS サーバが再び使用可能になると、重複した名前の 2 つの恒久サブスクリプションが存在することになります。

メッセージ ヘッダ フィールドおよびメッセージ プロパティ フィールドの設定と参照

WebLogic JMS には、メッセージの識別および転送を定義できる一連の標準ヘッダ フィールドが用意されています。さらに、プロパティ フィールドを使用すると、標準セットを拡張した、アプリケーション固有のヘッダ フィールドをメッセージ内に含めることができます。メッセージ ヘッダ フィールドおよびメッセージ プロパティ フィールドを使用して、通信しているプロセス間で情報をやり取りできます。

データをメッセージ本文ではなくプロパティ フィールドに含める主要な理由は、メッセージ セレクタを使用したメッセージのフィルタ処理をサポートするためです。メッセージ セレクタからは、メッセージ本文のデータにはアクセスできません。たとえば、プロパティ フィールドを使用して、あるメッセージに高い優先度を割り当てると仮定します。その場合、このプロパティ フィールドにアクセスし、至急の優先度が指定されたメッセージだけを選択するメッセージ セレクタを含むメッセージ コンシューマを作成できます。セレクタの詳細については、4-66 ページの「メッセージのフィルタ処理」を参照してください。

メッセージ ヘッダ フィールドの設定

JMS メッセージには、常にメッセージと共に送信されるヘッダ フィールドの標準セットが含まれます。これらはメッセージを受信するメッセージ コンシューマで利用でき、また、一部のフィールドはメッセージを送信するメッセージ プロデューサで設定できます。メッセージを受信したら、ヘッダ フィールドの値は変更できます。

標準メッセージ ヘッダ フィールドの詳細については、2-15 ページの「メッセージ ヘッダ フィールド」を参照してください。

次の表に、Message クラスの set メソッドと get メソッドを、サポートされているデータ型ごとに示します。

注意： set() メソッドを使用して設定されたヘッダ フィールド値は、send() メソッドによってオーバーライドされる場合もあります（次表参照）。

表 4-5 メッセージ ヘッダの set メソッドおよび get メソッド

ヘッダ フィールド	set メソッド	get メソッド
JMSCorrelationID	public void setJMSCorrelationID(String correlationID) throws JMSEException	public String getJMSCorrelationID() throws JMSEException public byte[] getJMSCorrelationIDAsBytes() throws JMSEException
JMSDestination ¹	public void setJMSDestination(Destination destination) throws JMSEException	public Destination getJMSDestination() throws JMSEException
JMSDeliveryMode ¹	public void setJMSDeliveryMode(int deliveryMode) throws JMSEException	public int getJMSDeliveryMode() throws JMSEException
JMSDeliveryTime ¹	public void setJMSDeliveryTime(long deliveryTime) throws JMSEException	public long getJMSDeliveryTime() throws JMSEException
JMSDeliveryMode ¹	public void setJMSDeliveryMode(int deliveryMode) throws JMSEException	public int getJMSDeliveryMode() throws JMSEException

表 4-5 メッセージヘッダの set メソッドおよび get メソッド (続き)

ヘッダ フィールド	set メソッド	get メソッド
JMSMessageID ¹	<pre>public void setJMSMessageID(String id) throws JMSEException</pre> <p>set メソッドだけでなく、 weblogic.jms.extensions.JMSHelper クラスには、WebLogic JMS 6.0 以前の JMSMessageID 形式を WebLogic JMS 6.1 の形式に (または WebLogic JMS 6.1 の形式をそれ以前の形式に) 変換する、以下のメソッドも用意されている。</p> <pre>public void oldJMSMessageIDToNew(String id, long timeStamp) throws JMSEException</pre> <pre>public void newJMSMessageIDToOld(String id, long timeStamp) throws JMSEException</pre>	<pre>public String getJMSMessageID() throws JMSEException</pre>
JMSPriority ¹	<pre>public void setJMSPriority(int priority) throws JMSEException</pre>	<pre>public int getJMSPriority() throws JMSEException</pre>
JMSRedelivered ¹	<pre>public void setJMSRedelivered(boolean redelivered) throws JMSEException</pre>	<pre>public boolean getJMSRedelivered() throws JMSEException</pre>
JMSReplyTo	<pre>public void setJMSReplyTo(Destination replyTo) throws JMSEException</pre>	<pre>public Destination getJMSReplyTo() throws JMSEException</pre>
JMSTimeStamp ¹	<pre>public void setJMSTimeStamp(long timestamp) throws JMSEException</pre>	<pre>public long getJMSTimeStamp() throws JMSEException</pre>
JMSType	<pre>public void setJMSType(String type) throws JMSEException</pre>	<pre>public String getJMSType() throws JMSEException</pre>

1. `send()` メソッドが実行されている場合、対応する `set()` メソッドは、メッセージ ヘッダ フィールドに影響を与えません。ヘッダ フィールド値が設定されている場合は、`send()` メソッドの処理中に、このヘッダ フィールド値がオーバーライドされます。

`samples\examples\jms\sender` ディレクトリに収められている WebLogic Server 付属の `examples.jms.sender.SenderServlet` サンプルでは、送信するメッセージのヘッダ フィールドを設定する方法、および送信後にメッセージのヘッダ フィールドを表示する方法を示します。

たとえば、`send()` メソッドの後に置く、次のコードは、WebLogic JMS によってメッセージに割り当てられたメッセージ ID を表示します。

```
System.out.println("Sent message " +
    msg.getJMSMessageID() + " to " +
    msg.getJMSDestination());
```

メッセージ プロパティ フィールドの設定

プロパティ フィールドを設定するには、適切な `set` メソッドを呼び出して、プロパティ名と値を指定します。プロパティ フィールドを参照するには、適切な `get` メソッドを呼び出して、プロパティ名を指定します。

送信側アプリケーションでは、メッセージにプロパティを設定できます。受信側アプリケーションではプロパティを表示できますが、次の `clearProperties()` メソッドを使用して消去してからでないと、プロパティを変更することはできません。

```
public void clearProperties(
) throws JMSException
```

このメソッドは、メッセージ ヘッダ フィールドおよびメッセージ本文は消去しません。

注意： JMS 用に `JMSX` というプロパティ名のプレフィックスが予約されています。接続メタデータには、`JMSX` プロパティのリストが含まれています。`getJMSXPropertyNames()` メソッドを使用して、列挙リストとして、このリストにアクセスできます。詳細については、4-45 ページの「接続メタデータへのアクセス」を参照してください。

プロバイダ固有のプロパティ用に JMS_ というプロパティ名のプレフィックスが予約されています。このプレフィックスは標準の JMS メッセージングでは使用できません。

プロパティ フィールドは、boolean、byte、double、float、int、long、short、string の各データ型のいずれかに設定できます。次の表に、Message クラスの set メソッドと get メソッドを、サポートされているデータ型ごとに示します。

表 4-6 メッセージ プロパティのデータ型ごとの set メソッドおよび get メソッド

データ型	set メソッド	get メソッド
boolean	public void setBooleanProperty(String name, boolean value) throws JMSEException	public boolean getBooleanProperty(String name) throws JMSEException
byte	public void setByteProperty(String name, byte value) throws JMSEException	public byte getByteProperty(String name) throws JMSEException
double	public void setDoubleProperty(String name, double value) throws JMSEException	public double getDoubleProperty(String name) throws JMSEException
float	public void setFloatProperty(String name, float value) throws JMSEException	public float getFloatProperty(String name) throws JMSEException
int	public void setIntProperty(String name, int value) throws JMSEException	public int getIntProperty(String name) throws JMSEException
long	public void setLongProperty(String name, long value) throws JMSEException	public long getLongProperty(String name) throws JMSEException

表 4-6 メッセージ プロパティのデータ型ごとの set メソッドおよび get メソッド (続き)

データ型	set メソッド	get メソッド
short	public void setShortProperty(String name, short value) throws JMSEException	public short getShortProperty(String name) throws JMSEException
String	public void setStringProperty(String name, String value) throws JMSEException	public String getStringProperty(String name) throws JMSEException

上記の表で説明した set メソッドおよび get メソッド以外にも、setObjectProperty() メソッドおよび getObjectProperty() メソッドを使用して、プロパティのデータ型の具体的なプリミティブ値を使用できます。具体的な値が使用されている場合、プロパティのデータ型はコンパイル時ではなく、実行時に決定されます。有効なオブジェクトのデータ型は、boolean、byte、double、float、int、long、short、および string です。

次の Message メソッドを使用して、すべてのプロパティ フィールド名にアクセスできます。

```
public Enumeration getPropertyNames(  
    ) throws JMSEException
```

このメソッドは、すべてのプロパティ フィールド名を列挙して返します。その後、プロパティ フィールドのデータ型に基づいて、上記の表で説明されている適切な get メソッドにプロパティ フィールド名を渡すことで、各プロパティ フィールドの値を取り出すことができます。

次の表は、メッセージ プロパティの変換表です。この表から、読み込み可能なデータ型を、書き込まれたデータ型に基づいて識別できます。

表 4-7 メッセージ プロパティの変換表

書き込まれた プロパティの データ型	読み込み可能なデータ型							
	boolean	byte	double	float	int	long	short	String
boolean	X							X
byte		X				X	X	X
double			X					X
float			X	X				X
int					X	X		X
long						X		X
Object	X	X	X	X	X	X	X	X
short					X	X	X	X
String	X	X	X	X	X	X	X	X

次の Message メソッドを使用して、プロパティの値が設定されているかどうかをテストできます。

```
public boolean propertyExists(
    String name
) throws JMSEException
```

プロパティ名を指定すると、メソッドはそのプロパティが存在するかどうかを示すブール値を返します。

たとえば、次のコードは、2 種類の String プロパティと 1 種類の int プロパティを設定します。

```
msg.setStringProperty("User", user);
msg.setStringProperty("Category", category);
msg.setIntProperty("Rating", rating);
```

メッセージ プロパティ フィールドの詳細については、2-20 ページの「メッセージ プロパティ フィールド」または [javax.jms.Message](#) Javadoc を参照してください。

メッセージ ヘッダ フィールドおよびメッセージ プロパティ フィールドの参照

注意: 参照できるのは、キューのメッセージ ヘッダ フィールドおよびメッセージ プロパティ フィールドだけです。トピックのメッセージ ヘッダ フィールドおよびメッセージ プロパティ フィールドは参照できません。

以下の `QueueSession` メソッドを使用して、キューにあるメッセージのヘッダ フィールドおよびプロパティ フィールドを参照できます。

```
public QueueBrowser createBrowser(  
    Queue queue  
    ) throws JMSException  
  
public QueueBrowser createBrowser(  
    Queue queue,  
    String messageSelector  
    ) throws JMSException
```

参照するキューを指定する必要があります。また、参照するメッセージをフィルタ処理するメッセージ セレクタを指定することもできます。メッセージ セレクタの詳細については、4-66 ページの「メッセージのフィルタ処理」を参照してください。

キューを定義すると、以下の `QueueBrowser` メソッドを使用して、キュー ブラウザに関連付けられたキュー名およびメッセージ セレクタにアクセスできるようになります。

```
public Queue getQueue(  
    ) throws JMSException  
  
public String getMessageSelector(  
    ) throws JMSException
```

さらに、次の `QueueBrowser` メソッドを使用して、メッセージを参照するための列挙値にアクセスできます。

```
public Enumeration getEnumeration(  
    ) throws JMSException
```

`samples\examples\jms\queue` ディレクトリに収められている WebLogic Server 付属の `examples.jms.queue.QueueBrowser` サンプルでは、受信メッセージのヘッダ フィールドにアクセスする方法を示します。

たとえば、次の `QueueBrowser` サンプルからの引用コードでは、`QueueBrowser` オブジェクトを作成します。

```
qbrowser = qsession.createBrowser(queue);
```

次のコードは、`QueueBrowser` サンプルで定義されている `displayQueue()` メソッドからの引用です。この例では、`QueueBrowser` オブジェクトを使用して、キューのメッセージをスキャンする場合に使用される列挙値を取得します。

```
public void displayQueue(
) throws JMSException
{
    Enumeration e = qbrowser.getEnumeration();
    Message m = null;

    if (! e.hasMoreElements()) {
        System.out.println("There are no messages on this queue.");
    } else {

        System.out.println("Queued JMS Messages: ");
        while (e.hasMoreElements()) {
            m = (Message) e.nextElement();
            System.out.println("Message ID " + m.getJMSMessageID() +
                " delivered " + new Date(m.getJMSTimestamp())
                " to " + m.getJMSDestination());
        }
    }
}
```

キュー ブラウザが使用されていない場合は、キュー ブラウザを閉じてリソースを解放する必要があります。詳細については、4-35 ページの「オブジェクトリソースの解放」を参照してください。

`QueueBrowser` クラスの詳細については、[javax.jms.QueueBrowser](#) Javadoc を参照してください。

メッセージのフィルタ処理

多くの場合、アプリケーションでは、配信されるすべてのメッセージが通知される必要はありません。メッセージ セレクタを使用すると、不要なメッセージをフィルタ処理できるので、ネットワーク トラフィックへの影響が最小限になり、パフォーマンスが向上します。

メッセージ セレクタは、以下のように動作します。

- 送信側アプリケーションでは、標準化された方法でメッセージを説明したり分類したりするためのメッセージ ヘッダ フィールドおよびメッセージ プロパティ フィールドが設定されます。
- 受信側アプリケーションでは、単純なクエリ文字列を指定することで、アプリケーションで受信するメッセージがフィルタ処理されます。

メッセージ セレクタはメッセージの内容（本文）を参照することができないため、情報の一部をメッセージ プロパティ フィールドに複製することもできます（XML メッセージの場合を除く）。

キュー レシーバまたはトピック サブスクライバの作成時に、それぞれ `QueueSession.createReceiver()` メソッドまたは `TopicSession.createSubscriber()` メソッドの引数としてセレクタを指定します。キュー レシーバまたはトピック サブスクライバの作成の詳細については、4-12 ページの「手順 5: セッションと送り先を使用してメッセージ プロデューサとメッセージ コンシューマを作成する」を参照してください。

以降の節では、SQL 文と XML セレクタ メソッドを使用してメッセージ セレクタを定義する方法、およびメッセージ セレクタを更新する方法について説明します。ヘッダ フィールドおよびプロパティ フィールドの設定の詳細については、それぞれ 4-58 ページの「メッセージ ヘッダ フィールドおよびメッセージ プロパティ フィールドの設定と参照」または 4-61 ページの「メッセージ プロパティ フィールドの設定」を参照してください。

SQL 文を使用したメッセージ セレクタの定義

メッセージ セレクタはブール式であり、SQL の `select` 文の `where` 句と似た構文を持つ文字列です。

次の引用は、セレクタ式の例を示します。

```
salary > 64000 and dept in ('eng','qa')
(product like 'WebLogic%' or product like '%T3')
  and version > 3.0
hireyear between 1990 and 1992
  or fireyear is not null
fireyear - hireyear > 4
```

次の例では、キュー レシーバの作成時に、優先度が 6 未満のメッセージをフィルタで除外するセレクトを設定する方法を示します。

```
String selector = "JMSPriority >= 6";
qsession.createReceiver(queue, selector);
```

次の例では、トピック サブスクライバの作成時に、同様のセレクトを設定する方法を示します。

```
String selector = "JMSPriority >= 6";
qsession.createSubscriber(topic, selector);
```

メッセージ セレクトの構文の詳細については、`javax.jms.Message` Javadoc を参照してください。

XML セレクト メソッドを使用した XML メッセージ セレクトの定義

XML メッセージ タイプの場合、メッセージ セレクトの定義には、前節で説明した SQL セレクト式だけでなく、次のメソッドを使用することもできます。

```
String JMS_BEA_SELECT(String type, String expression)
```

`JMS_BEA_SELECT` は、WebLogic JMS SQL 構文の組み込み関数です。構文タイプと XPath 式を指定します。このリリースの構文タイプは、`xpath` (XML Path Language) に設定する必要があります。XML Path Language は、XML Path Language (XPath) のドキュメントで定義されており、XML Path Language の Web サイト <http://www.w3.org/TR/xpath> で入手できます。

注意： XML メッセージが壊れていると (終了タグがないなど) どの XML セレクトとも一致しないので、XML メッセージの構文には十分注意してください。

以下の環境では、メソッドは NULL 値を返します。

- メッセージによって解析されない場合
- メッセージによって解析されるが、要素がない場合
- メッセージによって解析され、要素も存在するが、メッセージに値が含まれていない場合 (例: `<order></order>`)

たとえば、次のような XML の引用があります。

```
<order>
  <item>
    <id>007</id>
    <name>Hand-held Power Drill</name>
    <description>Compact, assorted colors.</description>
    <price>$34.99</price>
  </item>
  <item>
    <id>123</id>
    <name>Mitre Saw</name>
    <description>Three blades sizes.</description>
    <price>$69.99</price>
  </item>
  <item>
    <id>66</id>
    <name>Socket Wrench Set</name>
    <description>Set of 10.</description>
    <price>$19.99</price>
  </item>
</order>
```

次の例は、上記のサンプルにおける 2 番目の項目の名前を取り出す方法を示したものです。このメソッド呼び出しからは、「Mitre Saw」という文字列が返ります。

```
String sel = "JMS_BEA_SELECT('\xpath',
  '/order/item[2]/name/text()') = 'Mitre Saw'";
```

二重引用符と一重引用符およびスペースの使い方に注意する必要があります。xpath、XML タブ、および文字列値を囲む一重引用符の使い方に注意してください。

次の例は、上記のサンプルにおける 3 番目の項目の ID を取り出す方法を示したものです。このメソッド呼び出しからは、「66」という文字列が返ります。

```
String sel = "JMS_BEA_SELECT('\xpath',
  '/order/item[3]/id/text()') = '66'";
```

メッセージ セレクタの表示

次の MessageConsumer メソッドを使用して、メッセージ セレクタを表示できます。

```
public String getMessageSelector(  
    ) throws JMSEException
```

このメソッドは、現在定義されているメッセージセクタ、またはメッセージセクタが定義されていない場合は NULL のいずれかを返します。

トピック サブスクライバ メッセージ セクタのインデックス付けによるパフォーマンスの最適化

WebLogic JMS では、アプリケーションがある特定の長を備えている場合、トピック サブスクライバ メッセージ セクタにインデックスを付けることで、メッセージ セクタを大幅に最適化できます。対象となるのは、通常、サブスクライバの数が多く、各サブスクライバが固有の識別子（ユーザ名など）を持ち、単一のサブスクライバまたはサブスクライバのリストに迅速にメッセージを送信する必要があるアプリケーションです。典型的な例は、各サブスクライバが異なるユーザに対応し、各メッセージに 1 つ以上の対象ユーザのリストが含まれるようなインスタント メッセージング アプリケーションです。

最適化されたサブスクライバ メッセージ セクタをアクティブにするには、サブスクライバはセクタに対して次の構文を使用する必要があります。

```
"identifier IS NOT NULL"
```

identifier は、定義済みの JMS メッセージ プロパティではない（たとえば、JMSCorrelationID や JMSType 以外の）任意の文字列です。複数のサブスクライバが同じ識別子を共有できます。

WebLogic JMS は、この構文どおりに記述されたメッセージ セクタをヒントにして、内部的なサブスクライバ インデックスを作成します。この構文に従わないメッセージ セクタ、または余分な OR 句や AND 句を含むメッセージ セクタも受け付けられますが、最適化は有効になりません。

サブスクライバがこのメッセージ セクタ構文を使って登録してあると、メッセージのユーザ プロパティに 1 つ以上の識別子を含めることで、特定のサブスクライバを対象にしたメッセージをトピックにパブリッシュすることができます。次に例を示します。

```
// 名前付きのサブスクライバを設定する。"Wilma" はサブスクライバの名前で  
// subscriberSession は JMS TopicSession である。  
// 使われているセクタ構文によって最適化が有効になる。
```

```
TopicSubscriber topicSubscriber =
    subscriberSession.createSubscriber(
        (Topic)context.lookup("IMTopic"),
        "Wilma IS NOT NULL",
        /* noLocal= */ true);

// サブスクライバ "Fred" と "Wilma" にメッセージを送信する。
// publisherSession は JMS TopicSession である。
// メッセージ セレクタ式 "Wilma IS NOT NULL" または "Fred IS NOT NULL"
// を指定しているサブスクライバは、このメッセージを受け取る。

TopicPublisher topicPublisher =
    publisherSession.createPublisher(
        (Topic)context.lookup("IMTopic"));

TextMessage msg =
    publisherSession.createTextMessage("Hi there!");
msg.setBooleanProperty("Fred", true);
msg.setBooleanProperty("Wilma", true);

topicPublisher.publish(msg);
```

注意：最適化されたメッセージセレクタとメッセージの構文は、標準の JMS API に基づいています。したがって、この構文を使用するアプリケーションは、メッセージセレクタを最適化していない WebLogic JMS のバージョンだけでなく、WebLogic JMS 以外の製品でも動作します。ただし、これらのバージョンでは、最適化拡張機能を有効にしたバージョンよりパフォーマンスが劣ります。

メッセージセレクタの最適化は、MULTICAST_NO_ACKNOWLEDGE 確認応答モードを使用するアプリケーションに対しては影響がありません。このようなアプリケーションでは、メッセージ選択はサーバサイドではなくクライアントサイドで行われるので、そもそもこの拡張機能を使う必要がありません。

サーバセッションプールの定義

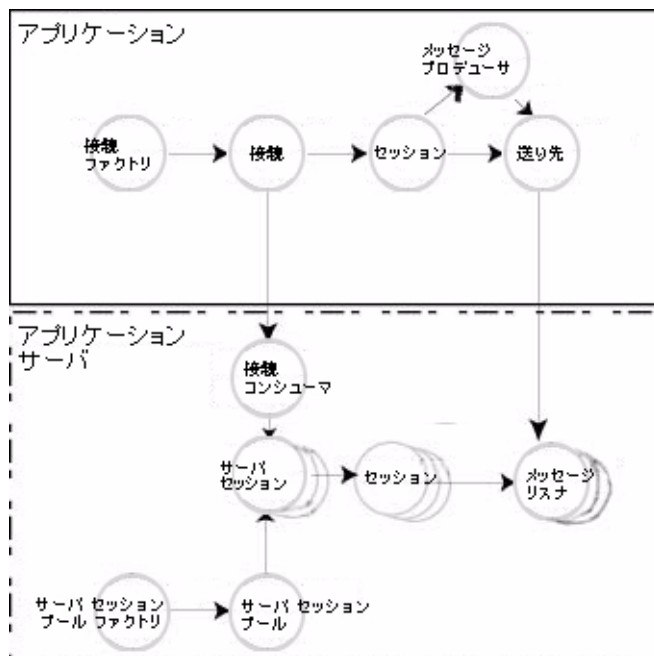
WebLogic JMS には、サーバセッションのサーバ管理プールを定義するためのオプションの JMS 機能が実装されています。この機能を使用すると、アプリケーションで複数のメッセージを並行して処理できます。

サーバセッションプールの機能は次のとおりです。

- 送り先からメッセージを受信し、そのメッセージを、メッセージ処理用に用意したサーバ側のメッセージ リスナに渡します。メッセージ リスナクラスには、メッセージを処理する `onMessage()` メソッドがあります。
- JMS セッションのプールを管理することで、メッセージを並行して処理します。各セッションでは、シングル スレッドの `onMessage()` メソッドが実行されます。

次の図に、サーバセッション プール機能、およびアプリケーションとアプリケーション サーバのコンポーネントの関係を示します。

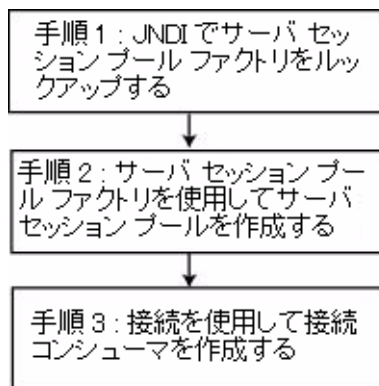
図 4-3 サーバセッション プール機能



図に示されているように、アプリケーションにはシングル スレッドのメッセージ リスナが用意されています。JMS によって実装された、アプリケーションサーバ上の接続コンシューマによって、以下のタスクが実行され、1 つまたは複数のメッセージが処理されます。

1. サーバセッション プールからサーバセッションを取得する
2. サーバセッションのセッションを取得する

3. セッションに1つまたは複数のメッセージをロードする
 4. サーバセッションを開始して、メッセージを受信する
 5. メッセージの処理が終了したら、サーバセッションを解放してプールに戻す
- 次の図に、メッセージの並行処理を行うための準備に必要な手順を示します。

図 4-4 メッセージの並行処理を行うための準備

注意: サーバセッションプールを作成する場合（手順2）、WebLogic Serverではまず、`weblogic.allow.create.jms.ServerSessionPool` ACLがテストされ、ユーザに `create` パーMISSIONが付与されていることが確認されます。このパーMISSIONは、デフォルトでは `everyone` に付与されています。このプロパティを更新して、パーMISSIONを特定のユーザやグループに制限したり、このプロパティを削除して、サーバセッションプール機能を無効にしたりできます。ACLのコンフィグレーションの詳細については、『[管理者ガイド](#)』の「[セキュリティの管理](#)」を参照してください。

この手順では、アプリケーションで、他のアプリケーションサーバプロバイダのセッションプール実装を使用できます。サーバセッションプールはメッセージ駆動型Beanを使用して実装することもできます。メッセージ駆動型Beanによるサーバセッションプールの実装については、『[WebLogic エンタープライズ JavaBeans プログラマーズ ガイド](#)』を参照してください。

コンフィグレーション時にセッション プールと接続コンシューマが定義された場合は、この手順を省略することができます。サーバセッション プールと接続コンシューマのコンフィグレーションの詳細については、『[管理者ガイド](#)』の「[JMS の管理](#)」を参照してください。

WebLogic JMS は現在、オプションの

`TopicConnection.createDurableConnectionConsumer()` 操作をサポートしていません。この高機能 JMS の操作の詳細については、[Sun Microsystems JMS 仕様](#) を参照してください。

手順 1 : JNDI でサーバセッション プールファクトリをルックアップする

サーバセッション プール ファクトリを使用して、サーバセッション プールを作成します。

WebLogic JMS では、デフォルトで次のような `ServerSessionPoolFactory` オブジェクトが定義されています。

`weblogic.jms.ServerSessionPoolFactory:<name>`。ここで `<name>` には、セッション プールの作成先になる JMS サーバの名前を指定します。

コンフィグレーションが終了したら、サーバセッション プールファクトリをルックアップするために、まず `NamingManager.InitialContext()` メソッドを使用して JNDI コンテキスト (`context`) を定義します。サーブレットアプリケーション以外のアプリケーションの場合は、初期コンテキストの作成に使用する環境を渡す必要があります。詳細については、[NamingManager.InitialContext\(\)](#) Javadoc を参照してください。

コンテキストが定義されたら、次のコードを使用して、JNDI でサーバセッション プールファクトリをルックアップします。

```
factory = (ServerSessionPoolFactory) context.lookup(<ssp_name>);
```

`<ssp_name>` には、サーバセッション プールファクトリの修飾名または非修飾名を指定します。

サーバセッション プールファクトリの詳細については、2-22 ページの「`ServerSessionPoolFactory`」または `weblogic.jms.ServerSessionPoolFactory` Javadoc を参照してください。

手順 2 : サーバセッションプールファクトリを使用してサーバセッションプールを作成する

以降の節で説明する `ServerSessionPoolFactory` メソッドを使用して、キュー (PTP) またはトピック (Pub/Sub) の接続コンシューマで使用するサーバセッションプールを作成できます。

サーバセッションプールの詳細については、2-22 ページの「`ServerSessionPool`」または [javax.jms.ServerSessionPool](#) Javadoc を参照してください。

キュー接続コンシューマで使用するサーバセッションプールを作成する

`ServerSessionPoolFactory` には、キュー接続コンシューマ用のサーバセッションプールを作成する、次のメソッドが用意されています。

```
public ServerSessionPool getServerSessionPool(
    QueueConnection connection,
    int maxSessions,
    boolean transacted,
    int ackMode,
    String listenerClassName
) throws JMSEException
```

サーバセッションプールに関連付けられるキュー接続、接続コンシューマ (手順 3 で作成予定) で取得できる並行セッションの最大数、セッションをトランザクション処理するかどうか、確認応答モード (トランザクション処理されないセッションの場合にのみ適用可能)、およびインスタンス化され、メッセージの受信および並行処理に使用されるメッセージリスナクラスを指定する必要があります。

`ServerSessionPoolFactory` クラス メソッドの詳細については、[weblogic.jms.ServerSessionPoolFactory](#) Javadoc を参照してください。
`ConnectionConsumer` クラスの詳細については、[javax.jms.ConnectionConsumer](#) Javadoc を参照してください。

トピック接続コンシューマで使用するサーバセッション プールを作成する

`ServerSessionPoolFactory` には、トピック接続コンシューマ用のサーバセッション プールを作成する、次のメソッドが用意されています。

```
public ServerSessionPool getServerSessionPool(
    TopicConnection connection,
    int maxSessions,
    boolean transacted,
    int ackMode,
    String listenerClassName
) throws JMSException
```

サーバセッション プールに関連付けられるトピック接続、接続コンシューマ (手順 3 で作成予定) で取得できる並行セッションの最大数、セッションをトランザクション処理するかどうか、確認応答モード (トランザクション処理されないセッションの場合にのみ適用可能)、およびインスタンス化され、メッセージの受信および並行処理に使用されるメッセージ リスナ クラスを指定する必要があります。

`ServerSessionPoolFactory` クラス メソッドの詳細については、[weblogic.jms.ServerSessionPoolFactory Javadoc](#) を参照してください。
`ConnectionConsumer` クラスの詳細については、[javax.jms.ConnectionConsumer Javadoc](#) を参照してください。

手順 3 : 接続コンシューマを作成する

以下の方法のいずれかを使用して、サーバセッションを取得し、メッセージを並行処理するための接続コンシューマを作成できます。

- 『管理者ガイド』の「[JMS の管理](#)」にある説明に従って、コンフィグレーション時にサーバセッション プールと接続コンシューマをコンフィグレーションします。
- 以降の節で説明されている `Connection` メソッドをアプリケーションに含めません。

`ConnectionConsumer` クラスの詳細については、2-23 ページの「`ConnectionConsumer`」または [javax.jms.ConnectionConsumer Javadoc](#) を参照してください。

キュー用の接続コンシューマを作成する

QueueConnection には、キュー用の接続コンシューマを作成する、次のメソッドが用意されています。

```
public ConnectionConsumer createConnectionConsumer(  
    Queue queue,  
    String messageSelector,  
    ServerSessionPool sessionPool,  
    int maxMessages  
) throws JMSException
```

関連付けられるキューの名前、メッセージをフィルタ処理するためのメッセージセクタ、サーバセッションにアクセスするためのサーバセッションプール、およびサーバセッションに同時に割り当てることができるメッセージの最大数を指定する必要があります。メッセージセクタの詳細については、4-66 ページの「メッセージのフィルタ処理」を参照してください。

QueueConnection クラス メソッドの詳細については、[javax.jms.QueueConnection](#) Javadoc を参照してください。
ConnectionConsumer クラスの詳細については、[javax.jms.ConnectionConsumer](#) Javadoc を参照してください。

トピック用の接続コンシューマを作成する

TopicConnection には、トピック用の ConnectionConsumers を作成する、以下の 2 種類のメソッドが用意されています。

```
public ConnectionConsumer createConnectionConsumer(  
    Topic topic,  
    String messageSelector,  
    ServerSessionPool sessionPool,  
    int maxMessages  
) throws JMSException  
  
public ConnectionConsumer createDurableConnectionConsumer(  
    Topic topic,  
    String messageSelector,  
    ServerSessionPool sessionPool,  
    int maxMessages  
) throws JMSException
```

各メソッドには、関連付けられるトピックの名前、メッセージをフィルタ処理するためのメッセージセレクトア、サーバセッションにアクセスするためのサーバセッションプール、およびサーバセッションに同時に割り当てることができるメッセージの最大数を指定する必要があります。メッセージセレクトアの詳細については、4-66 ページの「メッセージのフィルタ処理」を参照してください。

いずれのメソッドも接続コンシューマを作成しますが、後者のメソッドは、恒久サブスクリバで使用する恒久接続コンシューマも作成します。恒久サブスクリバの詳細については、4-54 ページの「恒久サブスクリプションの設定」を参照してください。

TopicConnection クラスメソッドの詳細については、
[javax.jms.TopicConnection](#) Javadoc を参照してください。
ConnectionConsumer クラスの詳細については、
[javax.jms.ConnectionConsumer](#) Javadoc を参照してください。

例：PTP クライアントのサーバセッションプールの設定

次の例では、JMS クライアント用のサーバセッションプールを設定する方法を示します。startup() メソッドは、4-18 ページの「例：PTP アプリケーションの設定」で説明されている examples.jms.queue.QueueSend サンプルの init() メソッドとほぼ同じです。このメソッドでもサーバセッションプールを設定できます。

次の例に startup() メソッドを示し、合わせて各設定手順も述べます。

サーバセッションプールアプリケーションを実装するには、次のパッケージをインポートリストに追加します。

```
import weblogic.jms.ServerSessionPoolFactory
```

セッションプールの作成に必要なセッションプールファクトリの静的変数を定義します。

```
private final static String SESSION_POOL_FACTORY=  
    "weblogic.jms.ServerSessionPoolFactory:examplesJMSServer";  
  
private QueueConnectionFactory qconFactory;  
private QueueConnection qcon;  
private QueueSession qsession;  
private QueueSender qsender;
```

```
private Queue queue;
private ServerSessionPoolFactory sessionPoolFactory;
private ServerSessionPool sessionPool;
private ConnectionConsumer consumer;
```

必要な JMS オブジェクトを作成します。

```
public String startup(
    String name,
    Hashtable args
) throws Exception
{
    String connectionFactory = (String)args.get("connectionFactory");
    String queueName = (String)args.get("queue");
    if (connectionFactory == null || queueName == null) {
        throw new
        IllegalArgumentException("connectionFactory="+connectionFactory+
                               ", queueName="+queueName);
    }
    Context ctx = new InitialContext();
    qconFactory = (QueueConnectionFactory)
        ctx.lookup(connectionFactory);
    qcon = qconFactory.createQueueConnection();
    qsession = qcon.createQueueSession(false,
        Session.AUTO_ACKNOWLEDGE);
    queue = (Queue) ctx.lookup(queueName);
    qcon.start();
}
```

手順 1 JNDI でサーバセッションプールファクトリをルックアップします。

```
sessionPoolFactory = (ServerSessionPoolFactory)
    ctx.lookup(SESSION_POOL_FACTORY);
```

手順 2 次のように、サーバセッションプールファクトリを使用してサーバセッションプールを作成します。

```
sessionPool = sessionPoolFactory.getServerSessionPool(qcon, 5,
    false, Session.AUTO_ACKNOWLEDGE,
    examples.jms.startup.MsgListener);
```

このコードでは、以下のように定義されています。

- `qcon` は、サーバセッションプールに関連付けられるキュー接続を示します。
- `5` は、接続コンシューマ（手順 3 で作成予定）で取得できる並行セッションの最大数を示します。
- `false` は、セッションをトランザクション処理しないことを示します。
- `AUTO_ACKNOWLEDGE` は、確認応答モードを示します。

- `examples.jms.startup.MsgListener` は、インスタンス化され、メッセージの受信および並行処理に使用されるメッセージ リスナを示します。

手順 3 次のように、接続コンシューマを作成します。

```
consumer = qcon.createConnectionConsumer(queue, "TRUE",  
    sessionPool, 10);
```

このコードでは、以下のように定義されています。

- `queue` は、関連付けられるキューを示します。
- `TRUE` は、メッセージをフィルタ処理するためのメッセージ セレクタを示します。
- `sessionPool` は、サーバセッションにアクセスするためのサーバセッション プールを示します。
- `10` は、サーバセッションに同時に割り当てることができるメッセージの最大数を示します。

この例で使用した JMS クラスの詳細については、2-5 ページの「WebLogic JMS のクラス」または [javax.jms](#) Javadoc を参照してください。

例 : Pub/Sub クライアントのサーバセッション プールの設定

次の例では、JMS クライアント用のサーバセッション プールを設定する方法を示します。`startup()` メソッドは、4-21 ページの「例 : Pub/Sub アプリケーションの設定」で説明されている `examples.jms.topic.TopicSend` サンプルの `init()` メソッドとほぼ同じです。このメソッドでもサーバセッション プールを設定できます。

次の例に `startup()` メソッドを示し、合わせて各設定手順も述べます。

サーバセッション プール アプリケーションを実装するには、次のパッケージをインポート リストに追加します。

```
import weblogic.jms.ServerSessionPoolFactory
```

セッションプールの作成に必要なセッションプールファクトリの静的変数を定義します。

```
private final static String SESSION_POOL_FACTORY=
    "weblogic.jms.ServerSessionPoolFactory:examplesJMSServer";

private TopicConnectionFactory tconFactory;
private TopicConnection tcon;
private TopicSession tsession;
private TopicSender tsender;
private Topic topic;
private ServerSessionPoolFactory sessionPoolFactory;
private ServerSessionPool sessionPool;
private ConnectionConsumer consumer;
```

必要な JMS オブジェクトを作成します。

```
public String startup(
    String name,
    Hashtable args
) throws Exception
{
    String connectionFactory = (String)args.get("connectionFactory");
    String topicName = (String)args.get("topic");
    if (connectionFactory == null || topicName == null) {
        throw new
IllegalArgumentException("connectionFactory="+connectionFactory+
                            ", topicName="+topicName);
    }
    Context ctx = new InitialContext();
    tconFactory = (TopicConnectionFactory)
        ctx.lookup(connectionFactory);
    tcon = tconFactory.createTopicConnection();
    tsession = tcon.createTopicSession(false,
        Session.AUTO_ACKNOWLEDGE);
    topic = (Topic) ctx.lookup(topicName);
    tcon.start();
}
```

手順 1 JNDI でサーバセッションプールファクトリをルックアップします。

```
sessionPoolFactory = (ServerSessionPoolFactory)
    ctx.lookup(SESSION_POOL_FACTORY);
```

手順 2 次のように、サーバセッションプールファクトリを使用してサーバセッションプールを作成します。

```
sessionPool = sessionPoolFactory.getServerSessionPool(tcon, 5,
    false, Session.AUTO_ACKNOWLEDGE,
    examples.jms.startup.MsgListener);
```

このコードでは、以下のように定義されています。

- `tcon` は、サーバセッション プールに関連付けられるトピック接続を示します。
- `5` は、接続コンシューマ（手順 3 で作成予定）で取得できる並行セッションの最大数を示します。
- `false` は、セッションをトランザクション処理しないことを示します。
- `AUTO_ACKNOWLEDGE` は、確認応答モードを示します。
- `examples.jms.startup.MsgListener` は、インスタンス化され、メッセージの受信および並行処理に使用されるメッセージ リスナを示します。

手順 3 次のように、接続コンシューマを作成します。

```
consumer = tcon.createConnectionConsumer(topic, "TRUE",  
    sessionPool, 10);
```

このコードでは、以下のように定義されています。

- `topic` は、関連付けられるトピックを示します。
- `TRUE` は、メッセージをフィルタ処理するためのメッセージ セレクタを示します。
- `sessionPool` は、サーバセッションにアクセスするためのサーバセッション プールを示します。
- `10` は、サーバセッションに同時に割り当てることができるメッセージの最大数を示します。

この例で使用した JMS クラスの詳細については、2-5 ページの「WebLogic JMS のクラス」または [javax.jms](#) Javadoc を参照してください。

マルチキャストの使い方

マルチキャストを使用することによって、後でメッセージをサブスクライバに転送する、指定したホストのグループにメッセージを配信できます。

マルチキャストには、次のような利点があります。

- ホストグループにメッセージをほとんどリアルタイムに配信できます。

- メッセージをサブスクライバに配信する場合に JMS サーバで必要になるリソース量が削減されるので、スケーラビリティが向上します。

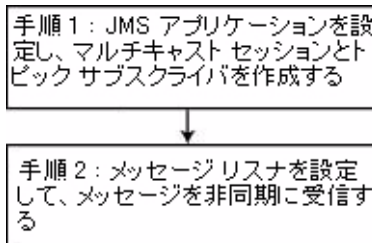
マルチキャストには、次のような制約があります。

- マルチキャストでは、ホストグループの全メンバに対するメッセージの配信は保証されません。確実な配信と回復が必要なメッセージについては、マルチキャストを使用しないでください。
- 異なるバージョンの WebLogic Server との相互運用性のため、クライアントでは、ホストより前のリリースの WebLogic Server を使用することはできません。すべてのクライアントは、ホストと少なくとも同じかそれ以降のバージョンを使用する必要があります。

マルチキャストを使用すると便利な例としては、株価表示があります。最新の株価を入手する場合に重要になるのは、信頼性よりもタイムリーな配信です。全部または一部の内容が配信されなくても、リアルタイムの株価情報にアクセスするときに、クライアントは簡単に情報の再送信を要求できます。クライアントでは情報の回復は必要とされません。回復された情報が再配信される頃には、その情報は古くて価値のないものになっています。

次の図に、マルチキャストの設定に必要な手順を示します。

図 4-5 マルチキャストの設定



注意: マルチキャストは、Pub/Sub メッセージングモデル、および非恒久サブスクライバのみでサポートされています。

マルチキャストセッションおよびマルチキャストコンシューマに関するモニタ統計は提供されません。

マルチキャストを設定する前に、マルチキャストをサポートするよう、次のように接続ファクトリおよび送り先をコンフィギュレーションする必要があります。

- 各接続ファクトリについては、システム管理者が、マルチキャストセッションに存在できる未処理のメッセージの最大数と、最大数に達した場合に最新

のメッセージと最古のメッセージのどちらを破棄するかをコンフィグレーションします。メッセージが最大数に達すると、`DataOverrunException` が送出され、メッセージは自動的に破棄されます。これらの属性は、動的にコンフィグレーションすることもできます（4-86 ページの「マルチキャストのコンフィグレーション属性の動的コンフィグレーション」参照）。

- 各送り先については、マルチキャスト IP アドレス、ポート、存続時間の各属性を指定します。存続時間属性の設定の詳細については、4-87 ページの「例：マルチキャスト TTL（存続時間）」を参照してください。

注意： マルチキャスト IP アドレス、ポート、存続時間の各属性をコンフィグレーションする場合は、ネットワーク管理者に相談してから、適切な値を設定することをお勧めします。

マルチキャストのコンフィグレーション属性の詳細については、[Administration Console オンライン ヘルプ](#)を参照してください。マルチキャストのコンフィグレーション属性は、付録 A「コンフィグレーション チェックリスト」でも簡単に説明されています。

手順 1 :JMS アプリケーションを設定し、マルチキャスト セッションとトピック サブスクライバを作成する

4-4 ページの「JMS アプリケーションの設定」にある説明に従って JMS アプリケーションを設定します。ただし、セッションを作成するときは（4-8 ページの「手順 3：接続を使用してセッションを作成する」参照）`acknowledgeMode` 値を `MULTICAST_NO_ACKNOWLEDGE` に設定して、そのセッションでマルチキャストメッセージを受信するように指定します。

注意： マルチキャストは、非恒久サブスクライバに対する Pub/Sub メッセージング モデルでのみサポートされています。マルチキャスト セッションで恒久サブスクライバを作成しようとする、`JMSException` が送出されます。

たとえば、次のメソッドは、Pub/Sub メッセージング モデル用のマルチキャストセッションの作成方法を示します。


```
tsession = tcon.createTopicSession(
    false,
    WLSession.MULTICAST_NO_ACKNOWLEDGE
);
```

注意： クライアントサイドでは、ソケットからメッセージを取り出すには、マルチキャストを行うセッションごとに専用のスレッドが1つ必要です。したがって、JMS クライアントサイドのスレッドプールサイズを増やして調節する必要があります。スレッドプールサイズを調節する方法の詳細については、<http://dev2dev.bea.com/resourcelibrary/whitepapers.jsp?highlight=whitepapers> にある『WebLogic JMS Performance Guide』ホワイトペーパーの「Tuning Thread Pools and EJB Pools」の節を参照してください。この節では、JMS クライアントサイドのスレッドプールのチューニングについて解説されています。

さらに、4-13 ページの「TopicPublisher と TopicSubscriber の作成」にある説明に従って、トピック サブスクライバを作成します。

たとえば、次のコードは、トピック サブスクライバの作成方法を示します。

```
tsubscriber = tsession.createSubscriber(myTopic);
```

注意： 指定した送り先がマルチキャストをサポートするようコンフィギュレーションされていない場合、`createSubscriber()` メソッドは失敗します。

手順 2：メッセージ リスナを設定する

マルチキャストのトピック サブスクライバでは、メッセージを非同期に受信することしかできません。マルチキャスト セッションで同期メッセージを受信しようとする、`JMSException` が送出されます。

4-32 ページの「メッセージの非同期受信」にある説明に従って、トピック サブスクライバに対してメッセージ リスナを設定します。

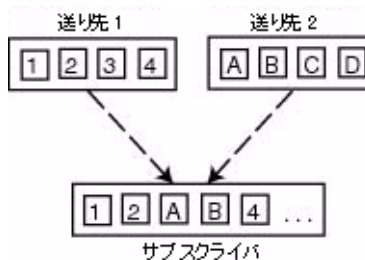
たとえば、次のコードは、メッセージ リスナの設定方法を示します。

```
tsubscriber.setMessageListener(this);
```

メッセージを受信すると、WebLogic JMS では、送り先から送信されたメッセージのシーケンスがトラッキングされます。マルチキャスト サブスクライバのメッセージ リスナがシーケンスが異なるメッセージを受信すると、その結果、1

つまたは複数のメッセージがスキップされ、そのセッションの `ExceptionListener` に `SequenceGapException` が送出されます。スキップされたメッセージは、その後配信されても破棄されます。たとえば、次の図では、サブスクライバは2つの送り先から同時にメッセージを受信しています。

図 4-6 マルチキャストにおけるシーケンスのずれ



送り先 1 からメッセージ「4」を受信すると、`SequenceGapException` が送出され、シーケンスが異なるメッセージが受信されたことがアプリケーションに通知されます。その後、メッセージ「3」が配信されても、それは破棄されます。

注意： やり取りされるメッセージ数が多くなるほど、`SequenceGapException` が発生する危険性も大きくなります。

マルチキャストのコンフィグレーション属性の動的コンフィグレーション

システム管理者は、コンフィグレーション時に、マルチキャストをサポートするよう、各接続ファクトリに対して以下の情報をコンフィグレーションします。

- マルチキャスト セッションに存在できる未処理のメッセージの最大数を指定する最大メッセージ
- メッセージが最大数に達した場合に、最新のメッセージと最古のメッセージのどちらを破棄するかを指定する超過時のポリシー

メッセージが最大数に達すると、`DataOverrunException` が送出され、メッセージは超過時のポリシーに基づいて自動的に破棄されます。

また、`Session` クラスの `set` メソッドを使用して、最大メッセージと超過時のポリシーを設定する方法もあります。

次の表に、Session クラスの set メソッドと get メソッドを、動的コンフィグレーションが可能な属性ごとに示します。

表 4-8 メッセージ プロデューサの set メソッドおよび get メソッド

属性	set メソッド	get メソッド
最大メッセージ	<code>public void setMessagesMaximum(int messagesMaximum) throws JMSEException</code>	<code>public int getMessagesMaximum() throws JMSEException</code>
超過時のポリシー	<code>public void setOverrunPolicy(int overrunPolicy) throws JMSEException</code>	<code>public int getOverrunPolicy() throws JMSEException</code>

注意： set メソッドを使用して設定された値は、コンフィグレーションされた値よりも優先されます。

Session クラス メソッドの詳細については、[weblogic.jms.extensions.WLSession Javadoc](#) を参照してください。マルチキャストのコンフィグレーション属性の詳細については、Administration Console オンライン ヘルプの「[JMS の送り先](#)」を参照してください。

例：マルチキャスト TTL（存続時間）

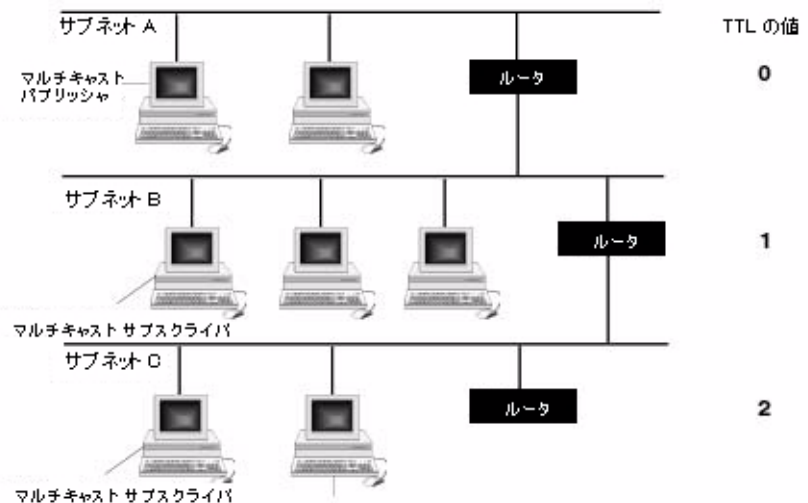
注意： 次の図は、マルチキャスト TTL（存続時間）送り先コンフィグレーション属性が、ルータを経由したメッセージの配信に影響する様子を説明するための単純な例です。マルチキャスト TTL 属性をコンフィグレーションする場合は、ネットワーク管理者に相談してから、適切な値を設定することをお勧めします。

マルチキャスト TTL は、メッセージの存続時間に依存しません。

次の例では、マルチキャスト TTL 送り先コンフィグレーション属性が、ルータを経由したメッセージの配信に影響する様子を示します。マルチキャストのコンフィグレーション属性の詳細については、Administration Console オンライン ヘルプの「[JMS の送り先](#)」を参照してください。

次のようなネットワーク図があります。

図 4-7 マルチキャスト TTL の例



この図では、ネットワークは3つのサブネットで構成されています。サブネット A にはマルチキャスト パブリッシャがあり、サブネット B および C にはそれぞれ 1 台ずつマルチキャスト サブスクライバがあります。

マルチキャスト TTL 属性が 0 に設定されている（メッセージはルータを経由できず、現在のサブネットにしか配信されないことを示す）場合は、サブネット A にあるマルチキャスト パブリッシャでメッセージがパブリッシュされても、メッセージはどのマルチキャスト サブスクライバにも配信されません。

マルチキャスト TTL 属性が 1 に設定されている（メッセージは 1 台のルータを経由できることを示す）場合、サブネット A にあるマルチキャスト パブリッシャでメッセージがパブリッシュされると、サブネット B にあるマルチキャスト サブスクライバでメッセージが受信されます。

同様に、マルチキャスト TTL 属性が 2 に設定されている（メッセージは 2 台のルータを経由できることを示す）場合、サブネット A にあるマルチキャスト パブリッシャでメッセージがパブリッシュされると、サブネット B および C にあるマルチキャスト サブスクライバでメッセージが受信されます。

5 WebLogic JMS によるトランザクションの使い方

以下の節では、WebLogic JMS でトランザクションを使用する方法について説明します。

- トランザクションの概要
- JMS トランザクション セッションの使い方
- JTA ユーザ トランザクションの使い方
- メッセージ駆動型 Bean を使用した JTA ユーザ トランザクション内の非同期メッセージング
- 例 : JTA ユーザ トランザクションにおける JMS と EJB

注意： この節で説明する JMS クラスの詳細については、Sun Microsystems Java Web サイトにある以下の JMS Javadoc (最新の JMS API Errata を含む) を参照してください。

<http://www.javasoft.com/products/jms/Javadoc-102a/index.html>

および

http://www.javasoft.com/products/jms/errata_051801.html

トランザクションの概要

トランザクションを使用すると、アプリケーションでは生成および消費されるメッセージのグループを調整し、送受信する複数のメッセージを基本単位として処理できます。

アプリケーションがトランザクションをコミットすると、トランザクション内で受信した全メッセージはメッセージングシステムから削除され、トランザクション内で送信したメッセージが実際に配信されます。アプリケーションによってトランザクションがロールバックされた場合、トランザクション内で受信したメッセージはメッセージングシステムに戻され、送信したメッセージは破棄されます。

トピック サブスクライバによってロールバックされた受信メッセージはサブスクライバに再配信されます。キュー レシーバによってロールバックされた受信メッセージは、コンシューマではなくキューに再配信されます。それによって、キュー内の他のコンシューマがメッセージを受信できるようにします。

たとえばオンライン ショッピングでは、品物を選択し、それをオンライン ショッピング カートに入れます。注文した品物はトランザクションの一部として格納されますが、チェックアウトして注文を確定するまでユーザの支払い義務は発生しません。ユーザはいつでも注文をキャンセルし、カートを空にすることができます。キャンセルによって、現在のトランザクション内で注文がロールバックされます。

JMS でトランザクションを使用する方法には以下の 3 種類があります。

- トランザクションで JMS のみを使用する場合は、JMS トランザクション セッションを作成できます。
- EJB などの他の処理と JMS を混在させる場合は、JMS 非トランザクション セッションで Java Transaction API (JTA) ユーザ トランザクションを使用します。
- メッセージ駆動型 Bean を使用します。

1 つの JTA ユーザ トランザクションで複数の JMS サーバを有効にする場合、または JMS の処理と 非 JMS の処理 (EJB など) を組み合わせる場合は、2 フェーズ コミット ライセンスが必要です。詳細については、5-6 ページの「 JTA ユーザ トランザクションの使い方」を参照してください。

以降の節では、JMS トランザクション セッションと JTA ユーザ トランザクションの使い方について説明します。

注意： トランザクションを使用する場合、トランザクションがコミットまたはロールバックされる前に発生する問題に対処するために、4-48 ページの「セッション例外リスナの定義」で説明しているようにセッション例外リスナを定義しておくことをお勧めします。

`acknowledge()` メソッドは、トランザクション内で呼び出されても無視されません。`recover()` メソッドがトランザクション内で呼び出されると、`JMSException` が送出されます。

JMS トランザクション セッションの使い方

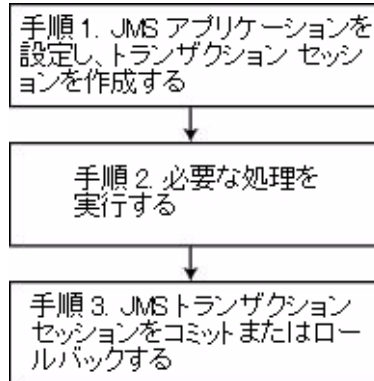
JMS トランザクション セッションは、セッション内にあるトランザクションをサポートします。JMS トランザクション セッションのトランザクションはセッション外には影響を及ぼしません。たとえば、セッションをロールバックしても、そのセッションの送受信がロールバックされるだけで、データベース更新はロールバックされません。JTA ユーザ トランザクションは JMS トランザクション セッションでは無視されます。

JMS トランザクション セッションのトランザクションは、最初の送受信処理が発生した後で暗黙的に開始され、互いに結び付けられます。トランザクションをコミットまたはロールバックすると、他のトランザクションが自動的に始まります。

『管理者ガイド』の「[JMS の管理](#)」の説明に従って、システム管理者は、JMS トランザクション セッションを使用する前に、アプリケーション開発環境の必要性に応じて、接続ファクトリの属性（トランザクション タイムアウト）とセッション プールの属性（トランザクション）を調整する必要があります。

JMS トランザクション セッションの設定および使用に必要な手順を次の図に示します。

図 5-1 JMS トランザクション セッションの設定と使用



手順 1 : JMS アプリケーションを設定し、トランザクション セッションを作成する

4-4 ページの「JMS アプリケーションの設定」の説明に従って JMS アプリケーションを設定しますが、4-8 ページの「手順 3 : 接続を使用してセッションを作成する」でセッションを作成する際に、ブール値 `transacted` を `true` に設定してセッションをトランザクション処理されるように指定します。

たとえば、PTP および Pub/sub メッセージング モデルのトランザクション セッションを作成する方法を次の各メソッドで示します。

```
qsession = qcon.createQueueSession(  
    true,  
    Session.AUTO_ACKNOWLEDGE  
);  
  
tsession = tcon.createTopicSession(  
    true,  
    Session.AUTO_ACKNOWLEDGE  
);
```

定義したら、次のセッション メソッドでセッションをトランザクション処理するかどうかを決定できます。


```
public boolean getTransacted(  
    ) throws JMSEException
```

注意: `acknowledge` 値はトランザクション セッションでは無視されます。

手順 2 : 必要な処理を実行する

現在のトランザクションで必要な処理を実行します。

手順 3 : JMS トランザクション セッションをコミットまたはロールバックする

必要な処理を実行したら、以下のメソッドのいずれかを実行してトランザクションをコミットまたはロールバックします。

トランザクションをコミットするには、次のメソッドを実行します。

```
public void commit(  
    ) throws JMSEException
```

`commit()` メソッドでは、現在のトランザクションの送受信メッセージがすべてコミットされます。受信メッセージはメッセージングシステムから削除されますが、送信メッセージは表示されるようになります。

トランザクションをロールバックするには、次のメソッドを実行します。

```
public void rollback(  
    ) throws JMSEException
```

`rollback()` メソッドでは、現在のトランザクションの送信メッセージがキャンセルされ、受信メッセージがメッセージングシステムに戻されます。

`commit()` メソッドまたは `rollback()` メソッドが JMS トランザクション セッション以外で発行された場合、`IllegalStateException` が送出されます。

JTA ユーザ トランザクションの使い方

Java Transaction API (JTA) は、複数のデータ リソースにわたるトランザクションをサポートします。JTA は WebLogic Server の一部として実装され、トランザクション管理を実装するための標準 Java インタフェースを提供します。

トランザクションを開始、コミット、ロールバックするための `javax.transaction.UserTransaction` オブジェクトを使用して JTA ユーザ トランザクション アプリケーションをプログラミングします。JTA ユーザ トランザクション内に JMS と EJB を混在させる場合、『[WebLogic JTA プログラマーズ ガイド](#)』で説明しているとおりに EJB からトランザクションを開始することもできます。

トランザクション セッションの開始後に JTA ユーザ トランザクションを開始できます。ただし、JTA ユーザ トランザクションはトランザクション セッションに無視され、トランザクション セッションは JTA ユーザ トランザクションに無視されます。

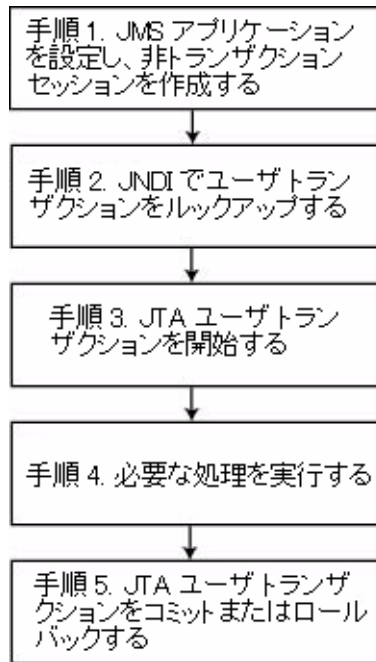
WebLogic Server は 2 フェーズ コミット (2PC) プロトコルをサポートしています。2PC では、複数のリソース マネージャ間で 1 つの JTA トランザクションを効率的に調整できるようになります。これにより、トランザクションによる更新に関連するリソース マネージャのすべてでコミットするか、またはすべてのリソース マネージャから完全にロール バックし、トランザクション開始前の状態に戻すことで、データの完全性が保証されます。

注意： このプロトコルをサポートするには、独自の 2PC トランザクション ライセンスが必要です。2PC が関連するトランザクションの移行の詳細については、6-1 ページの「WebLogic JMS アプリケーションの移行」を参照してください。

『[管理者ガイド](#)』の「[JMS の管理](#)」の説明に従って、システム管理者は、JTA トランザクション セッションを使用する前に、[ユーザ トランザクションを有効化] チェック ボックスをオンにして、JTA ユーザ トランザクションをサポートするように接続ファクトリをコンフィグレーションする必要があります。

JTA ユーザ トランザクションの設定および使用に必要な手順を次の図に示します。

図 5-2 JTA ユーザ トランザクションの設定と使用



手順 1 : JMS アプリケーションを設定し、非トランザクションセッションを作成する

4-4 ページの「JMS アプリケーションの設定」の説明に従って JMS アプリケーションを設定しますが、4-8 ページの「手順 3 : 接続を使用してセッションを作成する」でセッションを作成する際に、プール値 `transacted` を `false` に設定してセッションをトランザクション処理されないように指定します。

たとえば、PTP および Pub/sub メッセージング モデルの非トランザクションセッションを作成する方法を次の各メソッドで示します。

```
qsession = qcon.createQueueSession(  
    false,  
    Session.AUTO_ACKNOWLEDGE  
);  
  
tsession = tcon.createTopicSession(  
    false,  
    Session.AUTO_ACKNOWLEDGE  
);
```

注意： ユーザトランザクションがアクティブな場合、確認応答モードは無視されます。

手順 2 : JNDI でユーザ トランザクションをルックアップする

アプリケーションは、JNDI を使用して、WebLogic Server ドメインの `UserTransaction` オブジェクトに対するオブジェクト参照を返します。

JNDI コンテキスト (`context`) を確立して次のようなコードを実行すると、`UserTransaction` オブジェクトをルックアップできます。

```
UserTransaction xact =  
    ctx.lookup("javax.transaction.UserTransaction");
```

手順 3 : JTA ユーザ トランザクションを開始する

`UserTransaction.begin()` メソッドを使用して JTA ユーザ トランザクションを開始します。次に例を示します。

```
xact.begin();
```

手順 4 : 必要な処理を実行する

現在のトランザクションで必要な処理を実行します。

手順 5 : JTA ユーザ トランザクションをコミットまたはロールバックする

必要な処理を実行したら、以下のメソッドのいずれかを実行して JTA ユーザ トランザクションをコミットまたはロールバックします。

トランザクションをコミットするには、次のメソッドを実行します。

```
xact.commit();
```

`commit()` メソッドを実行すると、WebLogic Server はトランザクション マネージャを呼びだしてトランザクションを完了し、現在のトランザクションで実行されている全処理をコミットします。トランザクション マネージャの役割は、リソース マネージャと協力してデータベースを更新することです。

トランザクションをロールバックするには、次のメソッドを実行します。

```
xact.rollback();
```

`rollback()` メソッドを実行すると、WebLogic Server はトランザクション マネージャを呼びだしてトランザクションをキャンセルし、現在のトランザクションで実行されている全処理をロールバックします。

`commit()` または `rollback()` メソッドを呼び出したら、`xact.begin()` を呼び出して別のトランザクションを開始することもできます。

メッセージ駆動型 Bean を使用した JTA ユーザ トランザクション内の非同期メッセージング

JMS では非同期的に配信されるメッセージでどのトランザクションを使用するかを決定できないため、JMS 非同期メッセージ配信は JTA ユーザ トランザクションではサポートされません。

ただし、メッセージ駆動型 Bean による代替の方法が提供されます。メッセージ駆動型 Bean では、メッセージ配信の直前にユーザ トランザクションを自動的に開始できます。

メッセージ駆動型 Bean による非同期メッセージ配信については、『WebLogic エンタープライズ JavaBeans プログラマーズ ガイド』を参照してください。

例 : JTA ユーザ トランザクションにおける JMS と EJB

以下の例では、JNDI を使用して `javax.transaction.UserTransaction` をルックアップすることにより、JTA ユーザ トランザクション内に EJB と JMS の処理が混在するようにアプリケーションを設定し、JTA ユーザ トランザクションを開始してからコミットする方法を示します。この例を実行するには、システム管理者が接続ファクトリをコンフィグレーションするときに、[ユーザ トランザクションを有効化] チェック ボックスをオンにする必要があります。

注意： この単純な JTA ユーザ トランザクションの例に加えて、`samples\examples\jta\jmsjdbc` ディレクトリにある WebLogic JTA も参照してください。

`javax.transaction.UserTransaction` パッケージを含む適切なパッケージをインポートします。

```
import java.io.*;
import java.util.*;
import javax.transaction.UserTransaction;
import javax.naming.*;
import javax.jms.*;
```

JTA ユーザ トランザクション変数などの必要な変数を定義します。

```
public final static String JTA_USER_XACT=
    "javax.transaction.UserTransaction";
    .
    .
    .
```

手順 1 非トランザクション セッションを作成して、JMS アプリケーションを設定します。JMS アプリケーションの設定については、4-4 ページの「JMS アプリケーションの設定」を参照してください。

```
// JMS アプリケーションの設定手順の例は次のとおり
    qsession = qcon.createQueueSession(false,
        Session.CLIENT_ACKNOWLEDGE);
```

手順 2 JNDI で `UserTransaction` をルックアップします。

```
UserTransaction xact = (UserTransaction)
    ctx.lookup(JTA_USER_XACT);
```

手順 3 JTA ユーザ トランザクションを開始します。

```
xact.begin();
```

手順 4 必要な処理を実行します。

```
// JMS および EJB 処理をここで実行
```

手順 5 JTA ユーザ トランザクションをコミットします。

```
xact.commit();
```

6 WebLogic JMS アプリケーションの移行

以降の節では、WebLogic JMS アプリケーションを移行する方法について説明します。

- 既存の機能の変更点
- 既存のアプリケーションの移行
- JDBC データベース ストアの削除

既存の機能の変更点

[JavaSoft JMS 仕様バージョン 1.0.2](#) および [JMS API - Errata](#) に従って既存の機能が変更されました。移行手順を開始する前に、次の表で変更点を確認してください。

- 5.1 と 6.0 の既存の機能の変更点
- 6.0 と 6.1 の既存の機能の変更点

次の表に、WebLogic Server バージョン 5.1 の既存の機能の変更点を示します。また、その結果としてコードを変更する必要がある場合は、そのコードも併せて示します。バージョン 1.0.2 の変更履歴に関する情報については、[JavaSoft JMS 仕様バージョン 1.0.2](#) の第 11 章「Change History」を参照してください。

表 6-1 5.1 と 6.0 の既存の機能の変更点

カテゴリ	説明	コードの変更点
接続ファクトリ	<p>2つのデフォルト接続ファクトリは非推奨になっている。該当するファクトリの JNDI 名は次のとおり。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ <code>javax.jms.QueueConnectionFactory</code> ■ <code>javax.jms.TopicConnectionFactory</code> <p>下位互換性のために、これら 2 つの接続ファクトリの JNDI 名はこのリリースでも定義されており、サポート対象。</p> <p>WebLogic JMS 6.x では、1 つのデフォルト接続ファクトリが定義されている。このファクトリは JNDI 名 <code>weblogic.jms.ConnectionFactory</code> を使用してロックアップ可能。Administration Console を使用すれば、ユーザ定義の接続ファクトリを指定することもできる。</p> <p>注意： デフォルトの接続ファクトリを使用する場合は、接続ファクトリがデプロイされる可能性のある WebLogic Server を限定できない。特定の WebLogic Server を対象にする場合は、新しい接続ファクトリを作成し、適切な WebLogic Server の対象を指定する。</p>	<p>新しいデフォルトまたはユーザ定義の接続ファクトリクラスを使用するために、非推奨のクラスを使用している既存のコードを変更することが望ましい。</p> <p>例として、デフォルトのキュー接続ファクトリを使用して次の定数を指定した場合を示す。</p> <pre>public final static String JMS_FACTORY="javax.jms.QueueConnectionFactory"</pre> <p>この場合、新しいユーザ定義の接続ファクトリを使用するためには定数を次のように変更する。</p> <pre>public final static String JMS_FACTORY="weblogic.jms.QueueConnectionFactory"</pre> <p>旧バージョンとの下位互換性を保つためには、接続ファクトリのコンフィグレーション時に [メッセージの短縮を許可] チェックボックスおよび [ユーザトランザクションを有効化] チェックボックスをオンにする必要がある。</p> <p>接続ファクトリの定義の詳細については、Administration Console オンラインヘルプの「JMS 接続ファクトリ」を参照。</p>
	<p>特定の WebLogic Server でデフォルト接続ファクトリをインスタンス化するには、WebLogic Server のコンフィグレーション時に [デフォルト JMS 接続ファクトリを有効化] チェックボックスをオンにする。</p>	<p>変更不要。コンフィグレーションで必要とされる。詳細については、Administration Console オンラインヘルプの「JMS サーバ」を参照。</p>

表 6-1 5.1 と 6.0 の既存の機能の変更点（続き）

カテゴリ	説明	コードの変更点
接続	接続を閉じると、未処理の同期呼び出しと非同期リスナの処理が完了するまで呼び出しがブロックされる。	変更不要。
セッション	セッションを閉じると、未処理の同期呼び出しおよび非同期リスナの処理が完了するまで、呼び出しがブロックされる。	変更不要。
メッセージ コンシューマ	1つのセッションで1つのトピックに対して複数のトピックサブスクライバが定義されている場合、各コンシューマはメッセージのコピーを受信する。	変更不要。
	メッセージコンシューマをクローズすると、メソッド呼び出しが完了し、未処理の同期アプリケーションがすべてキャンセルされるまで、呼び出しはブロックされる。	変更不要。
	JMS仕様に準拠するために、接続ファクトリのコンフィグレーション時に[メッセージの短縮を許可]チェックボックスをオンにしない限り、アプリケーションは、 <code>onMessage()</code> メソッド内で <code>close()</code> メソッドが呼び出されても応答しない。確認応答モードが <code>AUTO_ACKNOWLEDGE</code> の場合、現在のメッセージはまだ自動的に確認応答される。	変更不要。コンフィグレーションで必要とされる。詳細については、Administration Console オンラインヘルプの「 JMS 接続ファクトリ 」を参照。

表 6-1 5.1 と 6.0 の既存の機能の変更点 (続き)

カテゴリ	説明	コードの変更点
メッセージ ヘッダ フィールド	JMSMessageID ヘッダ フィールドの形式は 変更されている。	<p>JMSMessageID で既存のメッセージに アクセスする場合は、以下の weblogic.jms.extensions.JMSHelp er メソッドのいずれかを実行して、 JMSMessageID の形式を WebLogic JMS 5.1 以前から JMS 6.x に変換しなければ ならない場合がある。</p> <p>5.1 以前の JMSMessageID の形式を 6.x に変換する場合には、以下を実行する。</p> <pre>public void oldJMSMessageIDToNew(String id, long timeStamp) throws JMSEException</pre> <p>6.1 の JMSMessageID の形式を 6.1 以前 に変換する場合には、以下を実行する。</p> <pre>public void newJMSMessageIDToOld(String id, long timeStamp) throws JMSEException</pre>

表 6-1 5.1 と 6.0 の既存の機能の変更点（続き）

カテゴリ	説明	コードの変更点
送り先	<p><code>createQueue()</code> メソッドと <code>createTopic()</code> メソッドでは、送り先が動的には作成されず、ベンダ固有の送り先名で既に存在する送り先への参照が作成されるのみ。</p>	<p><code>createQueue()</code> または <code>createTopic()</code> を使用しているコードの一部を変更し、<code>createPermanentQueueAsync()</code> および <code>createPermanentTopicAsync()</code> という <code>JMSHelper</code> クラス メソッドをそれぞれ使用して動的に送り先を作成する。例として、動的にキューを作成するために次のメソッドを使用する場合を示す。</p> <pre>queue=qsession.createQueue(queueName);</pre> <p>キューを動的に作成するには、4-50 ページの「<code>JMSHelper</code> クラス メソッドの使い方」のサンプル <code>findQueue()</code> メソッドで説明されているようにコードを変更する。</p> <p><code>JMSHelper</code> クラスの詳細については、4-50 ページの「送り先の動的作成」を参照。</p>
	<p>一時的な送り先を作成する場合は、一時的なテンプレートを指定する必要がある。</p>	<p>変更不要。コンフィグレーションで必要とされる。詳細については、Administration Console オンラインヘルプの「JMS テンプレート」を参照。</p>
	<p>その一時的な送り先のメッセージ コンシューマを作成するには、接続のオーナーであることが必要。</p>	<p>一時的な送り先にメッセージ コンシューマを作成する場合は、自分が接続のオーナーであることを確認する。</p>

表 6-1 5.1 と 6.0 の既存の機能の変更点 (続き)

カテゴリ	説明	コードの変更点
恒久サブスクライバ	恒久サブスクライバ用に JDBC テーブルを手動で作成する必要はない。自動的に作成される。	変更不要。
	恒久サブスクライバは必要な数だけ作成可能。	変更不要。
	client ID をプログラムで定義する場合は、接続を作成した直後に定義する必要がある。それ以外の場合、例外が送出され、その接続では他の JMS 呼び出しができなくなる。	setClientID() メソッドが、接続作成の直後に発行されるようにする。詳細については、4-54 ページの「クライアント ID の定義」を参照。
セッションプール	セッション プール ファクトリ、セッション プール、参照される接続ファクトリ、参照される送り先、関連する接続コンシューマは、すべて同じ JMS サーバを対象にする必要がある。	全オブジェクトが同じ JMS サーバを対象としていることを確認すること。
	WebLogic JMS バージョン 5.1 の Javadoc の一部として提供されていた SessionPoolManager インタフェースと ConnectionConsumerManager インタフェースはシステム インタフェースであり、クライアント アプリケーションでは使用しないため、バージョン 6.0 および 6.1 の Javadoc では削除されている。	使用している場合は、これらのオブジェクトへの参照をクライアント アプリケーションから削除すること。

表 6-1 5.1 と 6.0 の既存の機能の変更点（続き）

カテゴリ	説明	コードの変更点
トランザクション	JMS と EJB のデータベース呼び出しを同じトランザクション内で組み合わせて使用するには、2 フェーズ コミット (2PC) が必要である。WebLogic Server の以前のリリースでは、同じデータベース接続プールを使用すれば、この 2 つを組み合わせて使用することができた。	変更不要。
	受信キュー メッセージを回復またはロールバックすると、キューにある全コンシューマに対してそのメッセージが使用可能になる。WebLogic Server の以前のリリースでは、ロールバックされたメッセージは、そのメッセージをロールバックしたセッションでのみ（そのセッションが終了するまで）使用可能だった。	変更不要。

次の表に、WebLogic Server バージョン 6.0 の既存の機能の変更点を示します。また、その結果としてコードを変更する必要がある場合は、そのコードも併せて示します。バージョン 1.0.2 の変更履歴に関する情報については、[JavaSoft JMS 仕様バージョン 1.0.2](#) の第 11 章「Change History」を参照してください。

表 6-2 6.0 と 6.1 の既存の機能の変更点

カテゴリ	説明	コードの変更点
接続ファクトリ	<p>Administration Console の [確認応答ポリシー] 属性の新しいデフォルト値 [All] は、JavaSoft JMS 仕様の変更に従った回避策。この新しいデフォルト設定は、JMS の旧バージョンからの変更を表す。旧バージョンでは、内部で [Previous] がデフォルトとなっており、Administration Console のオプションとしては表示されていなかった。</p> <p>接続ファクトリのメッセージの確認応答ポリシーとしては、非トランザクションセッションに CLIENT_ACKNOWLEDGE モードを使用する実装にのみ、[確認応答ポリシー] 属性が適用される。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ [All] - どのメッセージが確認応答メソッドを呼び出すかにかかわらず、指定したセッションで受信したすべてのメッセージを確認応答する。 ■ [Previous] - 指定したセッションで受信したすべてのメッセージを確認応答する。ただし、確認応答メソッドを呼び出したメッセージを最後に、確認応答を中止する。 <p>メッセージの確認応答モードの詳細については、2-10 ページの「非トランザクションセッション」を参照。</p> <p>注意： メッセージ駆動型 Bean (MDB) で使用される接続ファクトリでは、[確認応答ポリシー] フィールドを常に [Previous] に設定する。デフォルト MDB 接続ファクトリでは既に設定されているが、外部の接続ファクトリでは設定されていない可能性がある。</p>	<p>確認応答メソッドを呼び出すメッセージ以前の受信メッセージを確認応答する場合は、Administration Console の [JMS 接続ファクトリ] タブで、デフォルトの [確認応答ポリシー] 設定を [All] から [Previous] に変更する。</p>

表 6-2 6.0 と 6.1 の既存の機能の変更点（続き）

カテゴリ	説明	コードの変更点
送り先	WLS バージョン 6.0 では、ソフトウェアで大文字と小文字を区別しなかったが、JMS マニュアルは、JMSDestinationMBean の StoreEnabled 属性の default、true、および false の値を正しく指定している。しかし、バージョン 6.1 では、StoreEnabled 設定にはすべて小文字が必要になる。	変更不要。コンフィグレーションで必要とされる。詳細については、Administration Console オンラインヘルプの「 JMS テンプレート 」を参照。
セッション プール	<p>WebLogic Server 6.0 SP2 以降の QueueConnection クラスおよび TopicConnection クラスでは、createConnectionConsumer メソッドの MaxMessages 引数は、サーバに保持されるメッセージの量に応じた特定の値を必要とする。</p> <p>したがって、MaxMessages は以下のように解析される。</p> <ul style="list-style-type: none"> -1 - デフォルト値と同じ 10。 >0 - 正の整数は変換を必要としない。 0 - JMSEException を生成する無効な値。 <-1 - JMSEException を生成する無効な値。 	createConnectionConsumer メソッドでは、MaxMessages 引数の値が -1（デフォルト）または正の整数に設定されるようにする。

既存のアプリケーションの移行

WebLogic Server 6.1 では、[JavaSoft JMS 仕様バージョン 1.0.2](#) および最新の [JMS API - Errata](#) がサポートされています。既存の JMS アプリケーションを使用するには、WebLogic Server のバージョンを確認してから、この節で説明されている適切な移行手順を実行する必要があります。

始める前に

移行手順を開始する前に、以下のリストをチェックして、現在の WebServer JMS のバージョンで移行がサポートされているかどうか、およびそのバージョンに特殊な移行ルールが適用されているかどうかを確認する必要があります。

- バージョン 4.5.1 - 移行は、SP14 に対してのみサポートされています。すべてのサービス パックを実行している場合は、BEA カスタマ サポートまでお問い合わせください。
- バージョン 5.1 - SP07 または SP08 の場合、既存の JDBC ストアをバージョン 6.0 または 6.1 に移行する前に BEA カスタマ サポートに連絡する必要があります。
 - オブジェクトメッセージを移行するには、オブジェクト クラスが、バージョン 6.0 以降のサーバ クラスパス内になければなりません。
 - リリース 6.0 以降でコンフィグレーションされていない送り先では、移行されたメッセージは失敗し、イベントがログに記録されます。
- バージョン 6.0 - バージョン 6.1 以降への移行がすべてのサービス パックでサポートされています。ただし、管理者は、[確認応答ポリシー] のデフォルト属性に対する変更について確認する必要があります。
 - WebLogic JMS バージョン 6.1 接続ファクトリの [確認応答ポリシー] 属性では、デフォルト値 [All] は [JavaSoft JMS 仕様](#) の変更に従った回避策です。詳細については、6-8 ページの「6.0 と 6.1 の既存の機能の変更点」を参照してください。

4.5 および 5.1 アプリケーションのバージョン 6.x への移行手順

WebLogic JMS 6.x アプリケーションを使用するには、その前に WebLogic Server バージョン 4.5 および 5.1 のコンフィグレーション データとメッセージ データを次の手順で移行する必要があります。

1. 以降手順を開始する前に、WebLogic Server の旧バージョンを正しくシャットダウンします。

警告： メッセージの処理中に WebLogic Server の旧バージョンを突然停止すると、移行の際に問題が発生することがあります。旧バージョンのサーバをシャットダウンし、WebLogic Server バージョン 6.x に移行する前に、処理が非アクティブになっている必要があります。

2. 『[WebLogic Server インストール ガイド](#)』で説明されているとおりに、WebLogic Server 環境をアップグレードします。
3. [コンフィグレーション変換機能](#)を使用してコンフィグレーション情報を移行します。

コンフィグレーションの移行時に、以下のデフォルト キュー接続ファクトリおよびデフォルト トピック接続ファクトリが有効になります。

- `javax.jms.QueueConnectionFactory`
- `javax.jms.TopicConnectionFactory`
- `weblogic.jms.ConnectionFactory`

最初の 2 つの接続ファクトリは非推奨になっていますが、下位互換性のためにこのリリースでも定義されており、使用できます。新しいデフォルト接続ファクトリの詳細については、6-2 ページの「5.1 と 6.0 の既存の機能の変更点」の表を参照してください。

JMS の管理者は、コンフィグレーションの変換結果を見直して、アプリケーションのニーズが満たされているかどうかを確認する必要があります。この場合、バージョン 5.1 と同様に、JMS 属性はすべて単一のノードにマップされます。

注意： バージョン 6.0 以降では、JMS キューはコンフィグレーション時に定義され、データベース テーブル内には保存されません。メッセージ データと恒久サブスクリプションは、2 つの JDBC テーブルまたはファイル システムのディレクトリに格納されます。

4. 既存の JDBC データベース ストアの自動移行作業を準備します。
 - a. 既存の JDBC データベースのバックアップを作成します。
 - b. 移行されたコンフィグレーション情報（手順 2 を参照）に、既存の JDBC データベース ストアと全く同じ属性を持つ JDBC データベース ストアがあること、また、そのストアを使用する新しい JMS サーバで、既存の JMS サーバと同じ送り先とその送り先の属性が定義されていることを確認します。
 - c. 新しい JDBC データベース ストアが既にある場合、中身が空であることを確認します。

新しい JDBC データベース ストアが必要に応じて自動移行中に作成されます。
 - d. JDBC データベース ストアで必要な量の 2 倍のディスク スペースがシステムにあることを確認します。

移行中には、既存のデータベース情報と新しいデータベース情報がディスク上に併存するため、2 倍のディスク スペースが必要になります。移行が完了したら、6-14 ページの「JDBC データベース ストアの削除」の説明に従って古い JDBC データベース ストアを削除できます。
5. 必要に応じて既存のコードを更新し、6-2 ページの「5.1 と 6.0 の既存の機能の変更点」で説明されている機能の変更点を反映させます。
6. WebLogic Server を起動すると、既存の JDBC データベース ストアが自動的に移行されます。

注意： 何らかの理由で自動移行が失敗した場合、自動移行は次に WebLogic Server が起動したときに再試行されます。

6.0 アプリケーションの 6.1 への移行手順

WebLogic JMS 6.x アプリケーションを使用するには、その前に WebLogic Server バージョン 6.0 のコンフィグレーション データとメッセージ データを次の手順で移行する必要があります。

- バージョン 6.0 での接続ファクトリのコンフィグレーションを確認します。
6.1 の新しいデフォルト接続ファクトリを呼び出すプログラムを修正して、以下の接続ファクトリのいずれかがロードされるようにする必要があります。
 - バージョン 6.0 のデフォルト接続ファクトリのいずれか
 - カスタム接続ファクトリ
- 移行手順を開始する前に、バージョン 6.0 の WebLogic Server を正しくシャットダウンします。
警告： メッセージの処理中に WebLogic Server の旧バージョンを突然停止すると、移行の際に問題が発生することがあります。旧バージョンのサーバをシャットダウンし、WebLogic Server バージョン 6.x に移行する前に、処理が非アクティブになっている必要があります。
- 『[WebLogic Server インストール ガイド](#)』で説明されているとおりに、WebLogic Server 環境をアップグレードします。
- 必要に応じて既存のコードを更新し、6-8 ページの「6.0 と 6.1 の既存の機能の変更点」で説明されている機能の変更点を反映させます。
警告： バージョン 6.1 の WebLogic Server を起動する前に、バージョン 6.0 のストアをバックアップします。これは、バージョン 6.0 のサーバでは 6.1 のストアを使用できないためです。使用すると、データが破損するおそれがあります。
- バージョン 6.1 の WebLogic Server を起動します。6.1 サーバでは、6.0 ストアがそのまま使用されます。

JDBC データベース ストアの削除

移行が完了したら、付録 B「JDBC データベース ユーティリティ」の説明に従って、`utils.Schema` ユーティリティで古い JDBC データベース テーブルを削除する必要があります。

移行中に、ローカル作業ディレクトリで DDL ファイルが生成および保存されます。DDL ファイルには、`drop_<jmsServerName>_oldtables.ddl` という名前が付けられます。`<jmsServerName>` は JMS サーバ名を示します。JDBC データベース ストアを削除するには、`utils.Schema` ユーティリティでこの DDL ファイルを引数として指定します。

たとえば、`MyJMSServer` という JMS サーバから古い JDBC データベース ストアを削除するには、次のコマンドを実行します。

```
java utils.Schema jdbc:weblogic:oracle weblogic.jdbc.oci.Driver -s server -u
user1 -p foobar -verbose drop_MyJMSServer_oldtables.ddl
```

`utils.Schema` ユーティリティの詳細については、付録 B「JDBC データベース ユーティリティ」を参照してください。

A コンフィグレーション チェックリスト

以下の節では、さまざまな WebLogic JMS の機能に関するモニタ用チェックリストを示します。

- サーバクラスタ
- JTA ユーザトランザクション
- JMS トランザクション
- メッセージの配信
- 非同期メッセージの配信
- 永続的メッセージ
- メッセージの並行処理
- マルチキャスト
- 恒久サブスクリプション
- 送り先のソート順
- 一時的な送り先
- しきい値と割り当て

コンフィグレーション属性の設定については、『[管理者ガイド](#)』を参照してください。各コンフィグレーション属性の詳細については、[Administration Console オンライン ヘルプ](#)を参照してください。

サーバ クラスタ

サーバ クラスタをサポートするには、以下のコンフィグレーションを行います。

- [接続ファクトリ] ノードの [対象] タブで、対象となる WebLogic Server を指定します。
- [サーバ] ノードの [対象] タブで、対象となる WebLogic Server を指定します。

JTA ユーザ トランザクション

JTA ユーザ トランザクションをサポートするには、以下のコンフィグレーションを行います。

- [接続ファクトリ] ノードの [コンフィグレーション | トランザクション] タブにある [ユーザ トランザクションを有効化] チェック ボックスをオンにして、接続ファクトリの JTA ユーザ トランザクション モードを設定します。

JMS トランザクション

JMS トランザクション セッションをサポートするには、以下のコンフィグレーションを行います。

- [接続ファクトリ] ノードの [コンフィグレーション | トランザクション] タブにある [トランザクション タイムアウト] 属性で、接続ファクトリの トランザクション タイムアウト値を設定します。
- [セッション プール] ノードの [コンフィグレーション] タブにある [処理済] チェックボックスをオンにして、セッション プールの トランザクション モードを設定します。

メッセージの配信

メッセージ配信の属性を定義するには、以下のコンフィグレーションを行います。

- [接続ファクトリ] ノードの [コンフィグレーション | 一般] タブで、接続ファクトリの優先順位、存続時間、配信時間、配信モードの属性を設定します。
- [送り先] ノードの [コンフィグレーション | オーバライド] タブで、送り先の優先度、存続時間、配信時間、配信モードのオーバーライドの属性を設定します。
- [送り先] ノードの [コンフィグレーション | 再配信] タブで、送り先の再配信遅延、再配信の制限、エラー送り先の属性を設定します。

注意： 以上の設定は、4-24 ページの「メッセージの送信」で説明されているように、メッセージの送信時または `set` メソッドの使用時にメッセージプロデューサで動的に設定することもできます。

送り先のコンフィグレーション属性は他のすべての設定に優先します。

非同期メッセージの配信

非同期セッションの間に存在し、メッセージリスナにまだ渡されていないメッセージの最大数を定義するには、以下のコンフィグレーションを行います。

- [接続ファクトリ] ノードの [コンフィグレーション | 一般] タブで、[最大メッセージ] 属性を設定します。

永続的メッセージ

注意： 恒久サブスクリプションがあるトピックでのみ、送り先は永続的になります。恒久サブスクリプションの詳細については、4-54 ページの「恒久サブスクリプションの設定」を参照してください。

永続メッセージングをサポートするには、以下のコンフィグレーションを行います。

- [ストア] ノードでファイルまたは JDBC ストアを作成します。
- [サーバ] ノードの [コンフィグレーション | 一般] タブにある [ストア] を設定して、JMS サーバのバックングストアを指定します。

注意： 2 つの JMS サーバで同じバックングストアを使用することはできません。

- 以下の属性のいずれかを [永続] または [非永続] に設定してデフォルトメッセージ配信モードを指定します。
 - [接続ファクトリ] ノードの [コンフィグレーション | 一般] タブにある [デフォルト配信モード] 属性
 - [送り先] ノードの [コンフィグレーション | オーバライド] タブにある [配信モードのオーバライド] 属性

注意： 4-24 ページの「メッセージの送信」の説明に従って、メッセージ送信の配信モードを永続的に指定できます。

メッセージの並行処理

メッセージの並行処理をサポートするには、以下のコンフィグレーションを行います。

- [セッション プール] ノードの [コンフィグレーション] タブで、サーバセッションプールの属性を指定します。
- [コンシューマ] ノードの [コンフィグレーション] タブで、接続コンシューマの属性を指定します。

注意： メッセージの並行処理に使用するサーバセッション プール ファクトリはコンフィグレーションできません。WebLogic JMS は、デフォルトでは `weblogic.jms.ServerSessionPoolFactory:<name>` (`<name>` は、セッション プールが作成される JMS サーバ名) という `ServerSessionPoolFactory` オブジェクトを 1 つ定義します。サーバセッション プール ファクトリの使い方については、4-71 ページの「サーバセッションプールの定義」を参照してください。

マルチキャスト

注意: マルチキャストはトピックでのみ有効です。

トピックのマルチキャストに対しては、以下のコンフィグレーションを行います。

- [送り先] ノードの [コンフィグレーション | マルチキャスト] タブで、アドレス、ポート、存続時間 (TTL) を設定します。
- [接続ファクトリ] ノードの [コンフィグレーション | 一般] タブにある [最大メッセージ] 属性で、未処理メッセージの最大数を設定します。
- [接続ファクトリ] ノードの [コンフィグレーション | 一般] タブにある [超過時のポリシー] 属性で、未処理メッセージが [最大メッセージ] の値に達したときに使用するポリシーを指定します。

恒久サブスクリプション

恒久サブスクリプションをサポートするには、以下のコンフィグレーションを行います。

- [接続ファクトリ] ノードの [コンフィグレーション | 一般] タブにある [クライアント ID] 属性で、恒久サブスクリプションを持つクライアントのクライアント ID を設定します。

注意： または、4-54 ページの「恒久サブスクリプションの設定」で説明しているように、クライアントでは接続の作成後に次の接続でクライアント ID を設定することもできます。

送り先のソート順

送り先のソート順をサポートするには、以下のコンフィグレーションを行います。

- [送り先キー] ノードの [コンフィグレーション] タブで、キーの属性を設定します。
- [送り先] ノードの [コンフィグレーション | 一般] タブで [送り先キー] を設定します。

一時的な送り先

一時的な送り先（キューまたはトピック）をサポートするには、以下をコンフィグレーションします。

- 同じドメインにある JMS サーバ用の JMS テンプレート。[テンプレート] ノードの [コンフィグレーション | 一般] タブを使用します。

- JMS サーバが一時的な送り先として使用する JMS テンプレート。[サーバ] ノードの [コンフィグレーション | 一般] タブにある JMS サーバの [一時的なテンプレート] 属性を使用します。

しきい値と割り当て

しきい値と割り当てに対しては、以下のコンフィグレーションを行います。

- [サーバ] ノードの [コンフィグレーション | しきい値と割り当て] タブで、メッセージおよびバイトのしきい値と割り当て (最大数、最大しきい値、最小しきい値) を設定します。
- [送り先] ノードの [コンフィグレーション | しきい値と割り当て] タブで、メッセージおよびバイトのしきい値と割り当て (最大数、最大しきい値、最小しきい値) を設定します。
- [セッション プール] ノードの [コンフィグレーション] タブにある [最大セッション] 属性で、セッション プールから取得可能なセッションの最大数を設定します。
- [コンシューマ] ノードの [コンフィグレーション] タブにある [最大メッセージ] 属性で、接続コンシューマで蓄積可能なメッセージの最大数を設定します。

B JDBC データベース ユーティリティ

以下の節では、WebLogic JMS ストア、および JDBC データベース ユーティリティを使用して既存の JDBC データベース ストアを再生成する方法について説明します。

- 概要
- JMS ストアについて
- JDBC ストアの再生成

概要

JDBC `utils.Schema` ユーティリティを使用すると、既存のバージョンを削除することで新しい JDBC ストアを再生成できます。JMS はこれらのストアを自動的に作成するので、このユーティリティを実行する必要は通常ありません。しかし、既存の JDBC データベース ストアに障害が発生した場合は、`utils.Schema` ユーティリティを使用して再生成できます。

警告： `utils.Schema` コマンドは、既存のデータベース テーブルをすべて削除して、新しいものを再作成するので、実行する際には注意してください。

JMS ストアについて

JMS データベースには、自動的に生成され、JMS 内部で使用されるシステムテーブルが 2 つあります。

- <prefix>JMSStore
- <prefix>JMSState

プレフィックス名は、このバックアップストア内の JMS テーブルを識別します。固有のプレフィックスを指定すると、同じデータベースで複数のストアを使用できます。プレフィックスは、JDBC ストアをコンフィグレーションする際に Administration Console でコンフィグレーションされます。プレフィックスは、以下の場合にテーブルに付加されます。

- DBMS で完全修飾名が必要な場合
- 複数のテーブルを 1 つの DBMS に格納できるようにして、2 つの WebLogic Server の JMS テーブルを区別する必要がある場合

プレフィックスは、JMS テーブル名に付加されたときに有効なテーブル名になるように、次の形式で指定する必要があります。

```
[[catalog.]schema.]prefix
```

注意： データに障害が発生するので、2 つの JMS ストアを同じデータベーステーブルで使用することはできません。

ストアを作成およびコンフィグレーションする手順については、Administration Console オンラインヘルプの「[JMS ファイルストア](#)」(ファイルストアに関する情報)、および「[JMS JDBC ストア](#)」(JDBC データベースストアに関する情報)をそれぞれ参照してください。

JDBC ストアの再生成

utils.Schema ユーティリティは Java プログラムで、以下の項目を指定するコマンドライン引数をとります。

- JDBC ドライバ

- データベース接続情報
- データベース テーブルを作成する SQL データ定義言語 (DDL) コマンド (セミコロンで終わる) を含むファイルの名前

通常、DDL ファイルには .ddl 拡張子が付いています。DDL ファイルは、Cloudscape、Sybase、Oracle、MS SQL Server、IBM DB2 データベース用に提供されています。

`utils.Schema` を実行するには、`CLASSPATH` に `weblogic.jar` ファイルを指定する必要があります。

`utils.Schema` コマンドを次のように入力します。

```
java utils.Schema url JDBC_driver [options] DDL_file
```

次の表に、`utils.Schema` コマンドライン引数を示します。

表 6-3 `utils.Schema` コマンドライン引数

引数	説明
<code>URL</code>	データベース接続 URL。この値は、JDBC 仕様の定義に従ってコロン区切りの URL にする。
<code>JDBC_driver</code>	JDBC ドライバクラスの完全パッケージ名。
<code>options</code>	<p>省略可能なコマンド オプション。 データベースの必要に応じて、以下のものを指定する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ユーザ名とパスワード。次のように指定する。 <code>-u <username> -p <password></code> ■ JDBC データベース サーバのドメイン ネーム サーバ (DNS) 名。次のように指定する。 <code>-s <dbserver></code> <p><code>-verbose</code> オプションも指定可能。このオプションを指定すると、<code>utils.Schema</code> は実行時に SQL コマンドをエコーする。</p>

表 6-3 utils.Schema コマンドライン引数

引数	説明
<i>DDL_file</i>	<p>実行する SQL コマンドが記されたテキストファイルの絶対パス名。SQL コマンドは複数行にわたって指定できる。末尾にセミコロン (;) を付ける。ポンド記号 (#) で始まる行はコメント。</p> <p>weblogic.jar ファイル内の weblogic/jms/ddl ディレクトリには、Cloudscape、Sybase、Oracle、MS SQL Server、Times Ten、IBM DB2 の各データベース用の JMS DDL ファイルがある。このファイルには、JMS データベース テーブルを作成するための SQL コマンドが含まれている。別のデータベースを使用するには、この DDL ファイルのいずれかをコピーおよび編集する。</p>

たとえば、次のコマンドでは、ユーザ名 user1、パスワード foobar で、DEMO という Oracle サーバに JMS テーブルを再作成します。

```
java utils.Schema jdbc:weblogic:oracle:DEMO \
  weblogic.jdbc.oci.Driver -u user1 -p foobar -verbose \
  weblogic/classes/jms/ddl/jms_oracle.ddl
```

Cloudscape データベースでは、ユーザ名とパスワードは不要です。ただし、Cloudscape JDBC ドライバは、cloudscape.system.home システム プロパティを使用して、データベース ファイルを格納しているディレクトリを検索します。このプロパティに Java コマンド オプション -D で値を指定する必要があります。さらに、weblogic\samples\eval\cloudscape\lib にある CLASSPATH で Cloudscape クラスを指定します。

たとえば、次のコマンドでは、Cloudscape サーバで JMS テーブルを作成します。

```
java
-Dcloudscape.system.home=/weblogic/samples/eval/cloudscape/data
  utils.Schema jdbc:cloudscape:demoPool;create=true
  COM.cloudscape.core.JDBCdriver -verbose
  weblogic/classes/jms/ddl/jms_cloudscape.ddl
```

Cloudscape JDBC URL では、WebLogic JMS サンプルにあるデモ データベースを指定します。このデータベースではサンプルとして JMS テーブルが既に作成されています。

索引

D

Destination
定義 2-12

J

JDBC ストア
自動移行 6-12
データベース ユーティリティ B-1

JMS
アーキテクチャ 1-4
 クラスタ化機能 1-5
 主要な構成要素 1-5
既存の機能の変更点 6-1
機能 1-2
クラス 2-5
クラスタのコンフィグレーション 3-3
コンフィグレーション 3-2
モニタ 3-5

JMS トランザクション セッション
コミットまたはロールバック 5-5
コンフィグレーション チェックリス
ト A-2
作成 5-4
処理の実行 5-5
表示 5-4

JMSCorrelationID ヘッダ フィールド
設定 4-59
定義 2-16
表示 4-59

JMSDeliveryMode ヘッダ フィールド
定義 2-17
表示 4-59

JMSDeliveryTime ヘッダ フィールド
定義 2-17
表示 4-59

JMSDestination ヘッダ フィールド
定義 2-17
表示 4-59

JMSExpiration ヘッダ フィールド
定義 2-18

JMSHelper クラス メソッド 4-50

JMSMessageID ヘッダ フィールド
定義 2-18
表示 4-60

JMSPriority ヘッダ フィールド
定義 2-18
表示 4-60

JMSRedelivered ヘッダ フィールド
定義 2-19
表示 4-60

JMSReplyTo ヘッダ フィールド
設定 4-60
定義 2-19
表示 4-60

JMSTimestamp ヘッダ フィールド
設定 4-60
定義 2-19
表示 4-60

JMSType ヘッダ フィールド
設定 4-60
定義 2-20
表示 4-60

JTA ユーザ トランザクション
JNDI のユーザ トランザクションの
ルックアップ 5-8
起動 5-8
コミットまたはロールバック 5-9
コンフィグレーション チェックリス
ト A-2
必要な処理の実行 5-8
非トランザクション セッションの作
成 5-7

例 5-10

S

SQL メッセージ セレクタ 4-67

U

utils.Schema ユーティリティ 6-14, B-1

X

XML メッセージ
クラス 2-21
作成 4-16
セレクタ 4-68

あ

アプリケーション開発フロー
オブジェクト リソースの解放 4-35
受信メッセージの確認応答 4-34
設定 4-4
手順 4-2
必要なパッケージのインポート 4-3
メッセージの受信 4-31
メッセージの送信 4-24
アプリケーションの設定
送り先のルックアップ 4-10
セッションの作成 4-8
接続の開始 4-17
接続の作成 4-7
接続ファクトリのルックアップ 4-6
手順 4-4
非同期メッセージ リスナの登録 4-16
メッセージ オブジェクトの作成 4-15
メッセージ コンシューマの作成 4-12
メッセージの非同期受信 4-16
メッセージ プロデューサの作成 4-12
例
PTP 4-18
Pub/sub 4-21

い

移行手順 6-10
4.5 および 5.1 アプリケーションの
バージョン 6.x への移行手順
6-11
6.0 アプリケーションの 6.1 への移行
手順 6-12
一時的な送り先
サーバのコンフィグレーション A-6
削除 4-53
作成
キュー 4-53
トピック 4-53
一時的なキュー
削除 4-53
作成 4-53
定義 2-13
一時的なトピック
削除 4-53
作成 4-53
定義 2-13
印刷、製品のマニュアル 1-x

え

永続的メッセージ
コンフィグレーション チェックリス
ト A-3
永続メッセージ
定義 2-4
エラー回復
セッション 4-48
接続 4-44

お

オーバーライド
再配信遅延 4-37
配信時間
概要 4-40
スケジューリング済み配信時間の
構文 4-41

スケジュール インタフェース
4-43
相対配信時間 4-41
送り先
一時的な 4-52
ソート順序 4-31
動的作成 4-50
ルックアップ 4-10
オブジェクト メッセージ
作成 4-15
オブジェクト リソースの解放 4-35

か

確認応答モード 2-10
カスタマ サポート情報 1-xi

き

既存の機能の変更点 6-1
キュー
一時的な
削除 4-53
作成 4-53
定義 2-13
作成 4-10
定義 2-13
動的作成 4-50
表示 4-11, 4-13
キュー セッション
作成 4-9
定義 2-9
キュー接続
作成 4-7
定義 2-8
キュー接続ファクトリ
キュー接続の作成 4-7
定義 2-7
ルックアップ 4-7
キュー センダ
作成 4-12
定義 2-14
メッセージの送信 4-26

キュー レシーバ
作成 4-13
定義 2-14
メッセージの受信 4-32

く

クライアント ID
定義 4-54
表示 4-55
クラスタ
コンフィグレーション 3-3
コンフィグレーション チェックリス
ト A-2
クローズ
セッション 4-49
接続 4-47

こ

恒久サブスクリプション
クライアント ID 4-54
削除 4-57
作成 4-56
設定 4-54
変更 4-57
コンフィグレーション
JMS 3-2
クラスタ化された JMS 3-3
チェックリスト A-1

さ

サーバ障害の回復 3-5
サーバ セッション
取得 4-76
定義 2-23
サーバ セッション プール
ACL 4-73
作成
キュー接続コンシューマ 4-75
トピック接続コンシューマ 4-76
設定 4-71

- 定義 2-22
- サーバセッション プール ファクトリ
 - サーバセッション プールの作成 4-75
 - 定義 2-22
 - ルックアップ 4-74
- 再配信遅延
 - 送り先でのオーバーライド 4-37
 - 概要 4-36
 - メッセージの設定 4-37
- 再配信の制限
 - エラー送り先のコンフィグレーション 4-38
 - 概要 4-38
 - 制限のコンフィグレーション 4-38
- サポート
 - 技術情報 1-xi

し

- システム障害からの回復 3-5
- 自動フェイルオーバ 3-5
- 障害、サーバ 3-5

す

- ストリーム メッセージ
 - 作成 4-15

せ

- セッション
 - 確認応答モード 2-10
 - 管理 4-48
 - クローズ 4-49
 - 作成 4-8
 - 定義 2-9
 - トランザクション 2-12
 - 非トランザクション 2-10
 - 例外リスナ 4-48
- 接続
 - 管理 4-44
 - 起動 4-17, 4-46
 - クローズ 4-47

- 作成 4-7
- 定義 2-8
- 停止 4-46
- メタデータ 4-45
- 例外リスナ 4-44
- 接続コンシューマ
 - キュー 4-77
 - 定義 2-23
 - トピック 4-77
- 接続の開始 4-17, 4-46
- 接続の停止 4-46
- 接続ファクトリ
 - 定義 2-6
 - ルックアップ 4-6

そ

- 存続時間 4-26, 4-28, 4-29, 4-44

と

- 同期受信 4-32
- 匿名プロデューサ 4-27, 4-28
- トピック
 - JMSHelper クラス メソッド 4-50
 - NoLocal 変数の表示 4-14
 - 一時的な
 - 削除 4-53
 - 作成 4-53
 - 定義 2-13
 - 作成 4-10
 - 定義 2-13
 - 動的作成 4-50
 - 表示 4-11, 4-14
- トピック サブスクライバ
 - 恒久 4-54
 - 作成 4-13
 - 定義 2-14
- トピック セッション
 - 作成 4-9
 - 定義 2-9
- トピック接続
 - 作成 4-8

- 定義 2-9
- トピック接続ファクトリ
 - 定義 2-7
 - トピック接続の作成 4-8
 - ルックアップ 4-7
- トピック パブリッシャ
 - 作成 4-13
 - 定義 2-14
 - メッセージの送信 4-27
- トランザクション 5-1
 - JMS トランザクション セッション。
JMS トランザクション
セッションを参照
 - JTA ユーザ トランザクション。JTA
ユーザ トランザクションを参
照

は

- 配信されなかったメッセージのエラー送
り先 4-38
- 配信時間 4-29, 4-44
 - オーバーライド
 - 送り先での 4-40
 - スケジューリング済み配信時間の
構文 4-41
 - スケジュール インタフェース
4-43
 - 相対配信時間 4-41
 - スケジューリングの概要 4-39
 - プロデューサに対する設定 4-39
 - メッセージに対する設定 4-40
- 配信モード 4-26, 4-28, 4-29
- バイト メッセージ
 - 作成 4-15
- パッケージ、必須 4-3
- パブリッシュ / サブスクライブ メッセー
ジング
 - 定義 2-3
 - 例
 - アプリケーションの設定 4-21
 - メッセージの送信 4-30
 - メッセージの同期受信 4-33

ひ

- 非恒久サブスクリプション 4-54
- 非同期メッセージ、受信 4-16, 4-32

ふ

- フェイルオーバー手順 3-5
- プロパティ フィールド
 - 参照 4-65
 - 消去 4-61
 - すべてを表示 4-63
 - 設定 4-61
 - 表示 4-61
 - 変換表 4-64

へ

- 並行処理 4-71
- ヘッダ フィールド
 - 参照 4-65
 - 設定 4-59
 - 定義 2-15
 - 表示 4-59

ほ

- ポイント ツー ポイント メッセージング
定義 2-2
 - 例
 - アプリケーションの設定 4-18
 - サーバセッション プール 4-80
 - メッセージの送信 4-30
 - メッセージの同期受信 4-33

ま

- マップ メッセージ
 - 作成 4-15
- マニュアル、入手先 1-x
- マルチキャスト セッション
 - 最大メッセージ 4-86
 - 作成 4-84
 - 前提条件 4-83

超過時のポリシー 4-86
定義 4-82
動的コンフィグレーション 4-86
トピック サブスクライバの作成 4-84
メッセージ リスナの設定 4-85
例 4-87

め

メタデータ、接続 4-45

メッセージ

永続性

コンフィグレーション チェック
リスト A-3

定義 2-4

オブジェクトの作成 4-15, 4-24

回復 4-33

確認応答 4-34

型

設定 4-15, 4-63

定義 2-21

表示 4-63

管理

ロールバックまたは回復した 4-36

サーバセッション プール 4-71

再配信遅延 4-36

再配信の制限 4-38

受信

順序の設定 4-31

同期 4-32

非同期 4-16, 4-32

送信 4-24

存続時間 4-26, 4-28, 4-29

定義 2-15

内容の定義 4-24

配信

コンフィグレーション チェック
リスト A-3

時間、設定 4-39

モード 4-26, 4-28, 4-29

配信時間 4-29, 4-41

配信時間の設定 4-39

フィルタ処理

SQL メッセージ セレクタ 4-67

XML メッセージ セレクタ 4-68

定義 4-66

プロパティ フィールド

参照 4-65

消去 4-61

すべてを表示 4-63

設定 4-61

定義 2-20

表示 4-61

変換表 4-64

ヘッダ フィールド

参照 4-65

設定 4-59

定義 2-15

表示 4-59

本文 2-21

優先度 4-26, 4-28, 4-29

メッセージ駆動型 Bean 5-9

メッセージ コンシューマ

作成 4-12

定義 2-14

メッセージ セレクタ

定義

SQL 4-67

XML 4-68

表示 4-69

例 4-69

メッセージの回復 4-33, 4-36

メッセージの確認応答 4-34

メッセージの再配信 4-33

メッセージの受信

順序 4-31

同期 4-32

非同期 4-16, 4-32

メッセージの送信 4-24

メッセージのフィルタ処理

SQL 文 4-67

XML セレクタ 4-68

定義 4-66

例 4-69

メッセージ プロデューサ

- 作成 4-12
- 定義 2-14
- 動的作成 4-29
- メッセージ リスナ、登録 4-16
- メッセージング モデル
 - パブリッシュ / サブスクライブ 2-3
 - ポイントツーポイント 2-2

も

- モニタ、JMS 3-5

ゆ

- 優先度、メッセージ 4-26, 4-28, 4-29

よ

- 要求と応答、サポート 2-16

り

- リソース、解放 4-35

れ

例

- JTA ユーザ トランザクションにおける JMS と EJB 5-10
- キューの参照 4-66
- サーバ セッション プール
 - PTP 4-78
 - Pub/sub 4-80
- 設定
 - PTP 4-18
 - Pub/sub 4-21
- マルチキャスト セッション 4-87
- メッセージの送信
 - PTP 4-30
 - Pub/sub 4-30
- メッセージの同期受信
 - PTP 4-33
 - Pub/sub 4-33

- メッセージのフィルタ処理 4-69
- メッセージ ヘッダ フィールドの設定 4-61
- リソースのクローズ 4-35
- 例外リスナ
 - セッション 4-48
 - 接続 4-44

ろ

- ロールバックしたメッセージ管理 4-36
 - 再配信遅延 4-36
 - 再配信の制限 4-38

